松本市文化財調査報告No.65

松本市宮渕本村遺跡

——緊急発掘調査報告書——

（遺　構　編）

1986.3

松本市教育委員会

松本市宮渕本村遺跡

——緊急発掘調査報告書——

（遺　構　編）

信州大学附属図書館
定期刊行物

1986.3

松本市教育委員会

国道147号線
篠ノ井線
大糸線
奈良井川
宮渕遺跡
国道19号線

古　墳　全　景

第５号住居址（南から）

第５号住居址（西から）

序

宮渕本村遺跡は古くより弥生時代の遺物を出土している場所として知られており、特に塩尻市柴宮で完形の銅鐸が発見されるまでは、信州で唯一の銅鐸片を出土した遺跡であり、考古学者の注目の地でもありました。

この地は昭和45年、水道局による配水管敷設工事に際し、藤沢宗平先生らによって発掘調査され、弥生時代の集石を検出しておりますが、それに接して、今回下水道処理場の拡張工事が行われることとなり、下水道部と連繋をとりながら発掘調査を行いました。

調査は6月初めより9月末日まで4ヶ月の長きにわたり、多くの方々のご協力により完了できました。途中8月初めには深志高校地歴会考古班の諸君に部活動の一環として調査に加わっていただきました。その結果、弥生時代住居址41軒、古墳時代住居址2軒、古墳1基など数多くの遺構を検出し、また夥しい土器の出土をみました。本年度はそれらのうち、遺構編のみをまとめましたが、まだ周辺地域の調査が予定されておりますので、遺物編については全体の調査終了時に報告書としてまとめたいと思っております。

本調査は酷暑の時期もあり、調査員、作業員の方々には大変ご苦労をいただきました。記して感謝申し上げます。また周辺町会の方々にも何かとご迷惑をおかけいたしました。これまた文化財保護にご協力いただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

本書が歴史解明に少しでもお役に立てば幸いです。

昭和61年3月

松本市教育委員会

教育長　中　島　俊　彦

例　　言

1．本書は昭和60年6月1日より9月30日にわたって実施された松本市宮渕本村に所在する宮渕本村（みやぶちほんむら）遺跡の緊急発掘調査に関する報告書であり、遺構編と遺物編からなるうちの遺構編である。

2．本調査は松本都市計画下水道事業北部公共下水道汚泥処理場建設に伴うもので、松本市教育委員会が行ったものである。

3．本書の編集は事務局が行った。執筆は、第1章第3節　小口妙子、第2章第1節　太田守夫、第3章第2節　神澤昌二郎、竹原学、関沢聡、第4章　神澤昌二郎、その他の項目は関沢聡が行い、文責は文末に示した。

4．本書作成にあたっての作業は次のとおりである。

遺構　製図・トレース：向山かほる、竹原学、直井雅尚、関沢聡

5．出土遺物及び遺構測量図類は松本市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　調査の経過
第１節　調査の経緯 ……5
第２節　調査体制 ……6
第３節　作業日誌 ……6
第２章　遺跡の環境
第１節　遺跡の立地と自然的環境 ……9
第２節　周辺遺跡……13
第３章　調査結果
第１節　遺跡の概要……15
第２節　遺構……17
1　住居址
(1)第１号住居址……17
(2)第２号住居址……19
(3)第３号住居址……21
(4)第４号住居址……22
(5)第16号住居址……22
(6)第５号住居址……25
(7)第15号住居址……29
(8)第６号住居址……30
(9)第11号住居址……30
(10)第７号住居址……32
(11)第８号住居址……34
(12)第12号住居址……36
(13)第９号住居址……37
(14)第10号住居址……38
(15)第13号住居址……39
(16)第14号住居址……41
(17)第17号住居址……41
(18)第18号住居址……44
(19)第20号住居址……44
(20)第19号住居址……45
(21)第21・22・23号住居址…45
(22)第24号住居址……45
(23)第25号住居址……48
(24)第27号住居址……48
(25)第26号住居址……48
(26)第28号住居址……51
(27)第32号住居址……51
(28)第29・30号住居址…53
(29)第31号住居址……55
(30)第33号住居址……55
(31)第35号住居址……56
(32)第43号住居址……56
(33)第36号住居址……58
(34)第37号住居址……59
(35)第38号住居址……59
(36)第39号住居址……59
(37)第40・41号住居址…62
(38)第42号住居址……63
(39)第44号住居址……63
(40)竪穴状遺構１……64
2　土壙……65
3　集石……66
4　溝……66
5　古墳……80
第４章　結　　び……93

挿　図　目　次

第１図　調査地の位置 ……4
第２図　段丘地層断面、地質構造……10
第３図　周辺遺跡図……12
第４図　調査地の範囲……14
第５図　第１・２号住居址……18
第６図　第１号住居址・集石１
　　礫・遺物出土状態……19
第７図　第３号住居址……20
第８図　同、礫・遺物出土状態……21
第９図　第４・16号住居址……23
第10図　同、礫・遺物出土状態……24
第11図　第５・15号住居址……26
第12図　第５号住居址土器・礫出土状態…27
第13図　同、遺物出土状態・同、炉……28
第14図　第６・11号住居址……31
第15図　第６号住居址炉……32
第16図　第７号住居址……33
第17図　同、礫・遺物出土状態……34
第18図　第８・12号住居址……35
第19図　第12号住居址炉……36
第20図　第９号住居址……37
第21図　第10号住居址……38
第22図　第13号住居址……39
第23図　第14号住居址
　　同、礫・遺物出土状態……40
第24図　第17号住居址……42
第25図　第18・20号住居址・溝１……43
第26図　第19号住居址……44
第27図　第24号住居址……46
第28図　第25・27号住居址……47
第29図　第26号住居址……49
第30図　同、遺物出土状態……50
第31図　第28・32号住居址……52
第32図　第29・30号住居址・溝２……53
第33図　第31号住居址……54
第34図　第33号住居址……55
第35図　第35・43号住居址……56
第36図　第36号住居址……57
第37図　同、礫・遺物出土状態……57
第38図　第37号住居址……58
第39図　第38号住居址・溝３……60
第40図　第39号住居址
　　同、礫・遺物出土状態……61
第41図　第40・41号住居址……62
第42図　第42号住居址……63
第43図　第44号住居址……64
第44図　竪穴状遺構１……64
第45図　土壙（１）……67
第46図　土壙（２）……68
第47図　土壙（３）……69
第48図　土壙（４）……70
第49図　土壙（５）……71
第50図　土壙（６）……72
第51図　土壙（７）……73
第52図　土壙（８）……74
第53図　土壙（９）……75
第54図　土壙（10）……76
第55図　土壙（11）……77
第56図　土壙（12）・集石（１）……78
第57図　集石（２）……79
第58図　古墳全体図……81
第59図　墳丘内埋葬施設……83
第60図　周溝内埋葬施設……89
第61図　周溝内遺物出土状態……91

図　版　目　次

巻頭カラー

第１図版　調査地風景
第２図版　住居址（１）
第３図版　住居址（２）
第４図版　住居址（３）
第５図版　住居址（４）
第６図版　住居址（５）
第７図版　住居址（６）
第８図版　住居址（７）
第９図版　住居址（８）
第10図版　住居址（９）
第11図版　住居址（10）
第12図版　溝・土壙（１）
第13図版　土壙（２）・集石
第14図版　古墳（１）
第15図版　古墳（２）
第16図版　古墳（３）

表　目　次

住居址一覧表……95
土　壙一覧表……97

附図　宮渕本村遺跡全体図

第1図　調査地の位置

第1章　調査の経過

第1節　調査の経緯

宮渕本村遺跡は松本市宮渕本村に所在し、従来、宮渕遺跡あるいは宮渕二ツ塚遺跡として知られてきた。古くは『松本市史　上巻』(1)（1933）に本遺跡出土の遺物が紹介されているように、以前から遺跡内の畑で縄文時代～平安時代にかけての土器・石器等が表採されてきた。また小字には「二ツ塚」を残し、実際に数基からなる古墳群が存在しており、明治初年には、そのうちの1基が発掘され、玉・刀類が出土したと伝えられている(1)。現在、宮渕古墳群(2)は建設工事等によってそのほとんどが失われ、その詳細は明らかではない。なお、『長野県史・考古資料編　全1巻(1)　遺跡地名表』(3)（1981）には、二ツ塚1号・2号墳の2基が掲載されている。

本遺跡は過去（昭和39年、45年）2度にわたる発掘調査が実施されている(4)。いずれも短期間で小面積の調査であったが、弥生土器、土師器を含む集石遺構が検出されている。

また、出土地点及び出土状況等の詳細は不明であるが、宮渕本村二ツ塚からは銅鐸の鈕の一部が出土しており(5)、本遺跡が銅鐸祭祀圏の端に位置していたと考えられている。

以上のように、本遺跡は以前から周知の遺跡で、多量の土器・石器や、銅鐸をはじめとする貴重な遺物を出土しており、古墳や発掘による数基の集石遺構の存在が確認されている。しかし、遺跡の性格等は充分把握されていなかった。

ところが、このたび松本市宮渕本村96番1先から232番1先までの畑に、松本都市計画水道事業として北部公共下水道汚泥処理場を建設することとなり、当該地内の遺跡が破壊されるおそれが生じたため、発掘調査団を編成し、緊急発掘調査を実施、記録保存を行うことにした。発掘は昭和60年6月1日から9月30日にわたって実施された。発掘整理作業は、調査途中から併行して行なわれ現在も継続中である。

註　(1)『松本市史』　松本市役所　1933

(2)『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌㈡　歴史（上）』　1973

(3)『長野県史・考古資料編　全1巻(1)　遺跡地名表』　長野県史刊行会　1981

(4)『宮淵二ツ塚遺跡発掘調査報告』　松本市教委　1971

(5)　大場磐雄「信濃国の銅鐸と鉄鐸」『信濃』II・28　1944

桐原健「信濃国出土青銅器の性格について」『信濃』III18－4　1966

第2節　調　査　体　制

団長：中島俊彦(松本市教育長)、調査主任：神澤昌二郎、調査員：石上周蔵、大久保知巳、太田守夫、島田哲男、関沢結城、高桑俊雄、田中正治郎、西沢寿晃、三村肇、森義直、横田作重

発掘作業協力者：赤木宏壮、赤羽大三、赤羽槇子、新井敏生、石合英子、市川今朝男、伊東敏彦、乾靖子、岩垂直、大出六郎、大谷成嘉、小口妙子、小澤俊哉、小野勝近、開島八重子、加藤清司、柏原稔、川崎拓、倉科由加理、神戸正樹、小嶋健一、小林敬一、小林照代、佐々木謙司、柴田尚子、鈴木伸、瀬川長広、高野昌英、高橋知広、滝沢智恵子、竹内靖長、竹原学、田多井用章、田中頼季、土橋久子、土屋隆司、都筑佐吉、鶴川登、等々力紀子、富永亜希子、中島昭子、中島新嗣、中村繁正、中村文一、中山秀樹、浜一仁、原秀樹、藤田英博、穂刈松子、堀内福一、牧垣源勝、丸山正喜、三沢元太郎、宮坂てるみ、向山かほる、百瀬敦、矢島毅、山岸洋一

赤穂吉晴、江本正一、大野田巻雄、小沢喜久、斉田文江、谷口高作、丸山勝人、宮崎由蔵（以上新橋長寿会）

整理作業協力者：小口妙子、柴田尚子、竹原学、向山かほる

事務局：萩原博（下水道課長）、山田栄二（同課長補佐）、高坂志郎（同主事）、浜憲幸（社会教育課長）、熊谷康治（同主事）

第3節　作　業　日　誌

昭和60年6月1日（土）　晴　　発掘資材の運搬とテントの設営試掘を行なう。　作業員：瀬川他3名

6月3日（月）　晴　　Ⅰ・Ⅱ地区試掘。　作業員：瀬川他3名

6月4日（火）　晴　　重機による表土剝ぎ開始。1、2住検出　作業員：瀬川他6名

6月5日（水）　晴　　表土剝ぎ継続。住居址3軒検出。　作業員：瀬川他3名

6月6日（木）　晴　　表土剝ぎ継続。Ⅰ区西半分の検出作業終了。　作業員：瀬川他12名

6月7日（金）　曇　　重機Ⅱ、Ⅲ地区へ入る。　Ⅰ区検出作業継続。　作業員：瀬川他10名

6月8日（土）　雨　　雨の為発掘中止。テント内整理。　作業員：瀬川他2名

6月9日（日）　曇のち雨　　雨の為発掘中止。道具の手入れ。　作業員：三沢

6月10日（月）　曇一時雨　　Ⅱ、Ⅲ区の検出作業開始。　作業員：瀬川他12名

6月11日（火）　曇時々雨　　Ⅲ区検出作業継続。住居址6軒、土壙多数検出。　作業員：瀬川他15名

6月12日（水）　曇一時雨　　Ⅱ区検出作業。　作業員：瀬川他13名

6月13日（木）　雨　　雨の為発掘中止。

6月14日（金）　曇　　7、9住掘り下げ開始。Ⅰ区西北部にトレンチ設定。　作業員：瀬川他13名

6月15日（土）　曇　　2、3住掘り下げ開始。7、9住掘り下げ継続。1、3、6、7、9住周辺の再検出。第2トレンチ設定。　作業員：瀬川他13名

6月17日（月）　晴　　4住掘下げ開始。9住土層図作成。6住周辺再検出。　調査員：西沢、三村、横田　　作業員：瀬川他16名

6月18日（火）　曇　　5、6、11住掘り下げ開始。　調査員：横田　　作業員：瀬川他16名

6月19日（水）　曇　　4、5、7住掘り下げ継続。7住土層図作成。　作業員：三沢他14名

6月20日（木）　雨のち曇　　10住掘り下げ開始。

6月21日（金）　曇一時雨　　8、12住掘り下げ開始。10住掘り下げ継続。3、6、11住土層図作成。Ⅰ区東にトレンチ設定。測量用杭打ち。　調査員：横田、太田　　作業員：瀬川他18名

6月22日（土）　雨　　雨の為発掘中止。

6月24日（月）　雨　　雨の為発掘中止。

6月25日（火）　雨　　雨の為発掘中止。

6月26日（水）　曇　　3、6、11住ベルト外し。8、10、12住精査。トレンチ拡張。　調査員：横田　　作業員：瀬川他12名

6月27日（木）　曇　　3、6、7、11住掘り上げ、清掃後写真撮影。10住土層図作成。Ⅰ区北東にトレンチ増設。宮渕新橋長寿会8名奉仕作業。　調査員：横田　　作業員：瀬川他15名

6月28日（金）　雨　　雨の為発掘中止。

6月29日（土）　曇　　13、14住掘り下げ開始。10住ベルト外し3、6、11住平面図作成。平面測量を開始。　作業員：瀬川他16名

7月1日（月）　曇　　1住掘り下げ開始。7、14住土層図及び平面図作成。　調査員：横田、関沢　　作業員：瀬川他10名

7月2日（火）　雨　　雨の為発掘中止。

7月3日（水）　曇　　1住掘下げ継続。3住遺物取上げ。6、7、11、14住平面図作成。　調査員：横田　　作業員：瀬川他12名

7月4日（木）　雨　　雨の為発掘中止。

7月5日（金）　曇一時雨　　1住掘り下げ継続。4住土層図作成。6、7、11、14住平面図作成。土壙2～13半割。　調査員：大久保　　作業員：向山他7名

7月6日（土）　曇時々雨　　5、13住掘り下げ開始。3、14住床面精査。10住平面図作成。土壙2～13土層図作成。10、14住写真撮影。　調査員：横田　　作業員：瀬川他13名

7月8日（月）　曇時々雨　　5住掘り下げ継続。7住平面図作成継続。午後、土器洗い。　作業員：瀬川他15名

7月9日（火）　曇のち晴　　5住掘り下げ継続。3住床面精査7住遺物取り上げ。1、13住土層図、10住平面図作成。　調査員：大久保、横田　　作業員：瀬川他16名

7月10日（水）　曇のち雨　　5住掘り下げ継続。3住ピット検出後掘り下げ。6、11住床面精査。13住土層図作成。午後土器洗い　作業員：向山他10名

7月11日（木）　雨　　雨の為発掘中止。

7月12日（金）　曇のち雨　　5住掘り下げ継続。1住土層図、10、13住平面図作成。　調査員：横田　　作業員：瀬川他15名

7月13日（土）　雨　　雨の為発掘中止。

7月15日（月）　晴　　16住検出。15住掘り下げ継続。6、11住ピット土層図、9、13住、集石1、土壙14平面図作成。　調査員：横田、大久保、関沢　　作業員：向山他12名

7月16日（火）　晴　　5住土層図作成後ベルト外し。3住ピット半割、土層図作成後掘り上げ。4住、集石1遺物取り上げ。6、9、11住平面図作成。　調査員：横田　　作業員：瀬川他10名

7月17日（水）　晴　　5住ベルト外し。13住ピット完掘。14住床面精査。　調査員：横田　　作業員：瀬川他6名

7月18日（木）　晴　　9住ピット掘り上げ。15住ベルト外し。1、8、12住遺物出土図、7住平面図、16住土層図作成。4住レベル入れ。　作業員：瀬川他9名

7月19日（金）　晴時々雨　　午後土器洗い、図面整理。　作業員：瀬川他8名

7月20日（土）　晴のち雨　　17住掘下げ開始。5住遺物出土図作成。　調査員：横田、島田、森、田中　　作業員：瀬川他9名

7月21日（日）　晴のち曇　　17住掘り下げ継続。5住遺物取り上げ。1、2、4、8、10、12住床面精査。　調査員：島田、石上、田中　　作業員：向山他7名

7月22日（月）　曇のち雷雨　　17住掘り下げ継続。1、2住ピット半割。5住床面精査。7住炉検出。　作業員：瀬川他10名

7月23日（火）　曇のち晴　　4住床面精査。5住床面掘り下げ。8、12住清掃。17住土層図作成。　作業員：瀬川他7名

7月24日（水）　晴　　5住床面掘り下げ継続。1、17住床面精査。4住遺物取り上げ。8、12住写真撮影。　作業員：瀬川他8名

7月25日（木）　晴　　5住遺物出土図、4住平面図、2住集石平面図作成。17住ピット完掘後平面図作成。　調査員：横田　　作業員：向山他3名

7月26日（金）　晴　　2住床面精査。5住遺物取り上げ。17住埋甕炉掘り上げ。16住平面図作成。　作業員：向山他3名

7月27日（土）　晴　　17住南へ拡張。5住遺物取り上げ継続。2、16住平面図作成後精査。　調査員：島田、関沢　　作業員：向山他3名

7月29日（月）　晴　　5住遺物取り上げ終了。2住平面図作成。作業員：向山他4名

7月30日（火）　晴　　2住埋甕炉半割。5住床面精査後平面図作成。8、12住写真撮影。　作業員：向山他5名

7月31日（水）　晴　　本日より現場乾燥防止の為、散水を開始。作業員：滝沢他1名

8月1日（木）　晴　　Ⅱ区検出。　作業員：滝沢他5名

8月2日（金）　晴　　Ⅱ区検出継続。サブトレンチ設定。　作業員：滝沢他8名

8月5日（月）　晴　　18住、古墳周溝の掘り下げ開始。深志高校地歴クラブ、部活動の一環として本日より13日まで発掘参加。作業員：向山他24名

8月6日（火）　曇　　Ⅱ区検出継続。18住、古墳周溝掘り下げ継続。　作業員：向山他21名

8月7日（水）　曇　　19住、溝2掘り下げ開始。18住、古墳周溝掘り下げ継続。東西トレンチ設定。　作業員：向山他23名

8月8日（木）　晴　　Ⅱ区東側検出。18、19住、溝2掘り下げ継続。遣り方設定。　作業員：向山他22名

8月9日（金）　晴　　検出継続。18住、溝2、古墳周溝掘り下げ継続。19住床面精査。遣り方設定継続。　作業員：向山他27名

8月10日（土）　晴　　検出継続。18住集石平面図作成。19住土層図作成後ベルト外し。古墳主体部検出。古墳周溝より一括土器出土。　調査員：関沢　　作業員：向山他23名

8月12日（月）　曇のち雨　　テント内で土器洗い、図面整理。作業員：向山他21名

8月13日（火）　晴のち雨　　18、20住掘り下げ。溝1、土壙21平面図作成。古墳主体部掘り下げ開始。　調査員：田中　　作業員向山他14名

8月14日（水）　晴　　古墳周溝及び主体部掘り下げ継続。調査員：田中　　作業員：三沢他４名

8月19日（月）　晴　　18住床面精査。古墳周溝及び主体部掘り下げ継続。溝１写真撮影。　作業員：向山他９名

8月20日（火）　晴　　18住床面精査継続。古墳周溝掘り下げ部拡幅。主体部掘り下げ継続。19住平面図作成。　調査員：横田、関沢　　作業員：向山他12名

8月21日（水）　晴　　18住床面精査継続。古墳主体部ベルト設定後第２・３主体掘り下げ及び精査。周溝土層図作成。19住平面図作成、炉の半割。　調査員：横田、関沢　　作業員：向山他11名

8月22日（木）　晴　　重機にて排土移動。II区東側掘り下げ。土壙25掘り下げ。18住遺物取り上げ。19住床面精査。古墳主体部第４・５主体掘り下げ。　調査員：横田、関沢、三村、大久保　　作業員：向山他11名

8月23日（金）　晴　　Ⅰ区排土移動。24、25住検出。18住、土壙25平面図作成。　調査員：横田、関沢　　作業員：向山他12名

8月24日（土）　晴　　24、25住掘下げ。古墳周溝調査部拡幅。18住平面図作成。　調査員：横田、関沢　　作業員：向山他９名

8月26日（月）　晴　　25、26住掘り下げ。18住床面精査。土壙25平面図作成。古墳第４・５主体土層図作成。周溝内主体掘り下げ。調査員：関沢、西沢　　作業員：向山他10名

8月27日（火）　晴　　25、26住掘り下げ継続。土壙25、古墳主体部墓壙、第２・３主体平面図作成。　調査員：横田　　作業員：向山他10名

8月28日（水）　晴　　25、26、27住掘り下げ。18住床面精査。土壙25平面図作成。古墳周溝平面図作成。　調査員：横田　　作業員：向山他８名

8月29日（木）　晴　　25、26、27住掘り下げ継続。18住写真撮影。古墳主体部土層図、周溝平面図作成。　調査員：横田　　作業員：三沢他９名

8月30日（金）　晴　　26住掘り下げ継続。古墳第１・６主体検出後掘り下げ。25、27住、古墳周溝平面図作成。　調査員：横田　　作業員：三沢他８名

8月31日（土）　晴　　26住、古墳第６主体掘り下げ継続。25、27住、古墳周溝平面図継続。周溝内主体土層図作成後掘り上げ。作業員：滝沢他６名

9月２日（月）　晴　　26、27、28住掘り下げ。古墳周溝ライン追求。第６主体土層図、周溝平面図作成。　調査員：横田、関沢　　作業員：瀬川他８名

9月３日（火）　晴　　29住掘り下げ。24、25、27住ピット半割後断面図作成。古墳周溝北側掘り下げ。古墳主体部、周溝内主体写真撮影。　調査員：横田　　作業員：瀬川他７名

9月４日（水）　晴のち曇　　26、28、29住掘り下げ継続。24、25、27住ピット全掘後写真撮影。古墳周溝土層図作成。　調査員：横田　　作業員：向山他５名

9月５日（木）　晴　　26住掘下げ継続。26、29、30住土層図作成。古墳周溝内礫レベル。　調査員：横田　　作業員：向山他４名

9月６日（金）　晴　　30住、溝２掘り下げ開始。29住床面精査26住、土壙５平面図作成。　調査員：横田　　作業員：向山他５名

9月７日（土）　晴のち雨　　28、31住掘り下げ。26住遺物取り上げ。29、30住、溝２土層図作成後ベルト外し。土壙５礫のレベル入れ。古墳主体部埋土水洗い。　作業員：向山他５名

9月９日（月）　曇　　土壙31掘り下げ。土壙５半割。26住遺物取り上げ終了後床面精査。29、30、溝２平面図作成。古墳主体部埋土水洗い継続。　作業員：向山他４名

9月10日（火）　曇　　31、32住掘り下げ。土壙５全掘。31住土層図作成後ベルト外し。埋土水洗継続。　作業員：三沢他４名

9月11日（水）　雨時々曇　　埋土水洗継続。土器洗い、図面整理。　作業員：向山他１名

9月12日（木）　曇時々雨　　28住掘下げ。土壙37～51半割、土層図作成。31住平面図作成。26住写真撮影。作業員：向山他４名

9月13日（金）　晴　　28、32住掘り下げ継続。31住周辺土壙掘上げ後写真撮影。III区36住掘り下げ開始。西側より土壙半割。　作業員：向山他８名

9月14日（土）　晴　　28住、31住ピット掘下げ。36、37住、土壙９、12、14、15掘下げ。　調査員：関沢　　作業員：向山他９名

9月17日（火）　晴のち曇　　33、37、38住掘り下げ開始。28住集石６写真撮影。Ⅰ区10住拡張。　作業員：向山他８名

9月18日（水）　曇時々雨　　33住、土壙54平面図作成。III区38、39住掘り下げ。　作業員：瀬川他９名

9月19日（木）　曇時々小雨　　28住、集石６平面図作成。33住写真撮影。III区39住掘り下げ継続。土壙土層図作成。　作業員：向山他６名

9月20日（金）　小雨のち晴　　28、32住、集石６写真撮影。III区39住、土壙69～73掘り下げ。42、38住土層図作成後土手外し。42住平面図作成。　作業員：瀬川他12名

9月21日（土）　晴　　33住ピット掘り下げ。III区36住平面図作成後遺物取り上げ。39住土層図作成後ベルト外し。42住遺物取り上げ。　作業員：瀬川他６名

9月25日（水）　曇　　34、36住遺物取り上げ後床面精査。39住平面図作成。　作業員：瀬川他５名

9月26日（木）　晴　　36住ピット掘り下げ、埋甕炉半割。38、39住遺物取り上げ。２、10住写真撮影。　作業員：瀬川他８名

9月27日（金）　晴　　39住落ち込み掘り下げ。37、38住床面精査。36住掘り上げ。全土壙写真撮影。２、10住平面図作成。　作業員：瀬川他８名

9月28日（土）　曇のち雨　　39住落ち込み掘り下げ継続。37、38住平面図作成。資材整理。　作業員：瀬川他６名

9月30日（日）　曇のち晴　　39住掘り下げ。37住ピット平面図38住ピット土層図、39住平面図作成。Ⅰ区ピット群平面図作成後写真撮影。　作業員：瀬川他９名

第2章　遺跡の環境

第1節　遺跡の立地と自然的環境

1　位置と周辺地形

本遺跡は松本市宮渕本村の北西に接し、同じ地形面上にある。宮渕本村ののる地形面は、城山丘陵の南端の分離した台地の形にみえるが、地形的には奈良井川右岸の河岸段丘である。遺跡は海抜585～590m、段丘面の最も高い場所に広がっている。

この段丘面は宮渕新橋へ続く地形面であるが、過去数回にわたり破壊や地形変更が加えられている。篠ノ井線の開通、大糸線の開通、松本市下水道センター建設、国道19号線の開通等は大きな変更であった。遺跡もその都度に破壊されて、現在に至っている。特に大正4年（1915年）大糸線（当時信濃鉄道）の開通と戦後の松本市下水道センターの建設は、段丘面を横断の上、広い面積を取去っている。残存の地形面から復元してみると、宮渕本村―新橋段丘は、本遺跡面を第一、本村周辺と新橋を第二段丘として、ゆるく北へ傾斜している。城山丘陵とは崖錐（がいすい）性の堆積物で連っていたと考えられる。従って第一段丘（遺跡の面）は大糸線の開通、次いで下水道センターの建設で半分は取去られていると推定される。

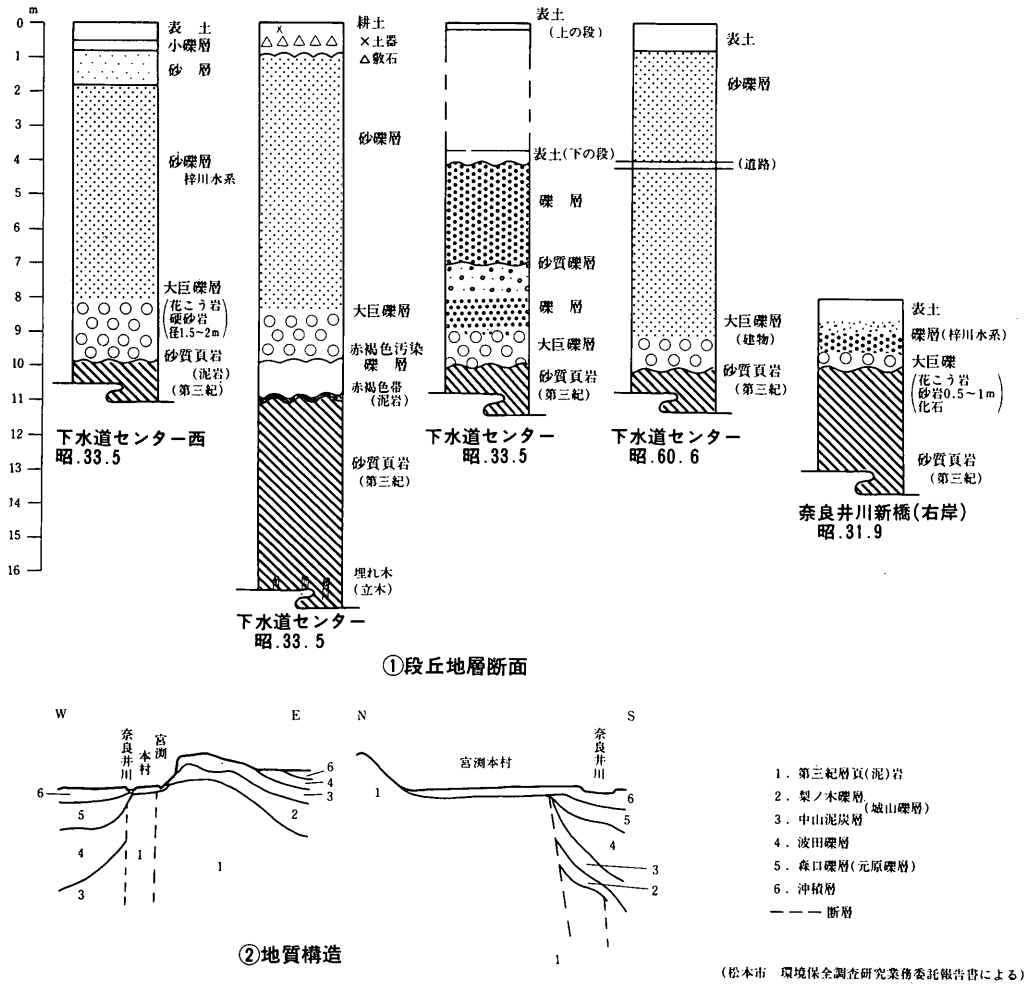
2　遺跡の立地と地質

宮渕本村―新橋段丘は、奈良井川の右岸段丘として形成されたものであるが、地層は梓川によって運ばれた堆積物からなっている。地質構造的には複雑な地域である。

まず地層からみていくことにする。基盤層は第三紀層頁（泥）岩〔別所累層―砂質頁（泥）岩、黒色頁（泥）岩〕で、その上に梓川の扇状地性堆積物が厚く堆積している。第2図①はその地層断面で、昭和33年（1958年）下水道センター建設当初に観察したものと今回のものを示した。昭和27年（1952年）にも同様の堆積を、本村集落の南西側、奈良井川の攻撃斜面に当る段丘崖（がい）で観察し、花こう岩の巨礫と厚い砂礫層の取扱いに戸惑った。

地層に含まれる岩石は、硬砂岩、砂岩、粘板岩とホルンフェルス・チャート・珪（けい）岩・輝緑ぎょう灰岩・花こう岩・安山岩・ひん岩の類である。

遺跡と関係をもつ地層は、表層の深さ1mの部分である。細・小・大礫が混ざった土層で、発掘地区内でも表面に砂、細礫が目立ち、下層より静かな堆積状況が観察される。砂・細礫の帯状堆積の方向は、大体西北西に当る。昭和33年の調査の時には、表層から赤ぬりの土器と敷石を発見してい



第２図　段丘地層断面①　地質構造②

る（現在の下水道センターの建物の上付近）。

ここで問題になることとは、宮渕本村の地形面が、いつごろできたかということである。既にこの段丘上では、縄文中期末～後期中ごろの遺物（土器・打製石斧・石皿・凹石）が発見され、報告されている。また城山面、元原面の段丘面にも、縄文時代の遺物が発見されている。従って縄文中期にはこの地形面は、既にあったものと考えられる。ただ地形面の広さや、高さは明らかにできない。以後弥生時代、古墳時代にも生活が営まれているが、地形の変化が常に働いていると思われるので、現在より地形面は、低地や河流に対し低く、周辺にゆう水もあって、地理的条件に恵まれていたと思われる。

3　宮渕本村段丘の形成

松本市の市街地の低湿地は過去に、旧深志湖と呼ばれる湛水湖をもったり、扇状地の扇端部でデルタ性堆積が行われ、沼沢化したりしたことが、再三あったとされている。この湛水湖や沼沢地の成因には、多量な扇状地の堆積物（主として梓川）による堰止と、造盆地運動にともなう沈降とが考えられている。宮渕本村段丘の形成は、この堰止の終了によって（梓川の北流、沼沢地の陸化、犀川の上流浸食があげられる）流入河川の排水量が増加し、周辺特に西側に浸食の復活が始まったことによると考えられる。

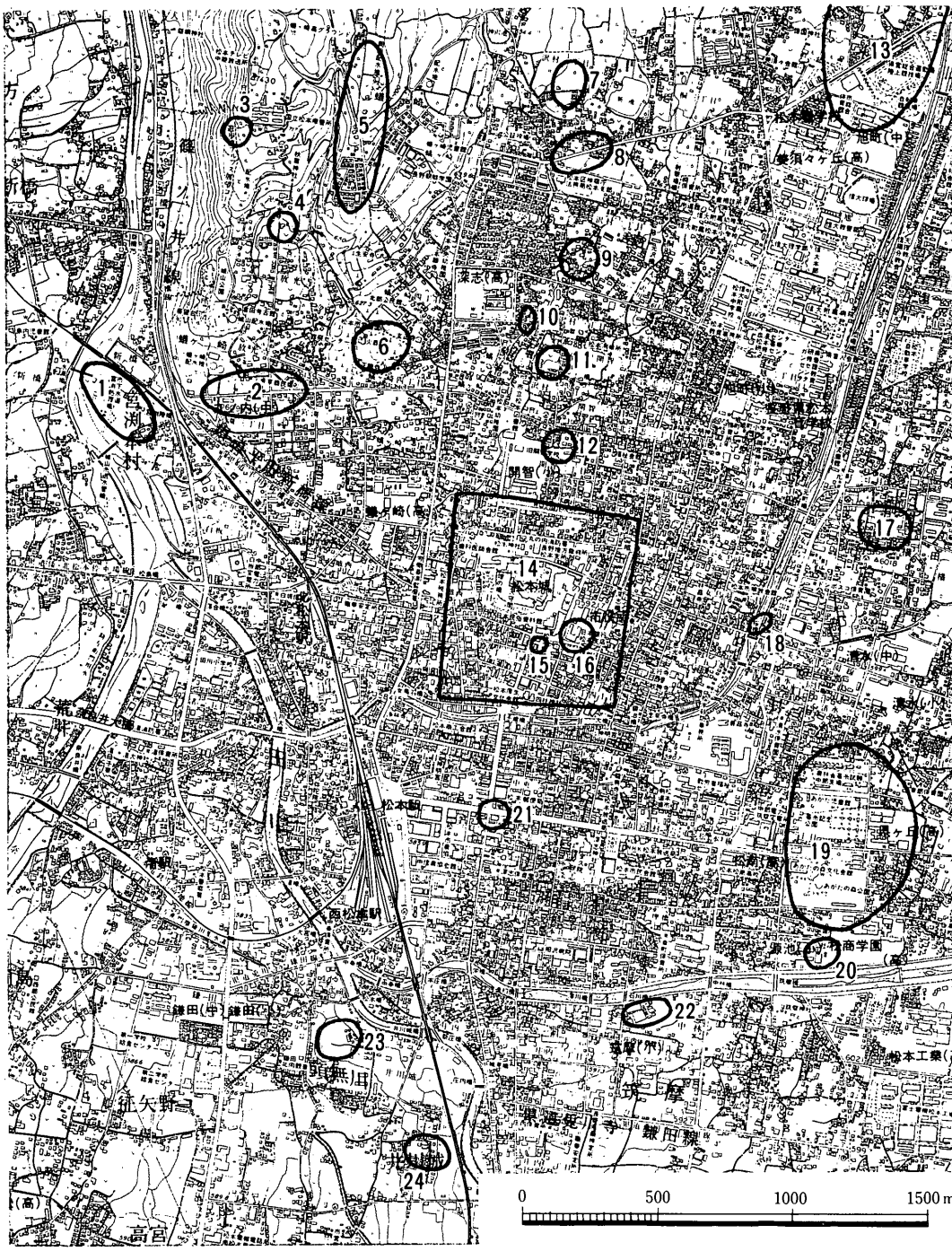
一方、宮渕本村段丘の地層は、前に述べたように、基盤の第三紀層頁（泥）岩に、沖積層の梓川扇状地性堆積物が厚くのっていて、洪積世堆積物を欠いている。また基盤の頁（泥）岩層は表面に河食を受け、梓川堆積物の沖積層とは不整合の関係にある。

この堆積状況を段丘の周辺と比較してみると、その形成過程は基盤層、梨ノ木礫層、中山泥炭層（寿礫層）、波田礫層、森口礫層（以上洪積層）、沖積層の順である。現在これらの地層は地殻変動により、隆起、沈降、断層、傾動の為変位している（第２図②）。松本盆地中央や松本市市街地の低湿地では地下に、城山やその周辺では、梨ノ木礫層・中山泥炭層に相当する城山礫層や、森口礫層に相当する元原礫層（いずれも洪積層で女鳥羽川系）が、高位面として存在する。宮渕本村の北東方向約300mにも、元原礫層が段丘崖となって向い合っている。

さて、湖沼や沼沢地の形成は、現在、中山泥炭層堆積期（洪積世後期初）と盆地の東縁に断層が形成され、地盤の沈降により波田礫層が多量に堆積された洪積世後期中ごろがあげられている。これに対する浸食の復活は、何回起ったか明らかにできないが、宮渕本村段丘の地層に洪積層のないことや、基盤層に河食があって、沖積層と不整合であることは、波田礫層、これに続く森口礫層の堆積後、沖積層の堆積前に、少なくも一回の浸食の復活が考えられる。すなわち、波田・森口礫層を削はくし、基盤層を露出させた浸食である。また宮渕本村をかこむ断層は、洪積世後期中ごろであり、松本盆地の沈降も継続されていたので、これにも浸食の復活の原因があったかもしれない。この削はくがあって、再び堆積されたものが、沖積層と考えられる。この沖積層が再び前記のような湛水を生み、やがて沼沢化あるいは陸化の時点で、再び浸食の復活を起し、現在の奈良井川の河岸でみるような基盤（横ずれ断層によって、島内寺下、山田付近にあるものが南方へ移動した）を露出させ、宮渕本村の段丘崖を形成した。このようにみてくると、宮渕本村段丘の形成時期は、沖積世の初めから縄文時代の早いころまでと考えられる。この形成時期を特に考察してみたのは、地形面と遺跡・遺物の関係を知りたいためである。島立南栗・北栗段丘、島内町・平瀬川西段丘も、その形成時期が推定できるようになってくる。　（太田守夫）

参考文献

松本盆地団体研究グループ：松本盆地の第四紀の地質
松本市：環境保全調査研究業務委託報告書



1.宮渕本村　6.蟻ヶ崎　11.沢　村　16.日本銀行　21.本町五丁目
2.城山腰　7.狐塚　12.田　町　17.古屋敷　22.筑　摩
3.鳥井山　8.旧射的場西　13.水汲古墳群　18.女鳥羽川　23.井川城址
4.放光寺　9.沢村北　14.松本城　19.あがた　24.小鳥
5.峰ノ平　10.饅頭塚古墳　15.大名町信用金庫　20.埋　橋

第3図　周辺遺跡図

第2節　周辺遺跡

宮渕本村遺跡は、東を城山丘陵下の大糸線が通過する低地で、西を奈良井川に画された台地上に位置している。今回の調査によって、本遺跡から40数軒の弥生時代を中心とする集落址及び、古墳1基が検出された。そこで、これらの時代を中心に、周辺遺跡を概観する。

本遺跡の北東に位置する城山からは、旧石器時代の槍先形尖頭器が出土している。縄文時代に入ると、前期には城山腰遺跡がある。中・後期になると城山腰・放光寺・峰ノ平・旧射的場西・田町遺跡など、城山山麓周辺で遺跡数が増加する。本遺跡でも、以前から中期末～後期にかけての遺物が出土している。後・晩期になると山麓のほか、日本銀行松本支店（丸の内遺跡）・女鳥羽川遺跡といった低地の遺跡がみられる。特に、女鳥羽川遺跡は昭和45・46年に調査され、後・晩期の土器、石器のほか、動植物遺体が検出されている。

弥生時代になると、中期前半の土器が城山腰及び本遺跡に近接する白板踏切付近から出土している。中期後半以降、遺跡数は増加し、城山山麓付近には、城山腰・放光寺・峰ノ平・沢村・沢村北遺跡がある。城山腰を除いて、土器、石器の断片的資料しか知られてないが、これらの遺跡においても当時、小規模な水田経営が行われていたと考えられている。河川沿辺低地の遺跡としては、宮渕本村・松本城（本丸下より太形蛤刃石斧出土）・あがた・筑摩・小島遺跡がある。しかしながら、本遺跡とあがた遺跡を除くと、断片的な遺物の出土のみで遺跡の内容については不明のものが多い。なお、本遺跡は、薄川・女鳥羽川と合流した田川が奈良井川に合流する地点から約500m下流の右岸に位置している。本遺跡の北方及び奈良井川左岸には弥生時代の遺跡は稀薄であり、今後、水系と遺跡の分布・立地・規模等を総合的に考えていかなくてはならないだろう。

古墳時代では、城山～蟻ヶ崎周辺にかけて古墳の分布がみられる。正式な発掘が少ない為、内部構造・時期等不明なものが大半である。副葬品が判明しているものとして、直刀・剣・鉾・玉類・石製刀子が出土した饅頭塚、石釧が出土した城山腰の勢多賀神社裏古墳、眉庇付冑が出土した放光寺開き松古墳がある。また、女鳥羽川右岸の段丘上には、現在4基の積石塚を残す水汲古墳群があり、あがた遺跡内には、あがた塚1・2号墳があるが詳細は不明である。なお、本遺跡の古墳とほぼ同時期の古墳として、浅間の桜ヶ丘古墳がある。昭和30年に調査され、石室内から直刀・剣・鉾・衝角付冑・短甲・頸甲・天冠・櫛等が出土している。

参考文献

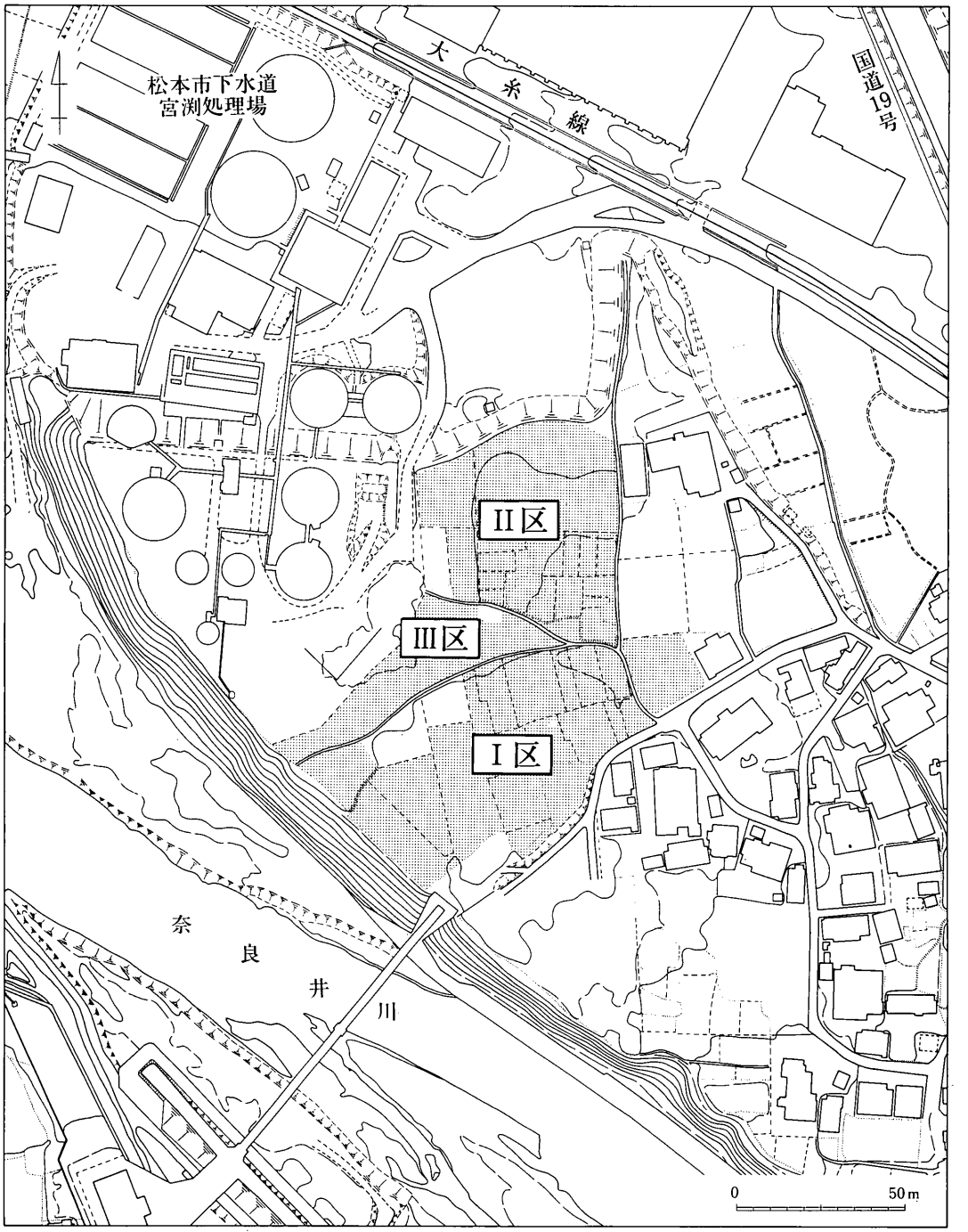
『松本市史』上巻　松本市役所　1933

『信濃浅間古墳』　本郷村教育委員会　1966

『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』　1972

『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌　第二巻　歴史上』　1973

『長野県史　考古資料編　全一巻㈠遺跡地名表』　長野県史刊行会　1981



第4図　調査地の範囲

第3章　調　査　結　果

第1節　調査の概要

1．調査方法

今回の調査対象地は、松本市宮渕本村96番1先～232番1先に所在し、調査面積は8,430m²である（第4図）。そのうち、実際に除土し遺構検出を行った発掘面積は3,900m²である。調査地の現状は畑で、中央には南西に延びる農道と、途中から枝分かれして西北西に延びる農道の2本があり、また、中央西寄りに調査対象外の畑があることから、Ⅰ～Ⅲ区の調査区を設定して発掘を実施することにした。Ⅰ区は、農道及び調査区域外の畑の南側に位置する面積1820m²、Ⅱ区は、2本の農道の北側に位置する面積1770m²、Ⅲ区は2本の農道間に位置する面積310m²の調査区である。

調査はまず重機によって、遺構検出のため耕作土の除去を行った。その後、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の順で遺構検出、発掘を実施した。また、遺構測量のため、調査地を3×3mの方眼で覆うことにした。そこで、Ⅱ区に基準点を設定して、その点から南北及び東西に基準線を振り出し、それから更に3m毎に直交する線を振り出して、調査地全体を3m方眼で覆った。なお、当初Ⅰ区では2×2mの方眼設定で行われていたが、報告書作成段階で、Ⅱ・Ⅲ区に合わせて3mの方眼設定に図上復元している。調査地点及び方位はこの方眼の交点をもって表される。方眼の交点は、方位を示すN・S・E・Wと基準点からの距離によって示される。

本報告書では、遺跡全体図及び各住居址実測図中でこの表記方法をとり、古墳及び土壙・集石実測図には掲載の都合上、方位のみで表記している。

2．調査結果（附図）

本遺跡では、畑耕作時の攪乱及び礫を多量に含む地形的条件のため、遺構検出が困難であった。特に、Ⅱ区においては、重機による遺構検出時の削平により、遺構覆土の大半が失われてしまい、検出、切り合い関係の把握に困難を窮めた。

遺構としては、竪穴住居址43軒（第34号住居址が欠番のため、第44号住居址まである。）、竪穴状遺構1基、土壙100基（土壙3、59が欠番のため、土壙102まである。）、集石遺構5基、溝3本、古墳1基が検出された。

竪穴住居址はⅢ区の2軒が古墳時代後期と推定されるほかは、総て弥生時代の住居址である。住居址の時期は中期後半～後期末にかけてのものがあるが、特に中期後半～後期前半（栗林～吉田式）に属する住居址が多い。住居址のプランには楕円形・隅丸方形・隅丸長方形等がある。炉は12軒の

住居址から14基が検出され、他に炉の可能性をもつピットがある住居址が2軒検出された。炉の内訳は、埋甕炉が9軒9基、地床炉が3軒4基、石囲い炉が1軒1基で、2基の埋甕炉と1基の地床炉には縁石がみられた。また、I区の第5号住居址は本遺跡の中でも特に注目されるものである。弥生時代後期前半の住居址である本址は火災に遭ったと考えられ、覆土～床面にかけて焼土・炭化材が出土している。さらに、住居址東半からは、土器成形～乾燥過程にあったと考えられる土器片が大量に出土し、西半では、土器製作のための台石等が原位置と考えられる出土状態で検出された。

土壙はI～III区にわたって検出されている。土壙の時期については今後の遺物整理を待たなければならない。なお、墓址と思われる土壙が2基あり、それぞれ土壙墓、土器棺墓の可能性が考えられた。集石は総て住居址覆土中において検出されており、土壙を伴うものと伴わないものに大別される。溝はII区に2本、III区に1本検出された。特に溝1は、全容を知ることこそできなかったが、コーナーをもつ溝であることから古墳、又は周溝墓に関わるものと考えられたが明確にしえない。

古墳はII区北西に位置し、西半は区域外のため調査できなかった。この古墳の墳丘には、2次にわたって埋葬が行なわれ、第1次埋葬では同一墓壙内に5基の主体部が検出された。また墳裾をめぐる周溝東から、墓壙南側ライン延長上に位置する埋葬主体1基が検出された。周溝底からは、供献されたと考えられる土師器のセットが出土している。本古墳の時期は、周溝覆土出土の須恵器、先述の土師器及び、主体部の様相から5世紀末と推定される。

なお、I区については、遺構検出のため、調査区北西に2本の平行するトレンチ（T_1、T_2）、北東に14本の井の字状トレンチ（T_3～T_{16}）を設定している。T_1・T_2は、昭和45年9月に実施された発掘調査地の北側に位置している。T_1・T_2は共に現代の畑耕作である黒褐色土の下に3cm～人頭大の礫を含む黒色土が検出され、本土層内からは、弥生土器、古式土師器等が出土している。礫の出土状況は「礫群」とも呼べる状態であったが、下層では次第に砂利層に移行していることから、人為的なものでないと考えられた。T_3～T_{16}はI区検出時に、北東部でかなりの遺物と、他よりも黒色の強い土層が観察され、当初から遺構の存在が予測されたため設定したトレンチである。トレンチの断面観察によると、この周辺は黒褐色土の耕作土の下に、遺物を含む黒色土がみられ、トレンチ北側では一部、砂利質の褐色土がこの土を切っていた。しかし、遺構を検出することはできなかった。

遺物は上記の遺構及び検出面、トレンチから多量に出土し、土器、土製品、石器、石製品、鉄器等がある。土器は弥生時代の竪穴住居址から中期後半～後期前半にわたる良好な資料が出土している。特に、土器製作工房址と推定される第5号住居址からは、土器の製作材料と考えられる粘土、成形途中の土器等が出土している。また、古墳周溝底から出土した供献土器のセットも注目される。

なお、先述のI区北東部のトレンチ内黒色土層中から、弥生時代の遺物とともに、縄文土器がかなり検出されている。宮渕本村では、以前から縄文時代中期末から後期中頃までの、縄文土器及び打製石斧・石皿等が出土しており、今後、縄文時代の遺構の発見も考えられよう。

石器には、打製石鏃、磨製石鏃、石錐、石槍、打製石斧、石庖丁、扁平片刃石斧、太形蛤刃石斧、石槌、石皿、凹石、磨石等が出土しており、弥生時代石器の良好な資料になると考えられる。石製品としては、第32・39号住居址から鉄石英製の管玉、第33号住及び、古墳の中心主体と推定される第3主体から碧玉製管玉が1点ずつ出土している。鉄器は器種不明のものが多いが、第39号住居址から鉄鏃が出土している。

なお、出土遺物に関しては、現在、遺物の水洗段階にあり、整理作業は今後に残された課題である。そのため、詳細な遺物の分布状況、遺構の時期の記述についてはやや不明確な所があるかもしれないが、御理解されたい。これらは、今後の「遺物編」で明らかにしていくつもりである。

以上が、宮渕本村遺跡の発掘調査の概要である。今回の調査によって、松本平における弥生時代集落の一部が検出されたこと、また特に、土器製作工房址である第5号住居址から弥生土器製作に関する良好な資料を得たこと、発掘による調査例が稀少な松本平で古墳を検出し、さらに特異な同時多埋葬例を明らかにしたことなどが、今回の調査の主な成果であるといえよう。（関沢　聡）

第2節　遺　構

1.　住居址

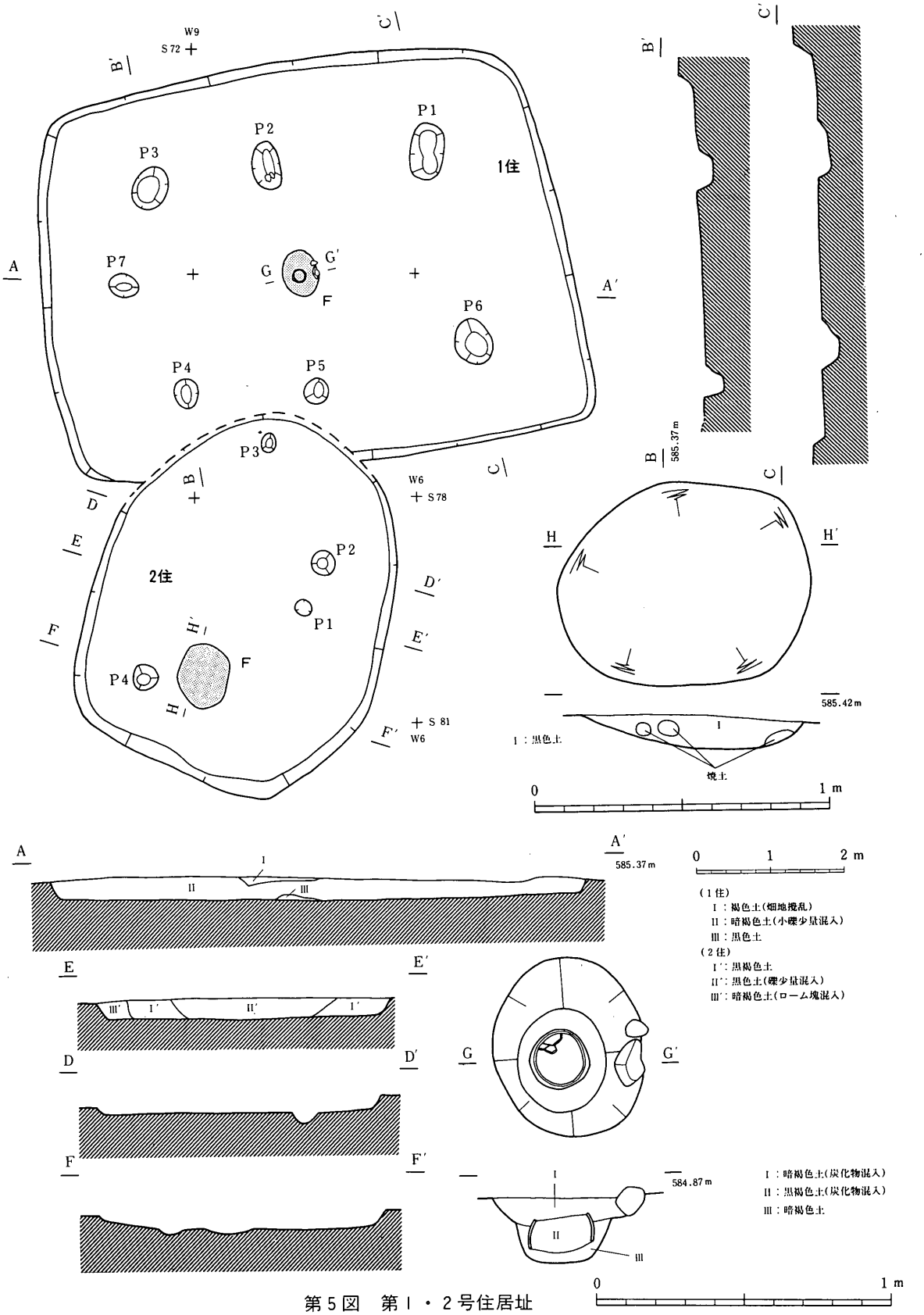
(1)第1号住居址（第5・6図）

Ⅰ区南辺やや西寄に位置し、第2号住居址に南壁の一部を切られる。プランは7.5×5.4mの隅丸長方形で、主軸方向N－82°－Eを示す。遺構は全体に良く残存しており、切り合い部分を除いて四壁とも完周する。

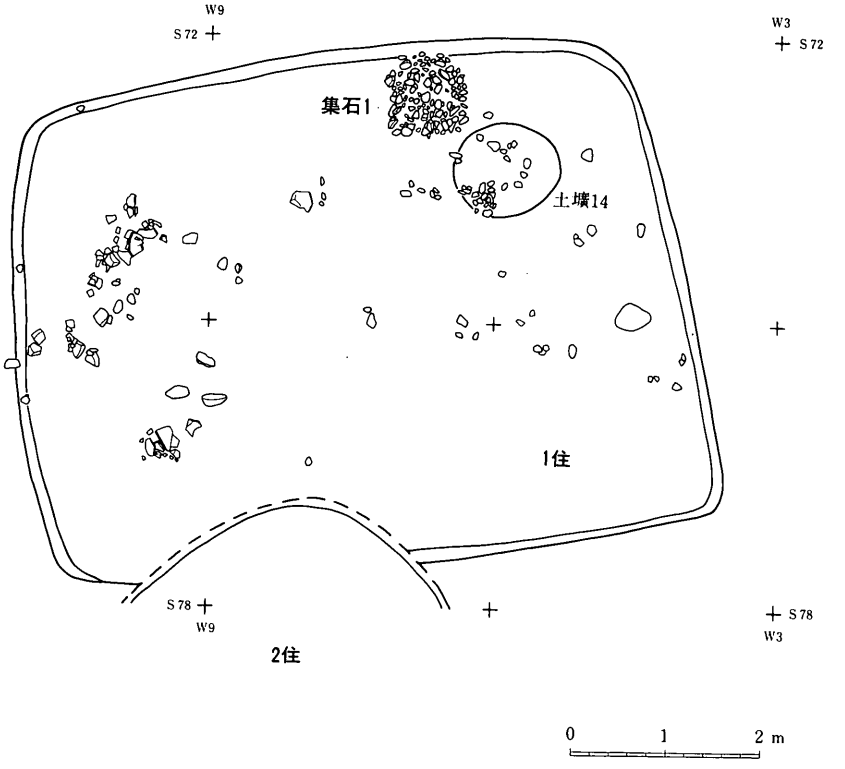
覆土は自然堆積の様相を呈するが、北東コーナー寄りには土壙14と集石1が存在する。暗褐色～黒褐色の土が堆積しており、拳大の礫を含んでいる。四壁は垂直近くに掘り込まれ、壁高は最大25cm残存している。床面はベースの砂質黄褐色土中に設けられ、平坦な面をなしている。中央付近では堅く良好である。

主柱穴はP_1からP_6の6本柱で、補助柱穴P_7が西壁下に存在する。各柱穴は南北に長い楕円形を呈し、P_1・P_2は特に顕著である。建替え等による切り合いは認められず、岡谷市橋原遺跡に見られるような板状の柱を想定することも可能である。深さは20cm前後とやや浅い。

炉は住居中央、P_2とP_5を結ぶ線上に存在する埋甕炉である。その構造は土器埋設部分と、その周囲に存する楕円形の凹面からなる。凹面は61×50cmの南北に長い楕円形を呈し、深さは9.5cmで浅い皿状の断面形をなしている。東縁には礫2個を組み，炉縁石としている。土器はその底面中央、直径32cm・深さ13cmの掘り方に埋設されている。甕形土器の胴部を用い、口縁部・底部を欠く。直径17cm、高さ10cmを測る。土器上端は住居床面より5cm、炉底は18cm低い。炉内には焼土は一切なく、炭化物を少量含んだ暗褐色～黒褐色の土が堆積している。土器も火熱を受けた形跡はほとんど見られない。


1住
2住
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
F
G
G′
W9
S72
W6
S78
S81
585.37m
585.42m
584.87m
I：黒色土
焼土
0
1 m
2 m
（1住）
I：褐色土(畑地攪乱)
II：暗褐色土(小礫少量混入)
III：黒色土
（2住）
I′：黒褐色土
II′：黒色土(礫少量混入)
III′：暗褐色土(ローム塊混入)
I：暗褐色土(炭化物混入)
II：黒褐色土(炭化物混入)
III：暗褐色土

第5図　第1・2号住居址



第6図　第1号住居址・集石1　礫・遺物出土状態

住居の入口方向は、西壁下にP_7が存在し、炉も中央より若干西に寄ることから、東側とみるのが妥当と考えられる。

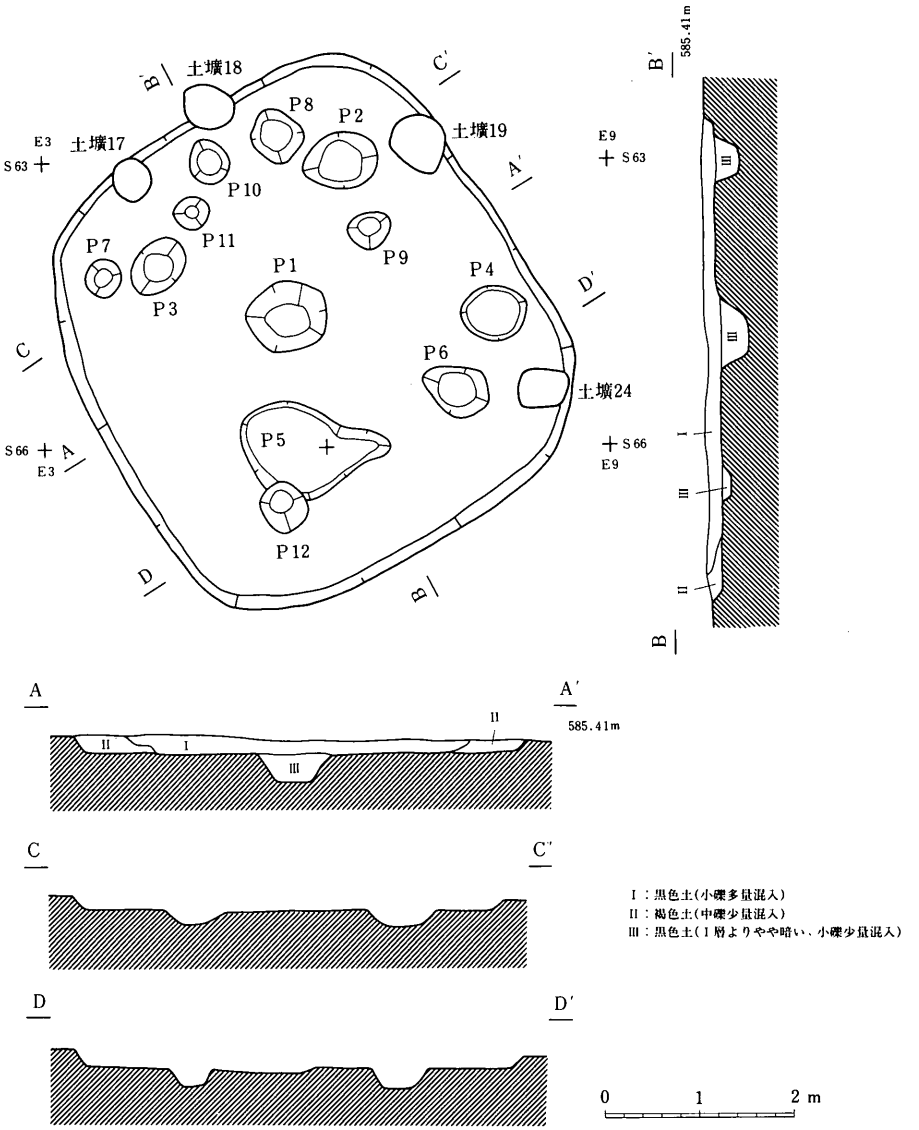
遺物は西半、特にP_3・P_4・P_7に囲まれた床面上に一括土器が集中していた。壺・甕等がある。石器は床面及び覆土中より石鏃等が出土している。

本址の所属時期は、住居形態・遺物より弥生時代中期後半と推定される。　（竹原　学）

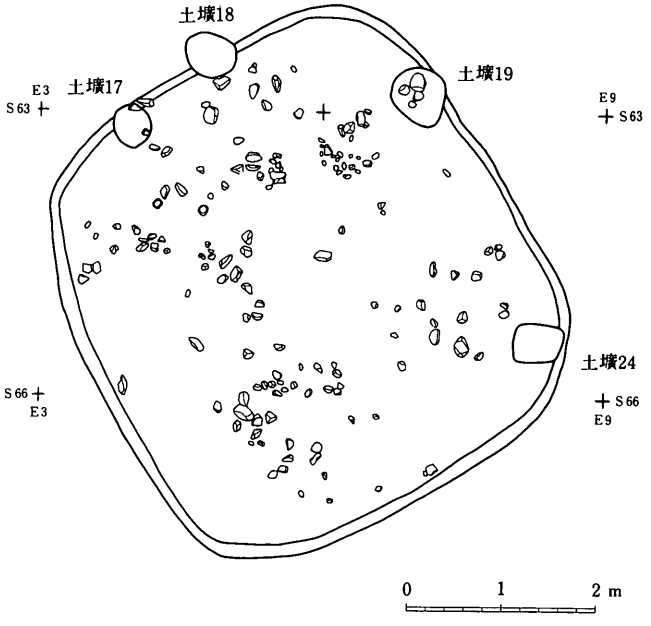
(2)第2号住居址（第5図）

I区中央の南端に位置し、第1号住居址を切っている。検出時に北側を若干掘りすぎてしまったが、主軸方向N－20°―E、5.0×4.0mの南にややふくらむ不整楕円形プランの住居址である。覆土は黒褐色土が流入したのちに小礫を全体に混入した黒色土が堆積している。この覆土中～下部には、拳大～人頭大の多量の礫が見られる。なお、住居址中央部、やや西南寄りの覆土中には、集石2がみられた。

壁は西側がやや不明瞭であるが外傾しながら立ち上っており、壁高は25～30cmをはかる。床面には7～20cm大の礫が多くみられ、ピット・炉等の検出が困難であった。ピットはP_1～P_4が検出さ


土壙18
土壙17
土壙19
土壙24
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
E3
S63
E9
S63
S66
E3
S66
E9
585.41m
585.41m
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
I：黒色土(小礫多量混入)
II：褐色土(中礫少量混入)
III：黒色土(I層よりやや暗い、小礫少量混入)
0
1
2 m

第7図　第3号住居址



第8図　第3号住居址　礫・遺物出土状態

れ、このうち南西隅のP_4と北東隅のP_2は主柱穴である可能性をもつものの、他に主柱穴に該当するピットが検出されなかった為、柱構造を知り得なかった。炉は住居址中央南寄りに地床炉が検出された。これは南北に長軸をもつ88×68cmの楕円形プランで、深さ10cmの浅い皿形を呈している。炉内の覆土は焼土を多量に混入する黒色土である。

遺物は、住居址覆土から床面かけて多量にみられる礫と混在して縄文土器、弥生土器、須恵器、石器等が出土した。本址は複数の時期にわたる遺物がみられるものの、所属時期は弥生時代後期前半と推定される。

(3)第3号住居址（第7・8図）

Ⅰ区ほぼ中央、第11号住居址の北1.6mに位置している。主軸N－30°－W、5.1×4.8mの隅丸方形プランをもつ住居址である。北西辺で土壙17・18と、北東辺で土壙19、東コーナー付近で土壙24と切り合いをもつ。土壙17～19は本住居址を切っていると思われるが、土壙24との切り合い関係は不明である。

覆土は第1次堆積土として褐色土が流入したのち、0.5～1cmの礫を多量に含む黒色土が堆積した様相を示している。壁は検出面が低いため残存高が14～18cmと浅く、立ち上りはなだらかである。床面は褐色土で、中央部は拳大までの礫を含むやや砂質を呈し、その下全面は2～20cm大の礫

を多量に含んだ砂質黄褐色土である。ピットはP_1～P_{12}が検出されているが、位置・深さ・覆土の状況から主柱穴はP_2、P_3、P_6、P_{12}と考えられる。他のピットについては、その性格をとらえることができなかった。なお、P_5は主柱穴と考えられているP_{12}に切られていることと、1.6×0.9mと他のピットよりも大きいことから住居址以前の土壙である可能性がある。本址では炉は検出されなかった。なお、住居址中央にP_1があり炉の可能性も考えられたが、その覆土は他のピットと同様に小礫を含む黒色土であり、炉とは認められなかった。

遺物は土器のほか、太形蛤刃石斧が北東壁際から、また南西部から石庖丁、石鏃が出土している。ほかに礫が壁から0.8～0.9m内側に多く分布し、特に北半に多くみられる。覆土の上～下層においては、中期後半の土器を混在していたものの本址の時期は弥生時代後期前半と推定される。

（関沢　聡）

(4)第4号住居址（第9・10図）

Ⅰ区北辺中央に位置し、北東コーナーを第16号住居址に切られる。プランは隅丸長方形で、西側5分の1程は用地外にかかる。平面規模は長辺推定6m・短辺4.4mを測り、東西に主軸をおく。

壁は3辺とも残存し、最大壁高20cmを測る。床面は黒褐色土中にあり、炉の周囲を除いて非常に軟弱であった。そのため、主柱穴はP_2を除いて確認できなかった。P_1・P_3～P_7については、その位置と形状から主柱穴とは判断し難い。

炉は床面中央に設置されている。壺形土器肩部を逆位に埋設した埋甕炉で、直径28cm・深さ16cmを測る。断面は朝顔形に強く開く形状を呈している。炉内より炭化物、焼土の検出はない。

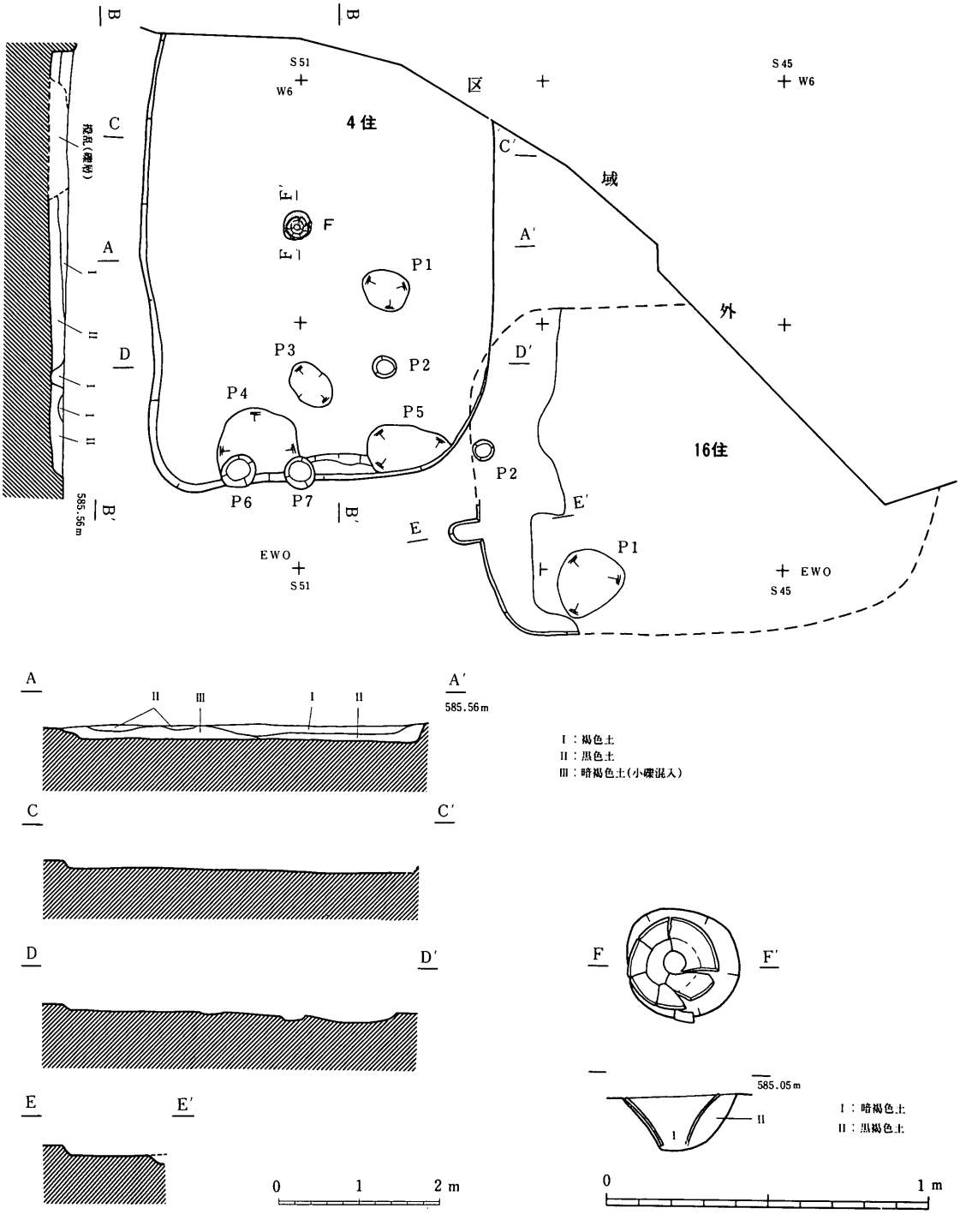
遺物は住居東半の床面上より、完形土器が多く出土した。壺・甕・台付甕がある。

本址の帰属時期は土器から見て、弥生時代中期後半と考えられる。

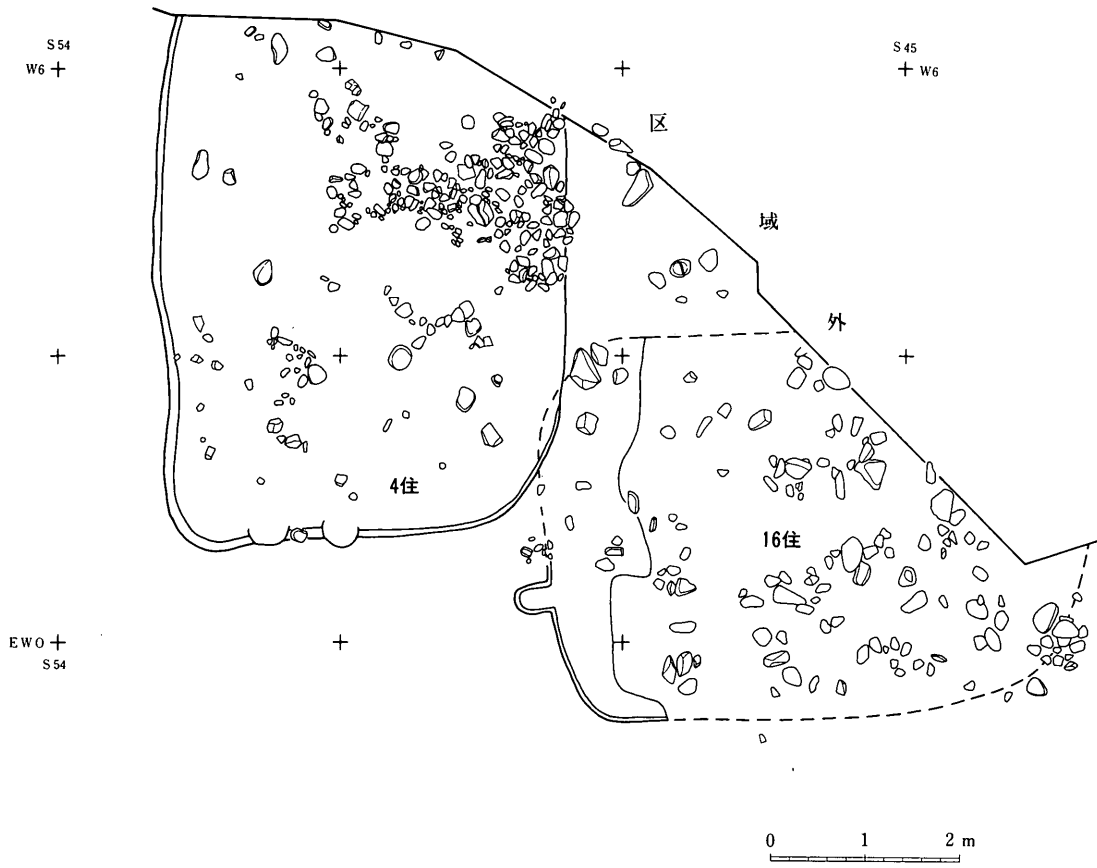
(5)第16号住居址（第9・10図）

Ⅰ区、第4号住居址の北東に存在する。本址は黒褐色土中に構築されており、遺物の出土も少なく、調査過程でその存在に気付かず大半をとばしてしまった。わずかに南端で壁及び床面を検出し、調査区界断面で北壁立ち上りを確認したにすぎない。住居プランは南北に主軸をおく、5.7×4.0m程の隅丸長方形と考えられる。南壁は高さ10cm程残存し、南東コーナーより60cmの所で、幅16cm、長さ20cmのU字形の張り出し部をもつ。床面は軟弱で、南東コーナー付近では砂利層上にある。ピットは2個存在するが、主柱穴は不明である。

本址出土の遺物は少ないが、その帰属時期は弥生時代中期後半であり、本址の時期もそこに求められよう。



第9図　第4・16号住居址



第10図　第４・16号住居址　礫・遺物出土状態

⑹第５号住居址（第11～13図）

本址はＩ区の中央やや東北寄りに存在する焼失住居である。隣接する遺構は、第８・12号住居址が東方にあり、更に第15号住の北半を切っている。遺構の残存度はきわめて良好である。

住居プランは主軸をＮ－67°－Ｅにとる楕円形で、その規模は7.0×5.0mを測る。壁は斜めに掘り込まれ、その高さは40～50cmもある。大きさ・深さ共に最大級の住居と言えよう。尚、西北隅には方形の張り出しがあり、炉の位置等から考えて入口の可能性もある。床面は小礫を多量に含む砂質土中にあり、非常に軟弱であった。平坦かつ水平な面をなしている。柱穴は合計６本検出され、このうち、主柱穴はP_1～P_4の４本で、残るP_5・P_6は支柱穴と考えられる。深さはいずれも20cm前後で、円形の掘り方である。P_5・P_6については、内部に礫をかませてあり、柱の固定を図っている。

炉は２ヶ所で検出された。F_1はP_2・P_3を結ぶ線に接して、やや中央寄りにある。70×50cmを測る楕円形地床炉で、皿形に10cm程掘りこまれている。東端底面～炉縁にかけて河原石を６個組み、炉縁石としている。F_2はF_1の東、主軸線上の壁下に存在する。直径35cm、深さ10cmの円形地床炉であるが、炉底には数片の土器片が立っていた。あるいは埋甕炉の痕跡かもしれない。２つの炉址の新旧関係は不明であるが、F_2を埋甕炉痕跡とすると、F_2からF_1への変遷が考えられる。

住居はかなり強い火災にあったらしく、覆土～床面に至るまで真黒であった。建築部材も形をとどめておらず、細片化していた。焼土はごくわずかしか検出されなかった。

さて、本址には特筆すべき点がある。それは、本住居址が他と若干性格を異にし、土器製作工房と考えるにふさわしい内容の遺物・施設を有することである。しかも、強い火災により製作途中の土器や十分に乾燥の済んでいなかったと思われる土器が、丸焼けの状態で出土している。

以下に調査で得られた事実の詳細を列記しておく。

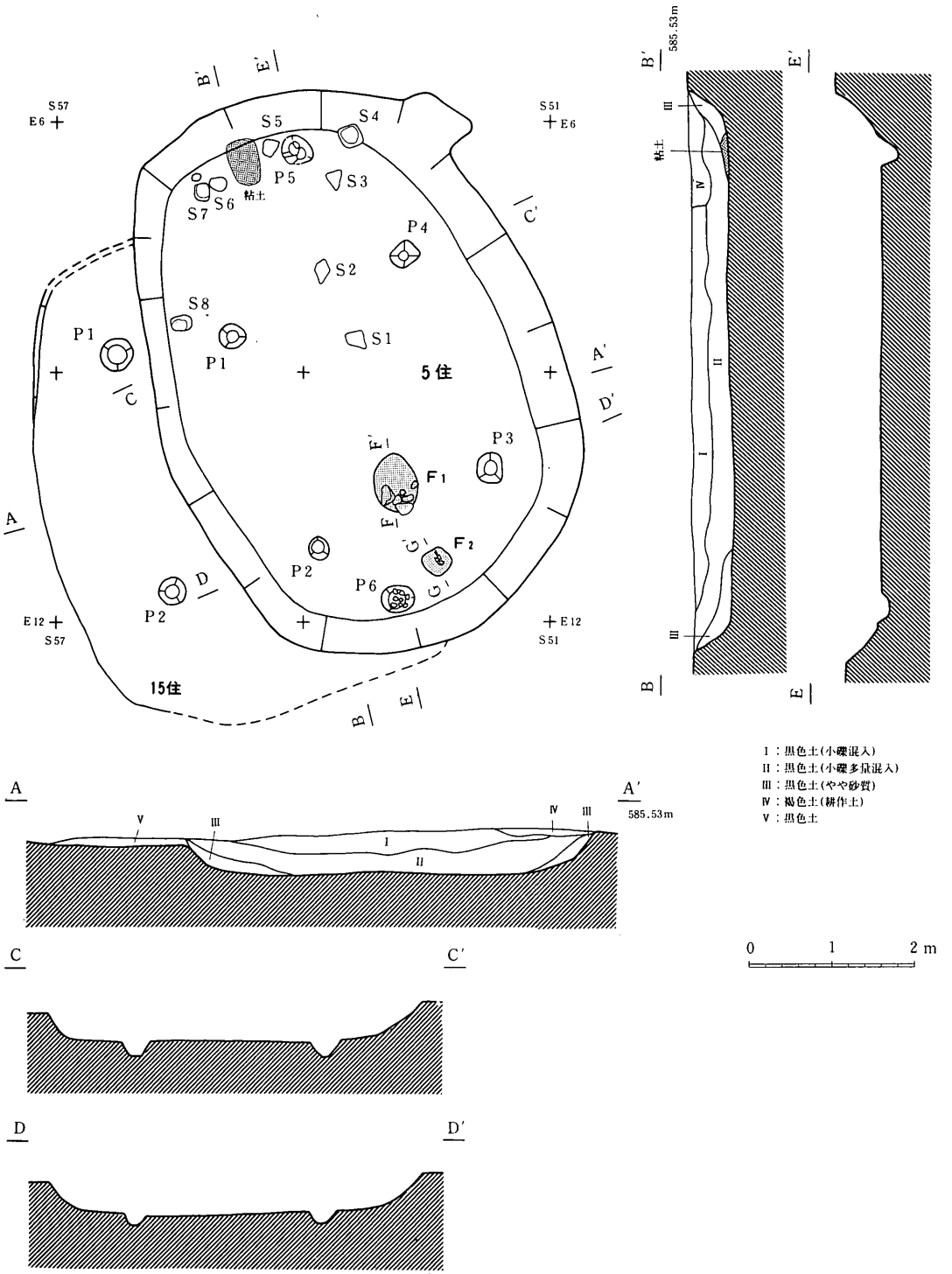
①前述の如く、住居の平面規模が大きく、床面の深さすなわち残存壁高が他住居址の倍以上もある。

②住居址西半部の床面直上に、作業台と考えられる平石が配されている。（Ｓ１～３・６～８）
その配置は、床面中央にあるもの（Ｓ１・２）、壁下にあるもの（Ｓ３・６～８）に分けられる。
これらの石材の表面は、磨滅により非常に平滑である（特にＳ１～３）。
Ｓ４は巨大な石塊で、原位置にある。上面は平坦に割ってあり（Ｓ５が接合）、何かの台とも受け取れる。特に、Ｓ３と一体になって機能した可能性がある。

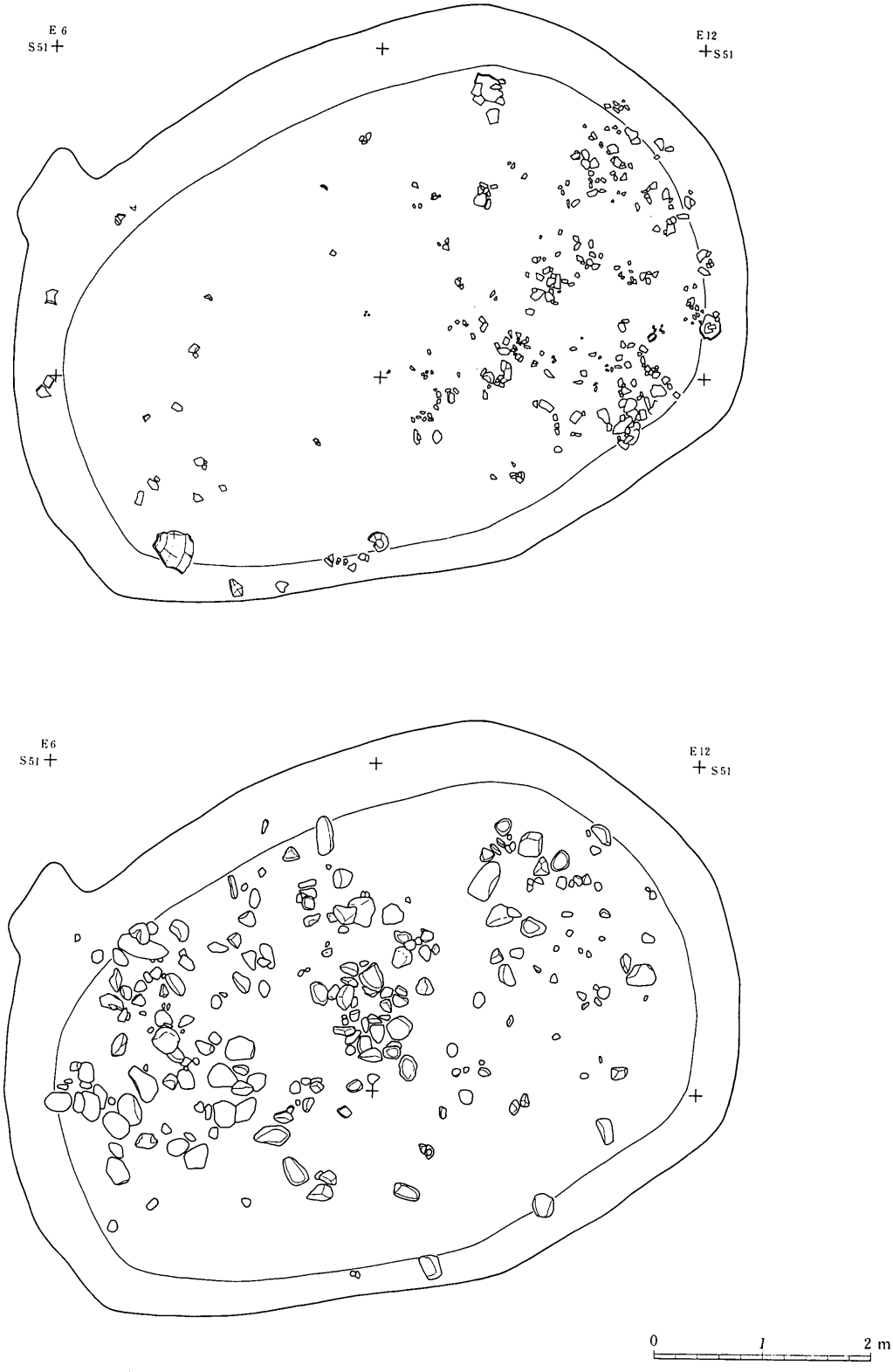
③Ｓ５の脇には、60×40cm、厚さ10cmの粘土塊が置かれている。

④住居東半部、特にF_1・F_2・P_2・P_3付近には、おびただしい量の一括土器が堆積していた。その厚さは20～30cmで、ほとんど隙間もない程に積み重なっていた（第12図）。各個体の土器は、あたかも棚から焼け落ち、潰れたような状況を呈している。

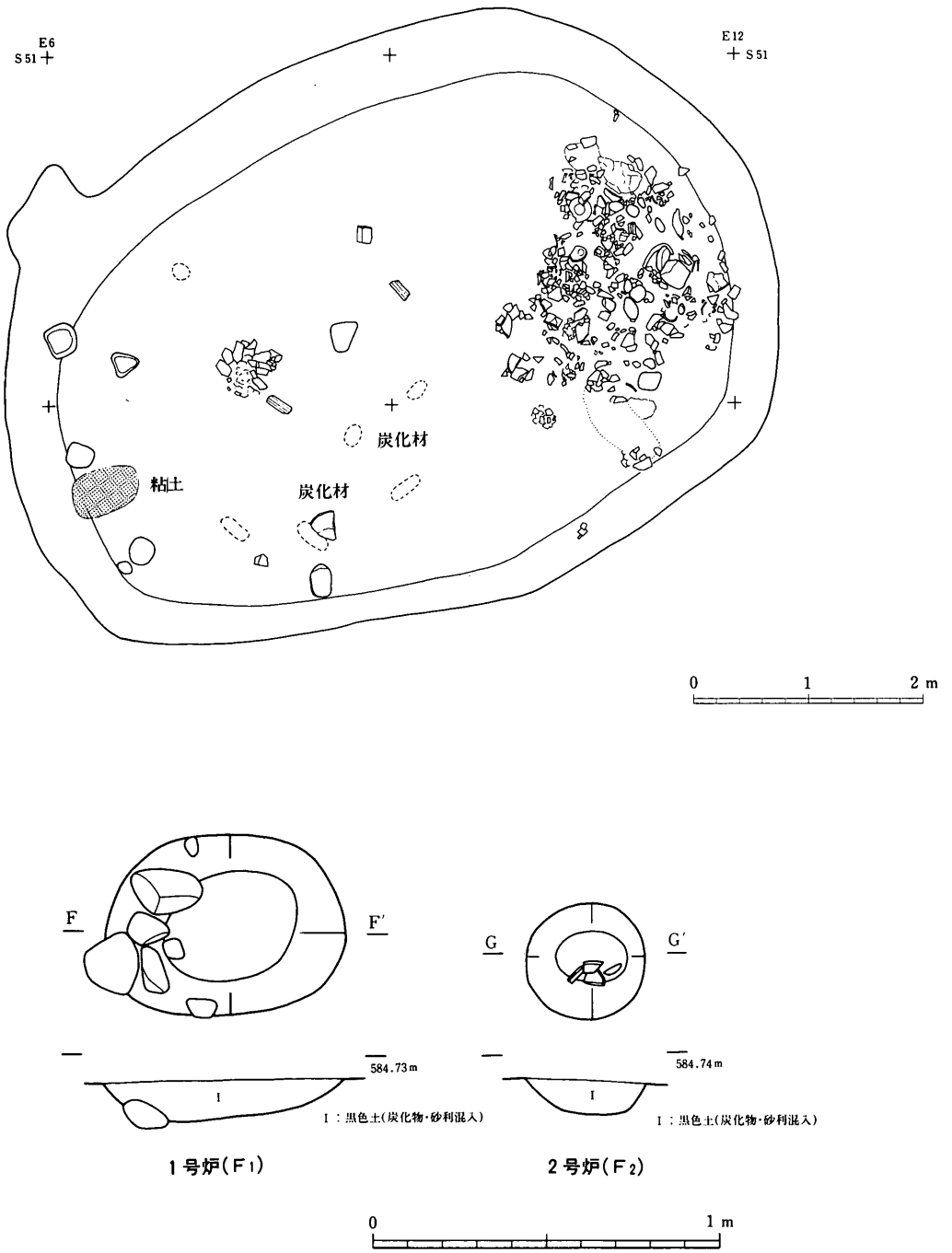
⑤これらの土器は現在未整理であるが、明らかに製作途中のもの（壺の下半部のみ先に成形・器面調整を施した後、更に粘土紐を積み上げた状態で焼けた土器）や、半乾燥段階で火を受けたため亀裂が入り、更に落下により折れ曲がった土器、さらに未使用・未焼成段階と考えられる、底部



第11図　第5・15号住居址



第12図　第５号住居址　土器(上)・礫(下)　出土状態



第13図　第5号住居址遺物出土状態　同炉

や器面調整に全く磨滅が認められず、明瞭な指紋を残した土器等が多量に存在する。

これらの事実から第５号住は、弥生時代後期前半の土器製作にかかわる作業場と考えられる。内部空間の使用法については、西半部に原料の粘土、作業台としての平石が存在しており、作業空間として捉えられる。台石の数、床の広さから、５～６人による作業が考えられよう。東半部は、一括土器の存在から、成形済の製品を保管、乾燥した場といえる。特に土器出土状況から、幾段かの棚があったと考えられる。また、棚が想定される部分には炉があり、土器製作の季節外には、何らかの作業場または居住の用に供した可能性がある。そして、火災は、土器の製作が終りに近づき、乾燥に入ろうとしている段階に起こったものと推定される。

本址は弥生土器製作遺構として、おそらく全国初の発見例であろう。さらに未製土器の存在も、きわめて稀なことと思われ、集落内における土器製作の実体、弥生式土器の製作技術を解明する上で、貴重な資料と言えよう。

(7)第15号住居址（第11図）

Ｉ区中央やや東寄り、第５号住居址に北半を切られて存在する竪穴住居址である。遺構は大きく削平され、覆土の厚さは僅か10cm程である。プランは楕円形で、Ｎ－77°－Ｅに主軸を向ける。規模は、長径６ｍ前後と推定される。

壁はほとんど残存せず、最大でも10cm程である。床面は砂利質の層に構築され、軟弱であった。主柱穴は２本検出され、P_1・P_2とも円形プランで、深さは20cm程である。第５号住に切られている北半部に２本を想定し、４本柱の住居と考えられる。炉址は第５号住との切り合いにより検出されなかった。

本址からの遺物の出土は少ないが、土器よりみて弥生時代中期後半の住居址と考えられる。

（竹原　　学）

⑻第６号住居址（第14・15図）

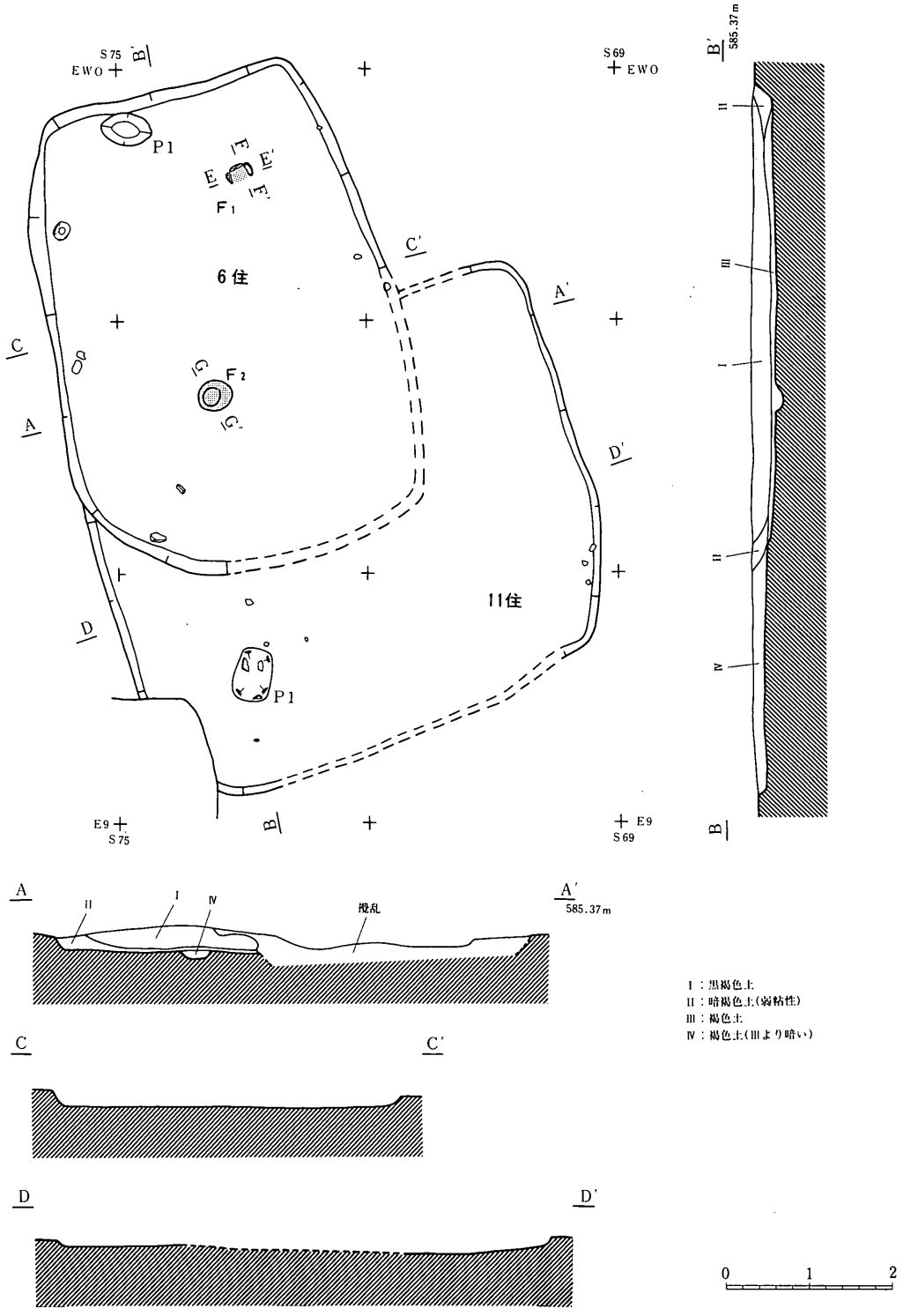
Ⅰ区中央部南端、第１号住居址の南に位置し、第11号住居址を切っている。主軸方向N－77°－E 5.8×4.2m、隅丸方形のプランをもつ住居址である。住居址の北側には畑地の畝が東西に深く入っている為、北辺東半から東辺北半にかけての壁～床面を攪乱により失っている。

遺構検出面は砂質黄褐色土である。覆土の厚さは25～30cmで、褐色土～黒褐色土が堆積している。なお、本遺跡の住居址が覆土内に礫を含んでいるのに対して、本址の覆土には礫がほとんど含まれていない。壁は黄褐色～砂質黄褐色土でやや外傾しながら立ち上がる。床面は砂質黄褐色土で、堅く良好である。床面下には砂層がみられる。ピットは住居址西辺の中央やや南寄りの壁際よりP_1が検出されたのみである。炉は１号炉、２号炉が検出された。１号炉は石囲炉で、住居址北西部に位置している。３個の細長い石を用い、東側が開口するコの字形に組んでいる。炉のセクションによると、これらの石は床を若干掘りくぼめ、石を組んで構築したと考えられる。炉の規模は石囲いの内法で23×20、－20cmを測る。炉の覆土はやや砂質の黒色土で、微量の焼土粒を含んでいたが、炭化物はみられない。２号炉は埋甕炉で、住居址の主軸上、中央やや東寄りに位置している。83×71×－27cm、円形プランの掘り方をもち、１～２cmの礫を少量含む褐色土内に、甕形土器の口縁～頸部が逆位に埋められていた。

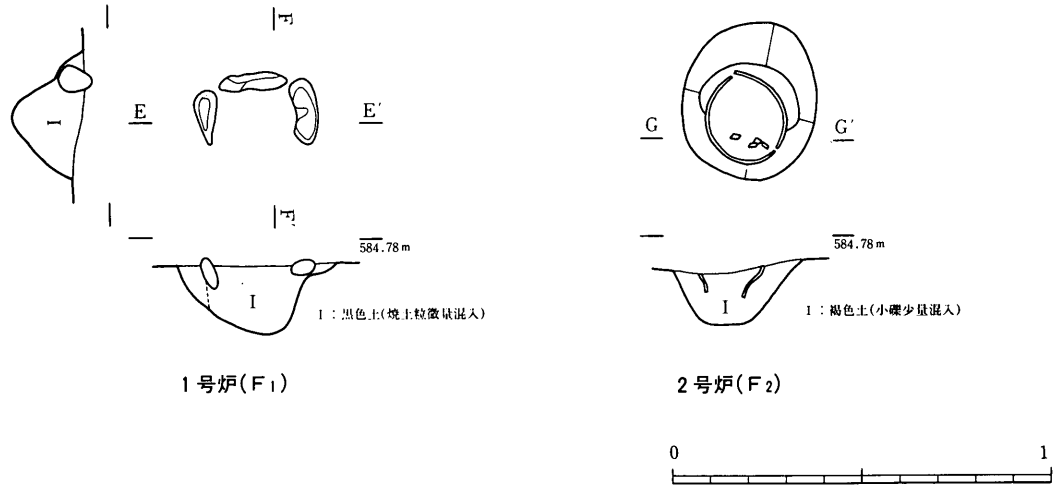
遺物は住居址北側が攪乱をうけていたため、南半分に集中しているが、量はそれほど多くない。本址の時期は弥生時代後期前半と推定される。

⑼第11号住居址（第14図）

Ⅰ区中央部の南端に位置し、第６号住居址に切られている。西辺を畑耕作による攪乱と第６号住によって失われ、南東の一部も比較的新しい時期の攪乱によって失われている。主軸方向N－18°－W、6.0×5.0m、隅丸方形プランをもつ住居址である。検出面は砂質黄褐色土で、覆土は褐色土である。壁は第６号住と同様、外傾しながら立ち上がっている。床は礫層上にあると思われ、床面の高さは第６号住より７～10cm程高い。本址では、南東部に浅い皿状のピット・P_1がみられただけで、他にピット、炉等は検出されなかった。遺物は床面及びその直上では、P_1内とその周辺から土器、石器が少量出土した程度である。本址の時期は弥生時代中期後半と推定される。



第14図　第6・11号住居址



1号炉(F1)　　2号炉(F2)

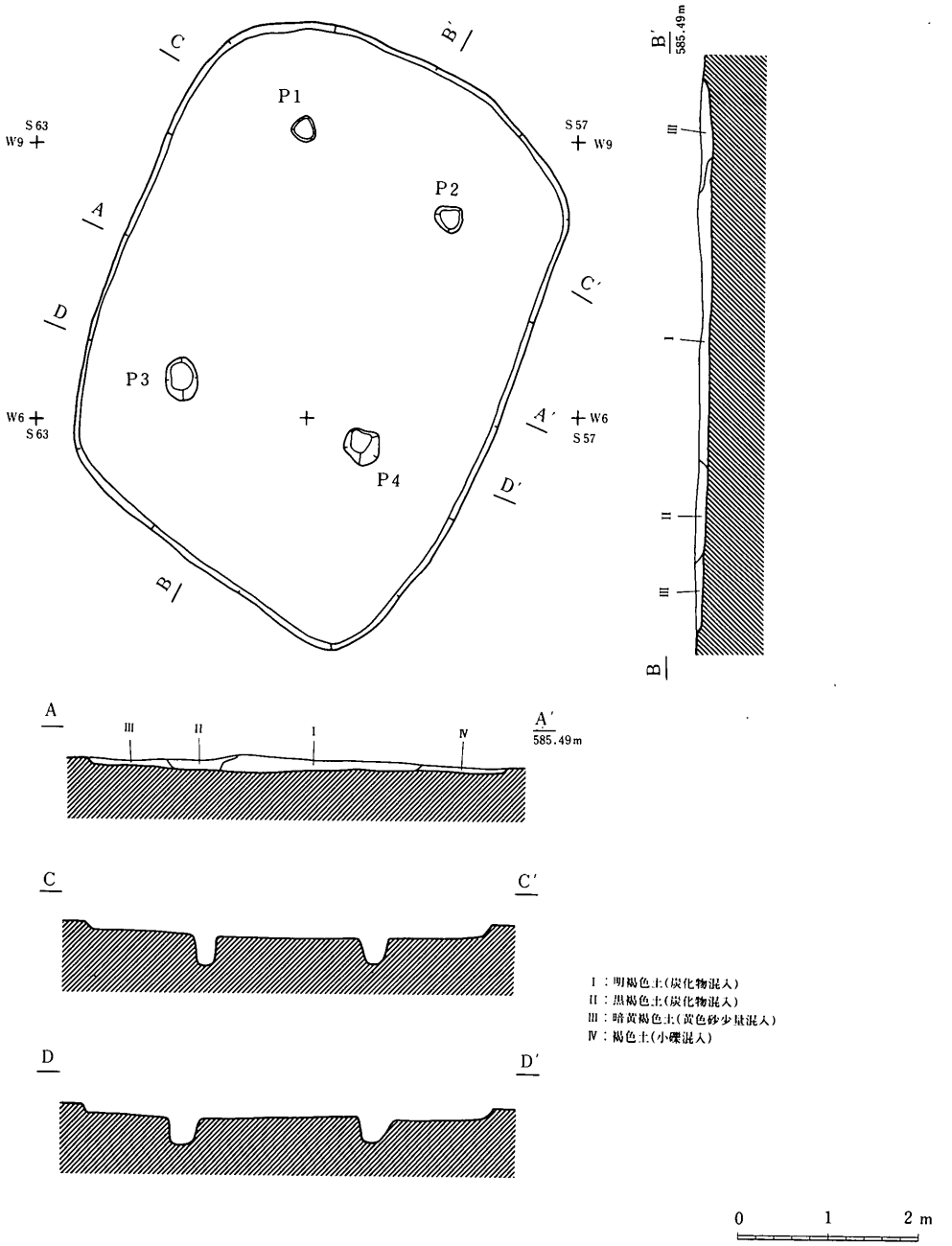
第15図　第6号住居址　炉

⑽第7号住居址（第16・17図）

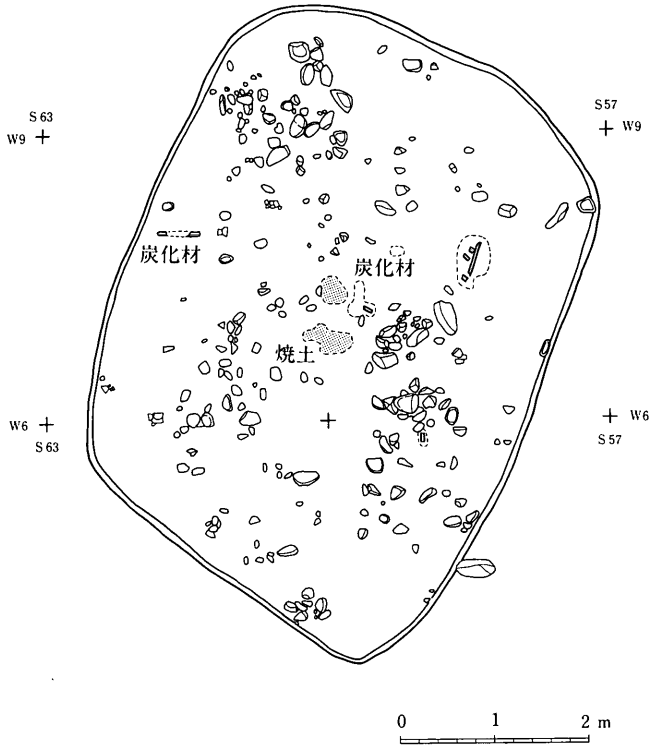
Ⅰ区中央北西、第13号住居址の北西に位置している。主軸方向N－66°－W、6.1×4.6mの隅丸長方形プランをもつ住居址である。覆土は10cm前後と浅く、炭化物を含む明褐色～黒褐色土が堆積していた。覆土から床面にかけて10～30cm大の礫を多量に混入し、住居址北西部を除く全体に見られる。

壁は西・北壁が砂質の黄褐色土で、東・南壁は小礫を含む褐色～黄褐色土である。検出面が浅いため壁の立ち上りは明瞭ではないが、ゆるやかに立ち上っている。地山は1～10cm大の礫を混入する黄褐色土である。床面も黄褐色土でやや軟弱ではあるが、地山とは明瞭に区別できた。ピットはP_1～P_4が検出され、この4つが主柱穴を構成していると考えられる。炉は検出されなかった。なお住居址のほぼ中央部で、2ヶ所の焼土が検出されているが、落ち込み等を伴わないことから炉址とは考えられなかった。また、覆土中から炭化材が出土しているが床面にはみられず、焼失住居とは考えられなかった。

遺物は、覆土から床面にかけてみられる礫と混在する形で、弥生土器、砥石2点が出土している。出土遺物より、本址の時期は弥生時代後期前半と推定される。


P1
P2
P3
P4
S63
W9
S57
W9
W6
S63
W6
S57
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
585.49m
I
II
III
IV
I：明褐色土(炭化物混入)
II：黒褐色土(炭化物混入)
III：暗黄褐色土(黄色砂少量混入)
IV：褐色土(小礫混入)
0
1
2 m

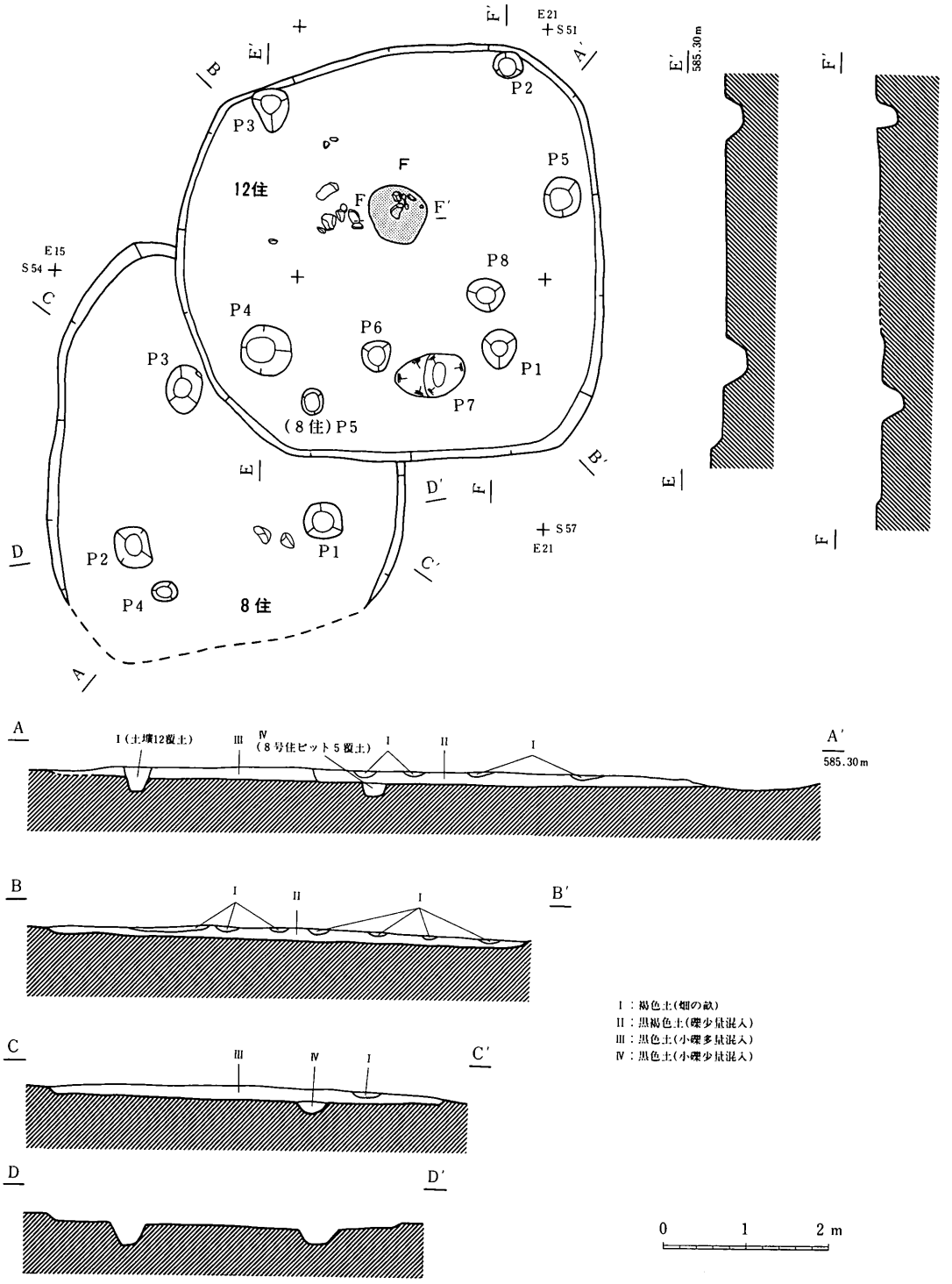
第16図　第７号住居址



第17図　第７号住居址　礫・遺物出土状態

(11)第８号住居址（第18図）

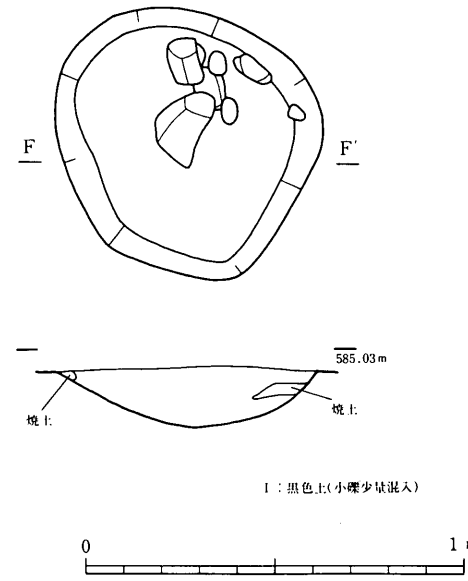
Ⅰ区西寄りに位置し、北東部を第12号住居址に切られている。主軸方向N－90°－E、５×4.3mの隅丸方形プランの住居址である。畑耕作のため、住居址の南側は攪乱をうけ、壁～床面を失っている。覆土は１～５cmの礫を多量に含む黒色土であり壁の残存高は２～９cmと非常に浅い。壁～床面は１～５cmの礫を含む砂質黄褐色土である。床面の高さは第12号住とほとんど差がなく、覆土の違いで区別した。ピットはP_1～P_5が検出された。P_5は第12号住内の床面下において検出されたため、本址に伴うものと判断した。主柱穴はP_1，P_2，P_5と思われる。P_3については位置がやや東に寄っておりP_1，P_2，P_5に比べ壁から離れすぎていることから主柱穴であるかどうか疑問である。なお、本址の南西には土壙が数基位置しており、住居址との前後関係が考えられるが、攪乱のため把握できなかった。炉は検出されなかった。遺物は攪乱をうけている南側を除いた床面及びその直上より少量が出土している。本址の時期は弥生時代中期後半と推定される。



第18図　第8・12号住居址

⑿第12号住居址（第18・19図）

Ⅰ区の西側に位置し、第８号住居址を切っている。主軸方向Ｎ－４°－Ｗ、5.2×4.9mの隅丸方形プランをもつ住居址である。住居址検出面東半部から東にかけて現在の畑の畝がみられ、耕作による攪乱をうけている。そのため、本址の東半は部分的に床面を残すのみである。覆土は８～15cmと浅く、礫を少量含む黒褐色土である。壁は砂質黄褐色土で壁高は７～15cmと低い。床面はやや軟弱で、住居址中央部が砂質黄褐色土、その周囲は0.5～３cmの礫からなる黄褐色砂利層である。ピットはP_1～P_8が検出された。主柱穴はP_1・P_2・P_3・P_4と考えられ、また、P_1－P_4上に位置しているP_6及び、住居址の長軸上の東壁際に位置するP_5も柱構造に関わっている可能性がある。この場合、本住居址の入口は西側に想定される。炉は住居址中央に位置し70×68×-16cmの不整円形プランの地床炉である。覆土は１cm前後の小礫を少量と、暗赤褐色の焼土ブロックを含む黒色土であり、炭化物粒子がごく微量ではあるが検出された。また、覆土内には拳大～18cmの礫が数個見られた。

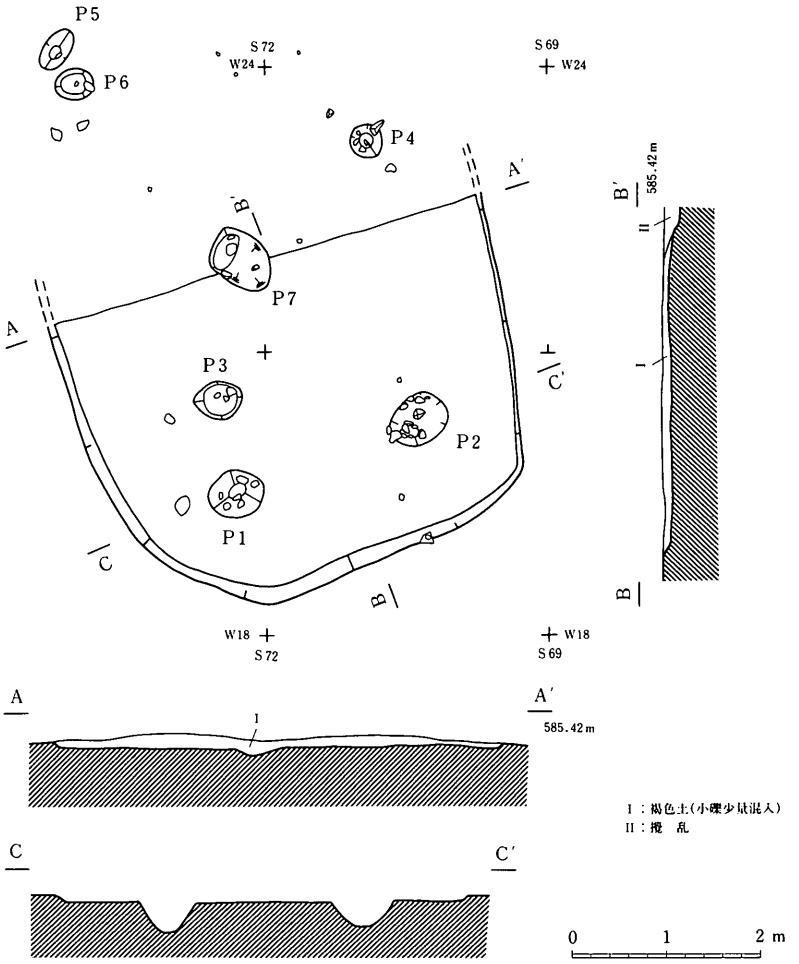


第19図　第12号住居址　炉

本址は一部攪乱をうけていたが、遺物は覆土から床面にかけて出土した。土器の他には、炉の南際から石庖丁、炉の北西40cmと南東30cmで石核が出土している。本址の時期は弥生時代中期後半と推定される。

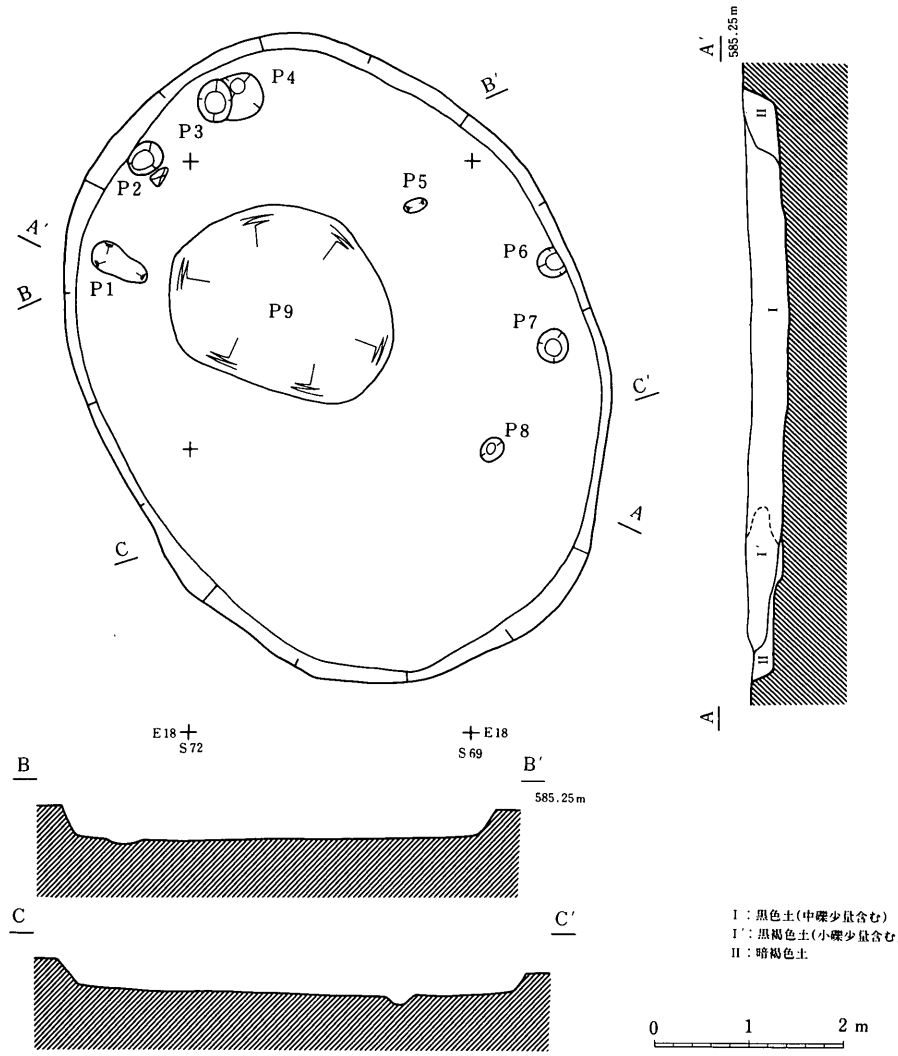
⒀第９号住居址（第20図）

Ⅰ区西側北寄り、竪穴状遺構１の北東に位置している。住居址西半は、地山が東から西へ傾斜していることと、畑の耕作が入っているために失われていたが、主軸方向Ｎ－76°－Ｅ、７×4.8mの隅丸長方形の住居址と考えられる。検出面は床面から６～12cmと浅く、覆土は小礫を少量含む褐色土である。壁は砂利層内にあり軟弱で、残存壁高が低いのと攪乱のため立ち上りは判然としない。床面は砂利層上に薄く堆積する礫を含む砂質黄褐色土である。ピットは床面の確認できた住居址東半部でP_1・P_2・P_3・P_7が検出された。攪乱をうけている西半部では地山の砂利層面よりP_4・P_5・



第20図　第９号住居址

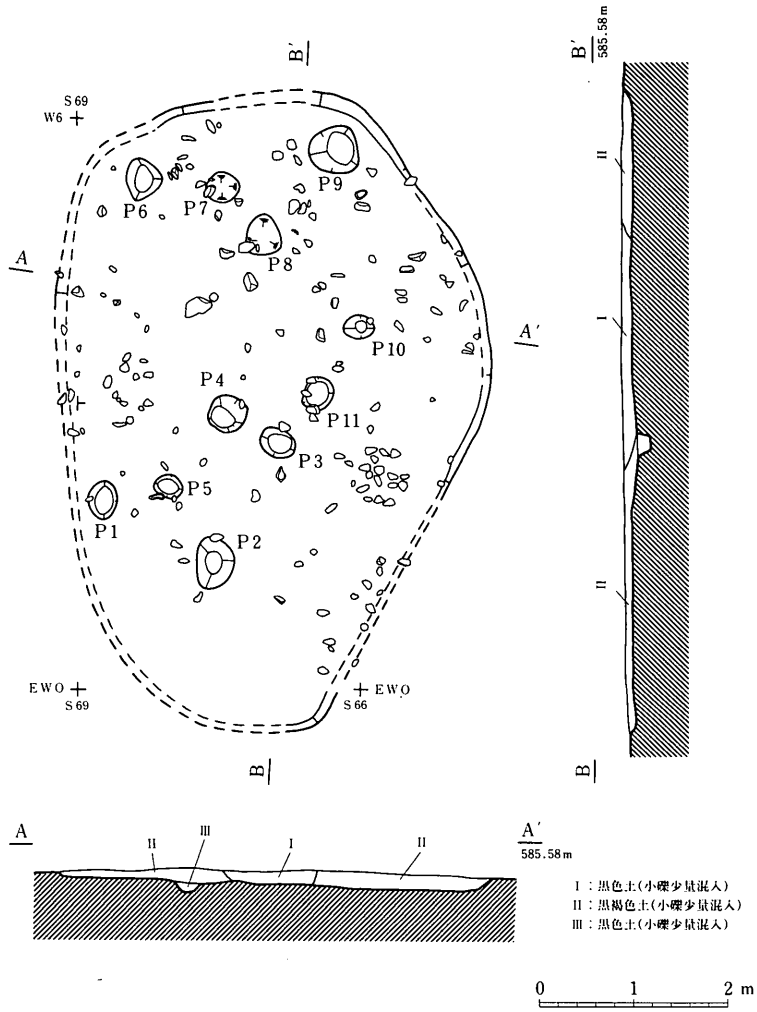
P_6が検出されているが、これらも本址に関わるピットと考えられる。主柱穴はP_1・P_2で、P_5あるいはP_6もその可能性をもっている。住居址中央に位置すると思われるP_7は炉の可能性も考えられたが、少量の礫を含む褐色～明褐色土の覆土には、焼土・炭化物等が全く見られなかった。遺物は住居址北東部に多くみられ、弥生土器、陶磁器、鉄製品などが少量混在して出土した。本址の時期は弥生時代後期と推定される。



第21図　第10号住居址

⑭第10号住居址（第21図）

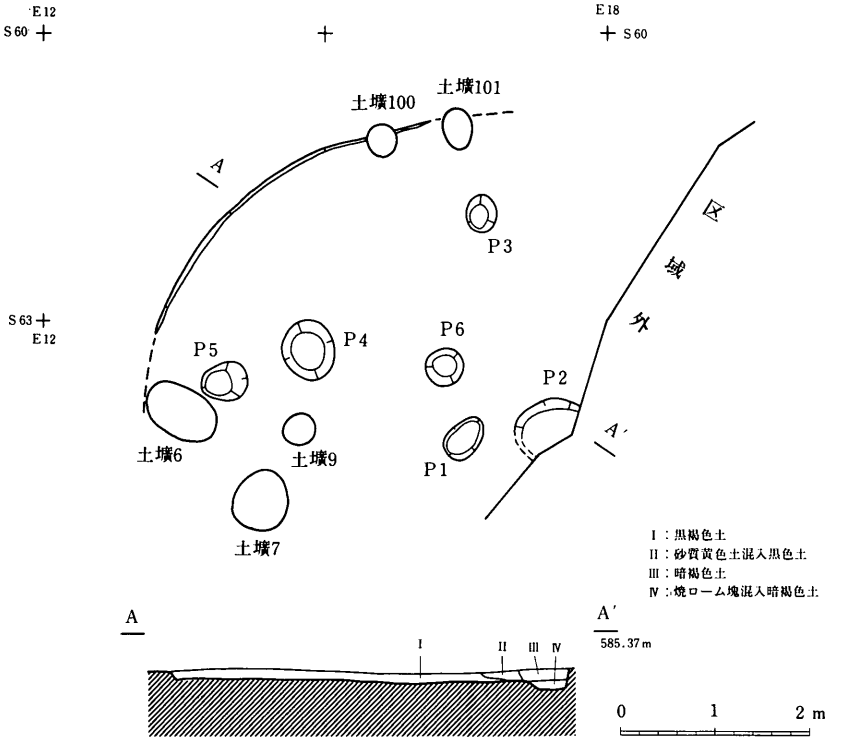
Ⅰ区南東隅に位置する。主軸方向N－72°－E、6.9×5.3mの楕円形プランの住居址である。覆土は35～40cmの厚さを測り、暗褐色～黒褐色土、5～30cm大の礫、黒色土の順で堆積した様相を示している。壁及び床面は砂質黄褐色土である。ピットは南東部以外の壁際からP_1～P_8が検出されたが、主柱穴の区別はできなかった。また、中央やや西寄りには2.5×1.9mの皿状のP_9がみられる。遺物には土器、石鏃、石庖丁がある。特に住居址東側床面には壺形土器の口縁～頸部が逆位に置かれていた。本址の時期は弥生時代中期後半から後期前半と推定される。

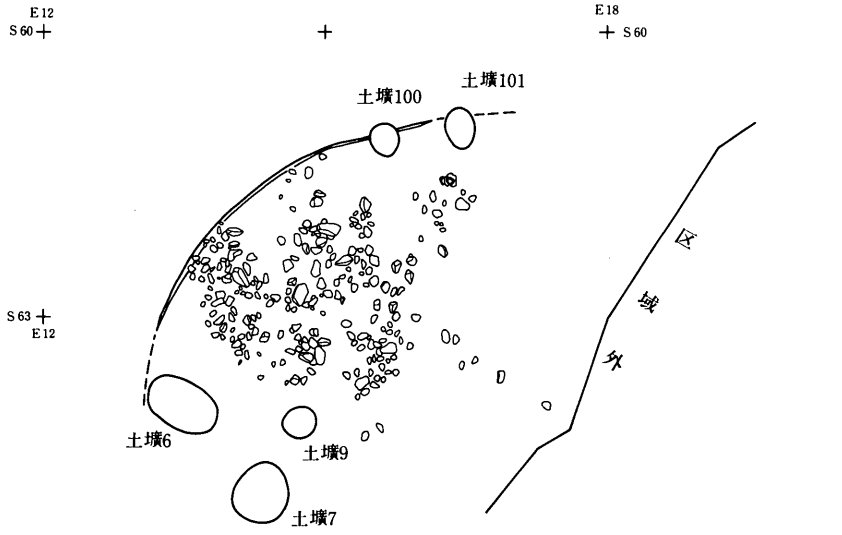


第22図　第13号住居址

(15)第13号住居址（第22図）

Ⅰ区中央西寄りに位置している。本住居址は攪乱がひどく、西～北側の一部と北東隅で壁が確認されたのみである。プランは楕円形を呈すると思われるが不整である。覆土は8～18cmと浅く、小礫を混入する黒褐色～黒色土である。壁はなだらかに立ちあがり、床面は1～5cm大の礫を多量に混入している褐色土である。ピットはP_1～P_{11}が検出されている。主柱穴はP_6・P_9が考えられ、P_1又はP_2にもその可能性がある。ピットの覆土は小礫を混入する黒褐色～黒色土である。焼土・炭化物を含むピットはなく、炉については不明である。遺物は土器、石器が出土しているが少量である。本址の時期は弥生時代中期後半と推定される。





第23図　第14号住居址(上)　同礫・遺物出土状態(下)

⑯第14号住居址（第23図）

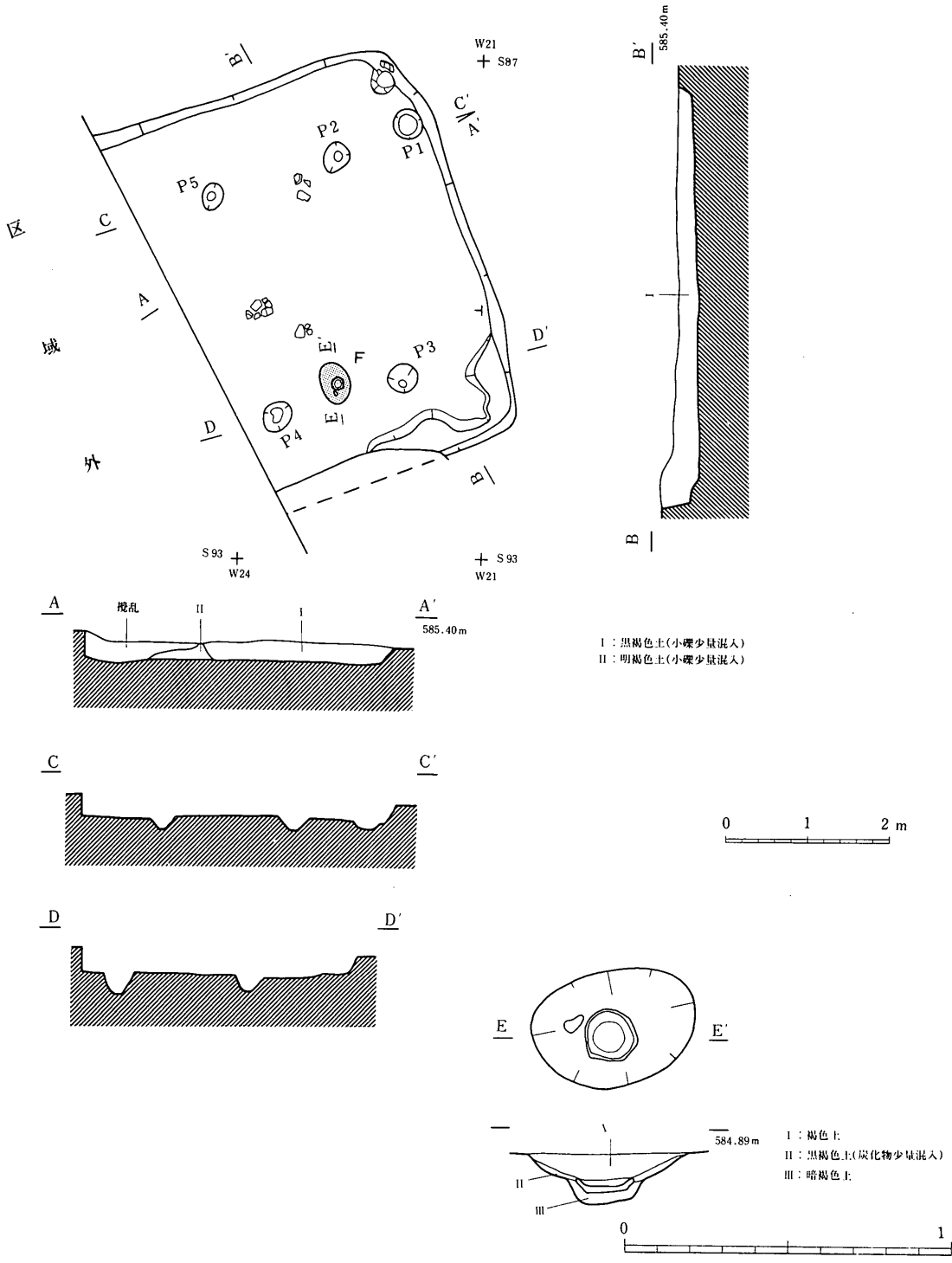
Ⅰ区西側、南東端に位置し、東側は発掘区域外となっている。本住居址は、遺構検出面が非常に浅くまた、南へ傾斜する地形の為、南側の壁～床面を検出することができなかった。また、東側は南北に畑の畝が延びており攪乱がはげしく、北西辺で住居址の$\frac{1}{5}$程を検出したのみである。その為、主軸方向・プラン・規模等は不明である。住居址北側は土壙100、101に切られている。

覆土は8cm程と浅く、暗褐色～黒褐色土が堆積している。また、西壁から2.5m程東にかけて、拳大の礫が床面まで多量に流入していた。床面は黄褐色土で、やや軟弱である。ピットはP_1～P_6が検出されたが、主柱穴等は区別できなかった。なお、P_2は焼ローム塊を多量に混入する暗褐色土で他のピットとは異なり、後世の攪乱の可能性をもっている。P_1は焼土塊を混入する暗褐色土で、あるいは炉と考えられるものである。また、床面が失われ地山が露出している南西部に位置している土壙6～9は本址に属する可能性も考えられたが覆土の違いから区別された。しかし、前後関係は不明である。遺物は覆土から床面にかけてみられたが非常に少ない。本址の時期は弥生時代中期後半と推定される。

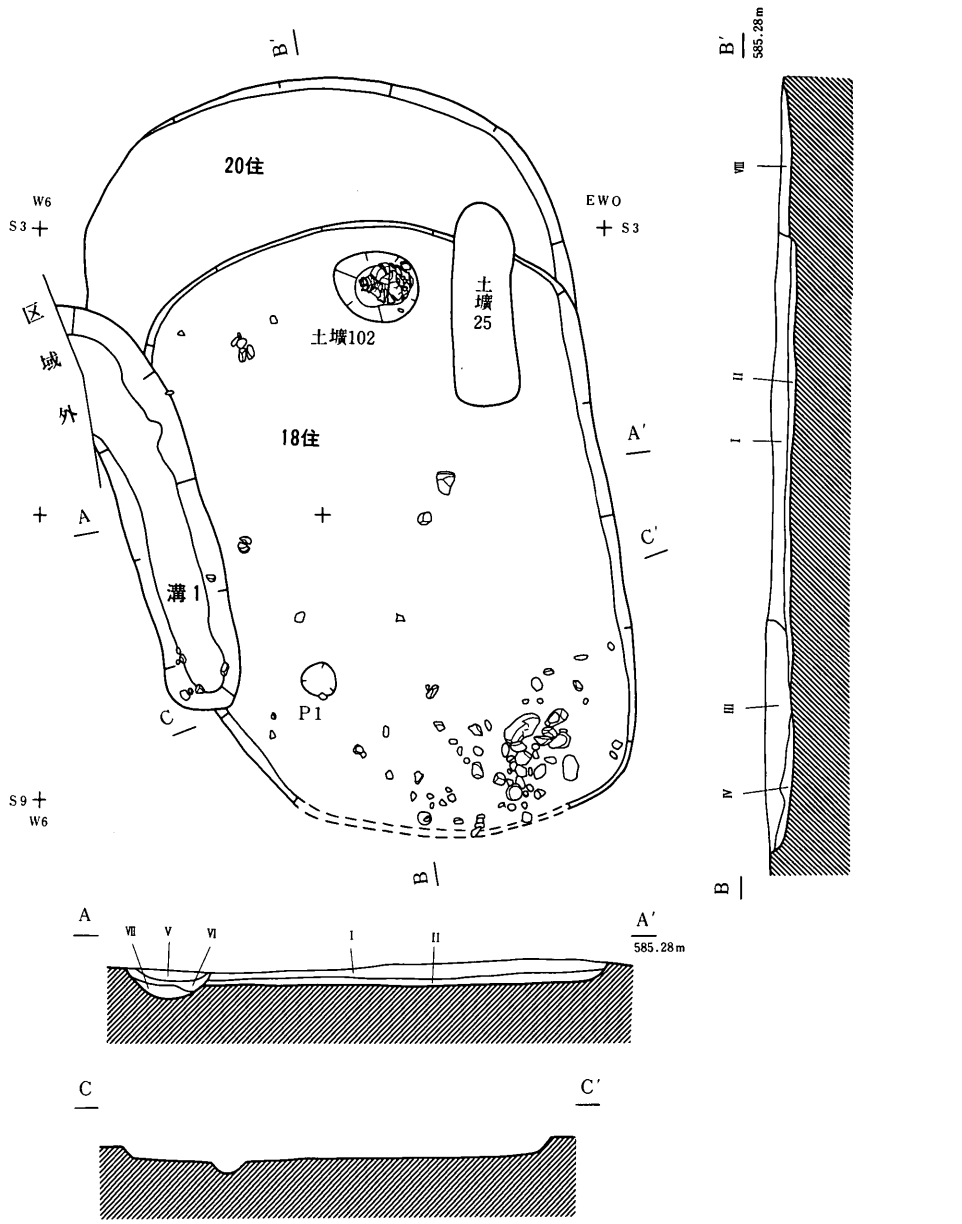
⑰第17号住居址（第24図）

Ⅰ区南西端に位置し、西辺は発掘区域外となっている。また南辺は攪乱の為その大半を失っている。主軸方向はN－18°－W、5.0×4mの隅丸方形のプランをもつ住居址である。覆土は25～30cmの厚さで黒褐色土が堆積し、下部においてやや暗黄褐色を帯びる。上部においては木根による攪乱が著しい為、覆土が黒味を帯びていると考えられる。壁は外傾しながら立ち上がり、床面は黄褐色土である。なお、住居址南東附近において一部が攪乱によって失われてはいるが、住居址のコーナーに沿って幅40～60cmで他よりも6cm程高い床面が検出された。ピットはP_1～P_5が検出されている。主柱穴はピットの深さ、位置からP_2・P_3・P_4・P_5が考えられる。炉はP_3・P_4の柱穴間に埋甕炉が検出された。炉は上部が103×73×-15cmの楕円形、下部が40×-15cmの円形の2段掘り方からなっており、下部の掘り方内には暗褐色土が見られ、大形の壺形土器底部が設置されている。この土器底部の器高は4cmで1段目掘り方底面の高さとほぼ同じである。また、この土器内及び暗褐色土の上面から1段目掘り方に沿って3～4cmの厚さで炭化物を少量混入する黒褐色土の堆積がみられる。1段目掘り方の覆土は褐色土である。

遺物は住居址北側コーナーの床面附近で土器底部が出土したほかは、主柱穴間を結ぶライン内に集中している。なお、住居址南辺の攪乱部分からは開元通宝が1枚出土している。本住居址の時期は弥生時代後期後半と推定される。　（関沢　聡）



第24図　第17号住居址



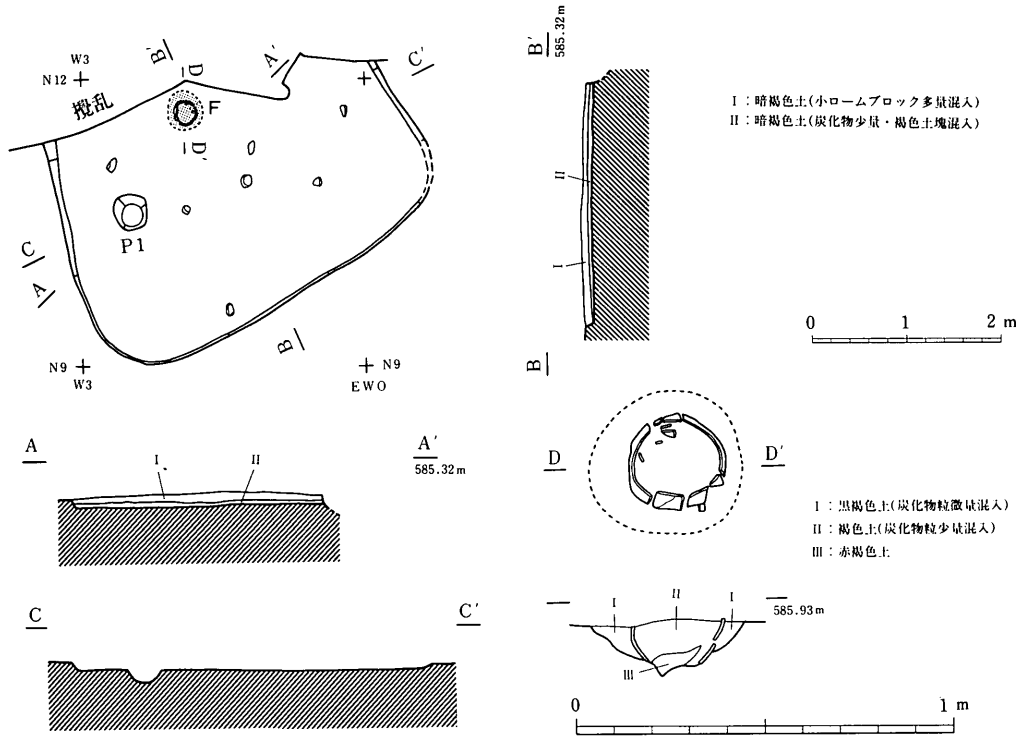
(18住)
I：暗褐色土
II：暗褐色土(ローム粒多量混入・やや砂質)
III：褐色土(ローム粒・礫混入－撹乱層)
IV：黒褐色土

(溝1)
V：褐色土(黄色砂質土少量混入)
VI：褐色土(黄色砂質土多量混入)
VII：明褐色土

(20住)
VIII：褐色土

0　1　2 m

第25図　第18・20号住居址・溝1



第26図　第19号住居址

⑱第18号住居址（第25図）

本址はII区南西隅に位置する竪穴住居址である。他遺構の切り合い関係は、北側で第20号住居址を切り、溝1・土壙25・102・集石4に切られている。住居プランはN－13°－Wに主軸をとる楕円形で、その規模は6.6m×約4.7mを測る。全体に削平がひどく、特に南壁付近では床面下に及んでいた。

壁は北から東にかけて残存し、その高さは15cm前後である。西壁は溝1に切られている。床面は覆土との識別が難しく、検出は困難をきわめた。平坦な面をなすが、軟弱である。また、炉・柱穴も検出不可能であった。

遺物は床面西半より、数個体分の土器が出土し、石器は石鏃の多さが目立っている（8点）。本址の帰属時期は土器よりみて、弥生時代中期末と考えられる。

⑲第20号住居址（第25図）

II区西南隅に位置し、第18号住居址にその大半を切られている。北側では古墳の周溝とわずかに切り合い、土壙25にも一部切られている。住居プランは楕円形で、北壁と床面の一部を残すのみである。主軸は南北で、東西の幅は5.1mを測る。

床面は18住よりやや高く、平坦である。柱穴、その他の施設は確認されなかった。遺物はまとまった出土がなく、わずかに得られた土器片から弥生時代中期末の住居址と推察される。

⑳第19号住居址（第26図）

II区西寄り、古墳の北側墳丘下に存在する住居址である。他の遺構との関係は、第21～23号住居址より新しく、古墳より古い。プランは隅丸方形だが、やや台形に近い。主軸をN－29°－Wにおき、東西4.0mを測る。北半は削平により不明である。

壁はわずかに残存し、10cmに満たない。本址下部には他の遺構が存在するため、床面の認定は炉を中心に進めた。概して平坦な面をなすが、軟弱であった。柱穴は精査したが検出されなかった。床面ほぼ中央には、埋甕炉が設置されていた。使用された土器は、直径25cm、高さ12cmの甕体部で、土器の周囲及び炉底は良く焼けている。土器内部の埋土は、炭化物を少量含む褐色土であった。

遺物は、炉体の土器を除いて非常に少ない。住居の帰属時期は弥生時代中期後半～末と推定される。

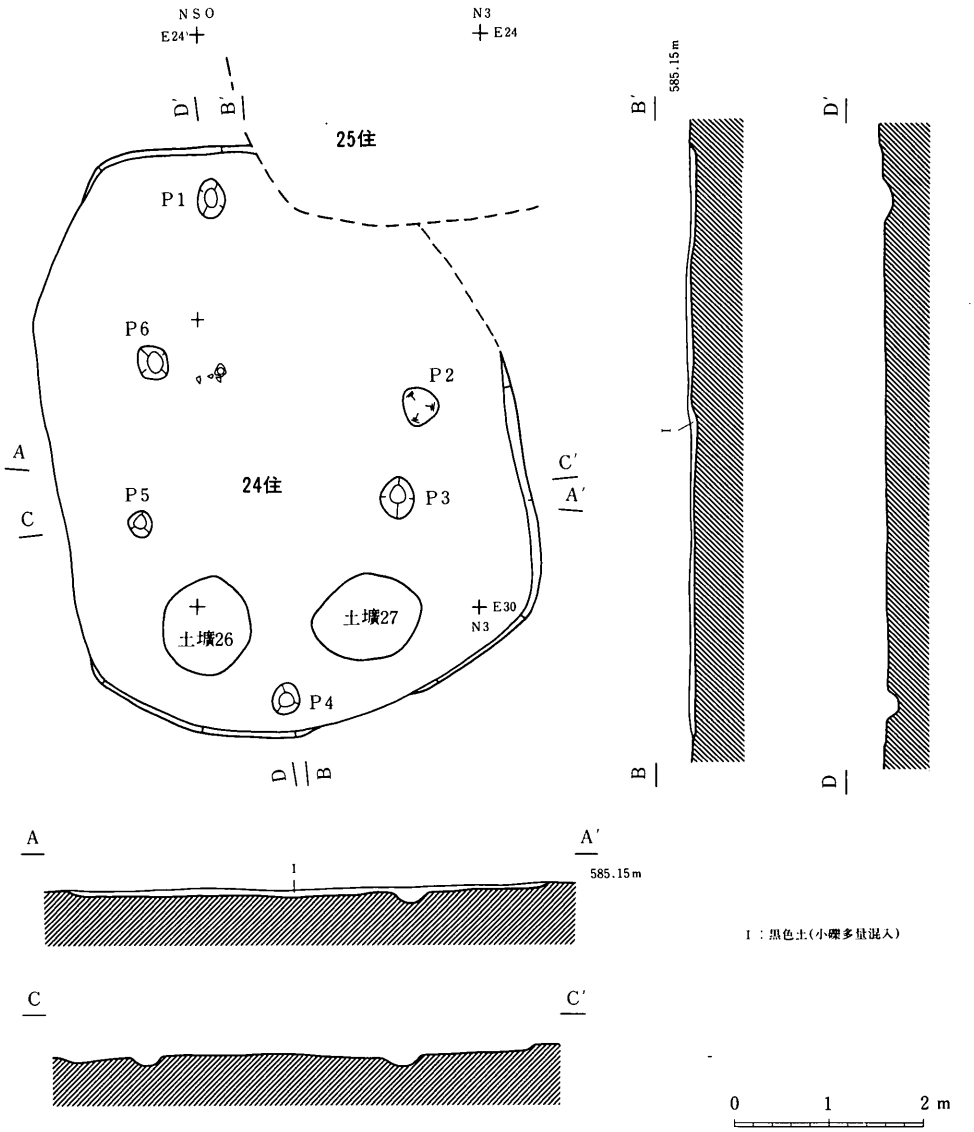
㉑第21・22・23号住居址（附図）

II区西辺、古墳の北側墳丘下に存在する竪穴住居址で、本年度は検出のみにとどめた。各住居址共、第19号住居址に切られている。各住居址間での切り合いは、第22・23号住が、それぞれ第21号住を切っている。これらの住居址については、昭和61年度に調査の予定である。　（竹原　学）

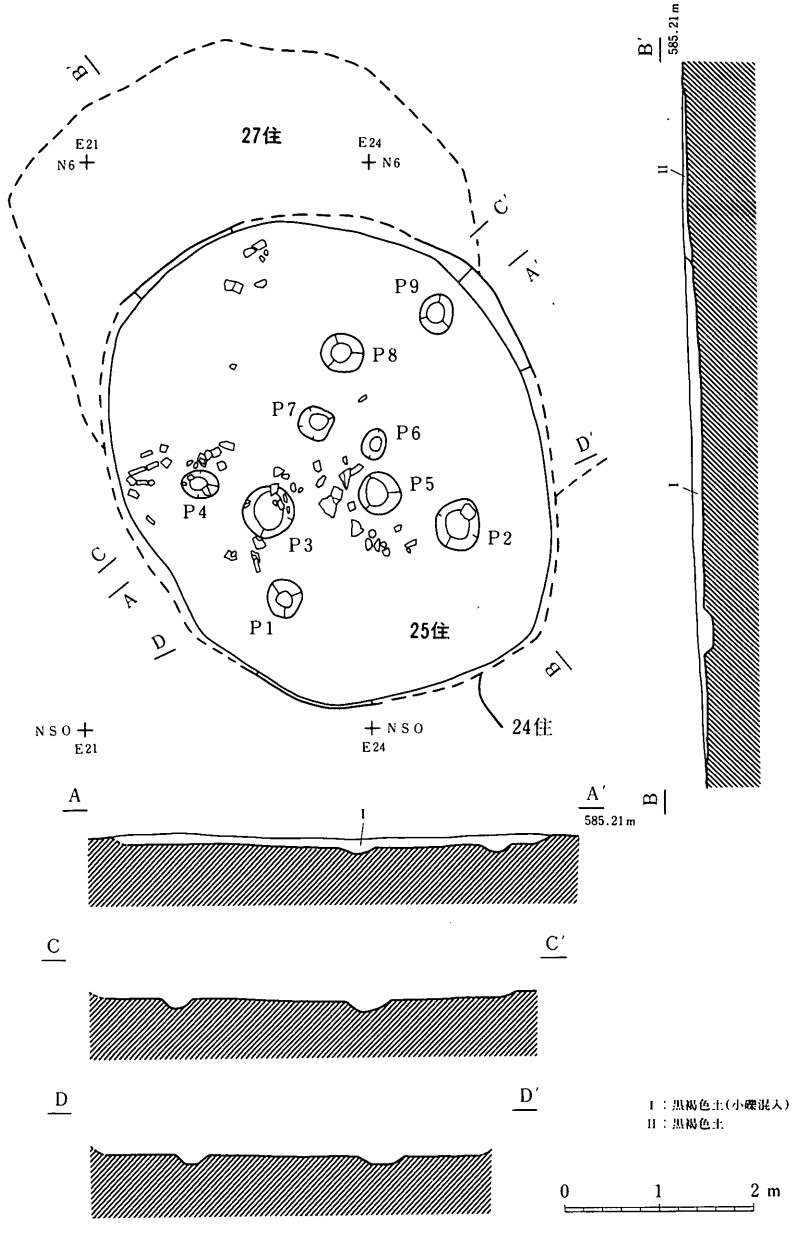
㉒第24号住居址（第27図）

II地区東寄りに位置する。N－84°－E、規模は東西6.3m×南北4.9mで、楕円形プランであるが、北西部を第25号住居址に切られている。また本址内の東側で土壙26・27と切り合いをもつが前後関係は不明である。壁は遺構検出時の削平により極端に浅く、残存高は10～15cmである。床面は礫がまじっているが、ほぼ水平である。主柱穴ははっきりしないが、P_1～P_6の6本がキの字状に並んでいるので、これを当てたい。しかし、いずれもが15cm未満と浅い。炉址は不明で、遺物は案外少なく土器片の他は石鏃を1点検出したにすぎない。本址の時期は弥生時代中期後半と推定される。

（神澤昌二郎）



第27図　第24号住居址



第28図　第25・27号住居址

㉓第25号住居址（第28図）

II区中央、やや東寄りに位置し、第24、27号住居址を切っている。重機による遺構検出時の削平が深く、壁の大半を失っているが、主軸方向N－35°－W、推定5.4×4.6mの楕円形プランをもつ住居址である。

覆土は1cm大の小礫を少量含む黒褐色土で、壁高は3～13cmと低い。床面には礫が混じるが、ピットP_1～P_9を検出することができた。ピット内覆土はすべて小礫を少量含む黒褐色土である。主柱穴としてP_1・P_2・P_4・P_8が考えられるが深さ11cm前後と浅い。炉については、ピットの位置から、P_3もしくはP_6が考えられるが、周辺及び覆土から焼土・炭化物がみられず明らかにしえない。

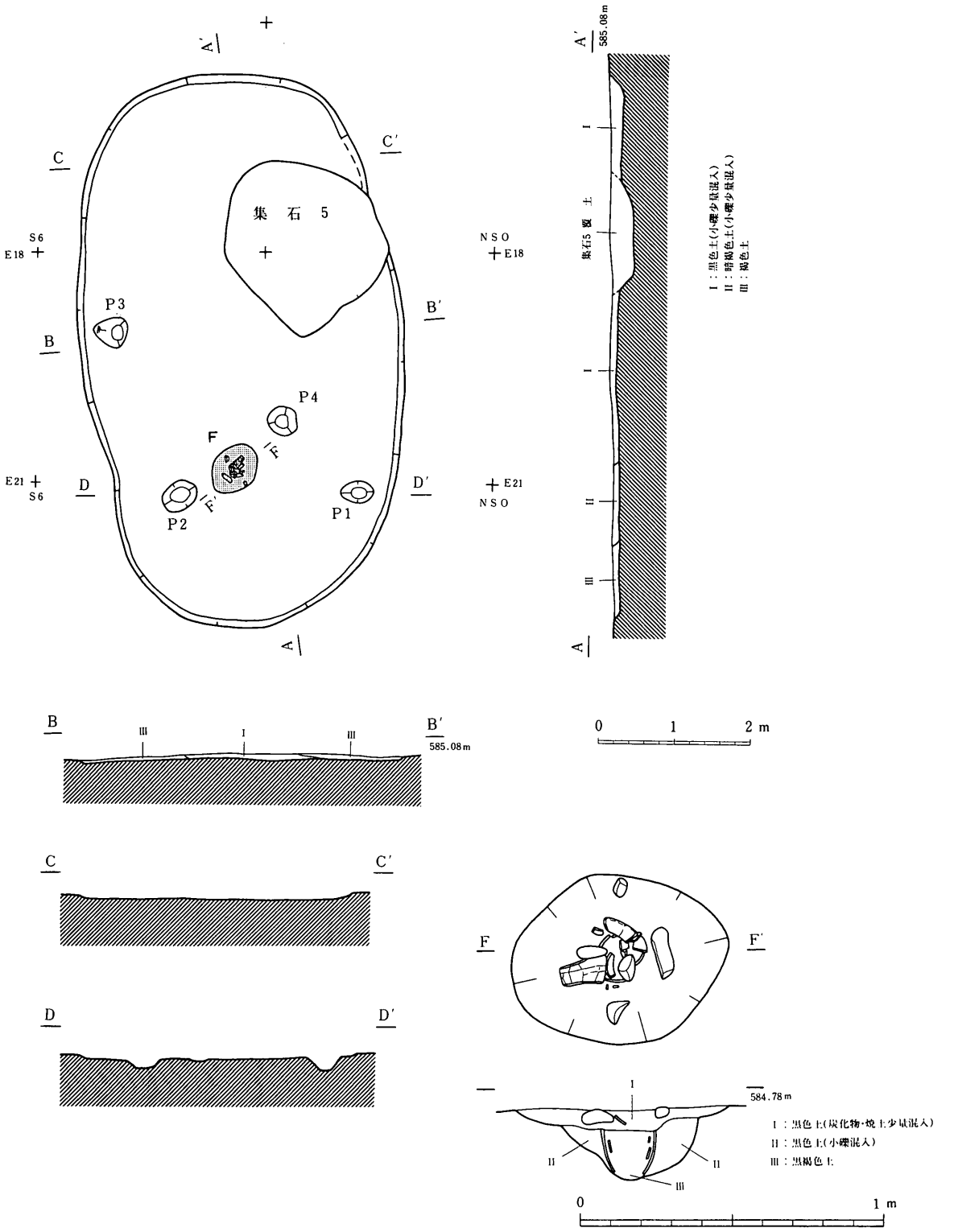
遺物は主に、主柱穴を結ぶライン内に集中し、土器、石器が出土している。土器は弥生時代中期後半～後期にかけての複数期にわたり、石器は石鏃、打製石斧、石錘、磨石、くぼみ石と豊富である。検出面から覆土中にかけての遺物も多く、重機による削平時に隣接住居址からの遺物の移動もあったと考えられるが、本址の時期は弥生時代後期前半と推定される。

㉔第27号住居址（第28図）

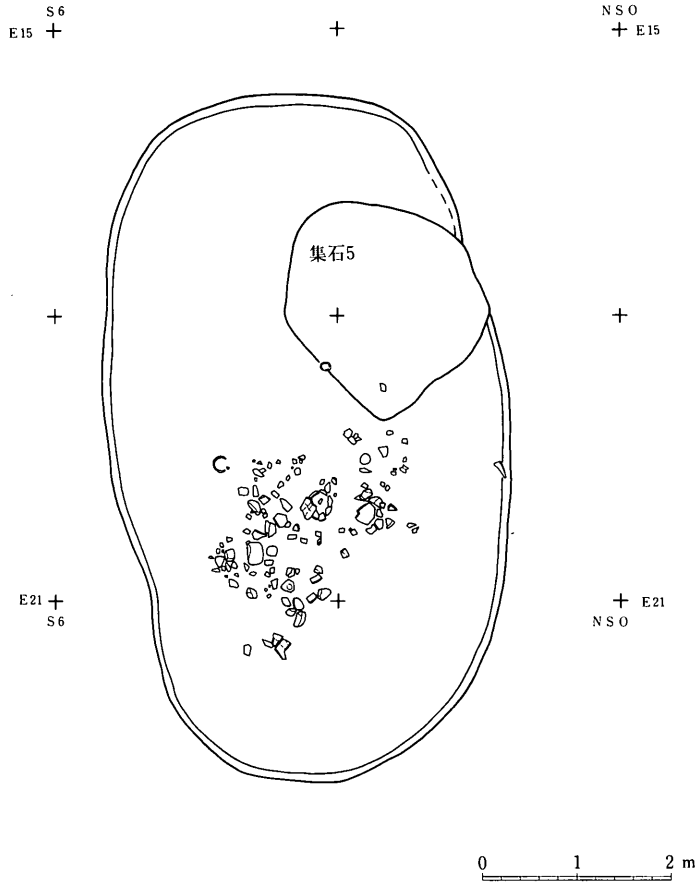
II区中央、やや東寄りに位置し南側を第25号住居址によって切られている。本址は当初第25号住と切り合っていることが判らず、1軒の住居址としてとらえていた。その後、第25号住の壁立ち上り精査時に切り合いが判明し、第27号住居址とした。しかし、重機による検出時の削平で壁～床面の大半が失われてしまった。覆土は3～7cmと浅く黒褐色土が堆積している。本址ではピット、炉の検出ができなかった。遺物も非常に少なく検出面で石鏃が1点出土した他は土器片のみである。本址の時期は不明である。

㉕第26号住居址（第29・30図）

II区中央部南に位置し、集石5により住居址北西部を切られる。主軸方向N－82°－E、7.3×4.2mの長楕円形プランをもつ住居址である。覆土は小礫を少量混入する褐色～黒色土である。壁の立ち上りは判然としない。床面西半には黒色土がみられ、中央～東半部でピットP_1～P_4が検出された。このうちP_1・P_2が主柱穴と考えられる。炉は主柱穴を結ぶライン上ややP_2よりに埋甕炉が検出された。炉は145×114×-6～-12cm、90×－33cmの2段掘り方からなり、2段目の掘り方内に甕形土器の下半が埋められている。埋土は黒色土であるが、甕周辺は被熱により暗赤褐色を呈している。甕内の黒褐色土は焼土等を含まず、1段目掘り方内に焼土等を少量含む黒色土が堆積している。なお、炉の上面より数個の礫が検出されており、炉縁石の可能性が考えられる。遺物は土器のほか石鏃、磨製石鏃、打製石斧、石製品等が住居址の東半、主柱穴より西側で集中して出土した。本址の時期は弥生時代中期末と推定される。



第29図　第26号住居址



第30図　第26号住居址遺物出土状態

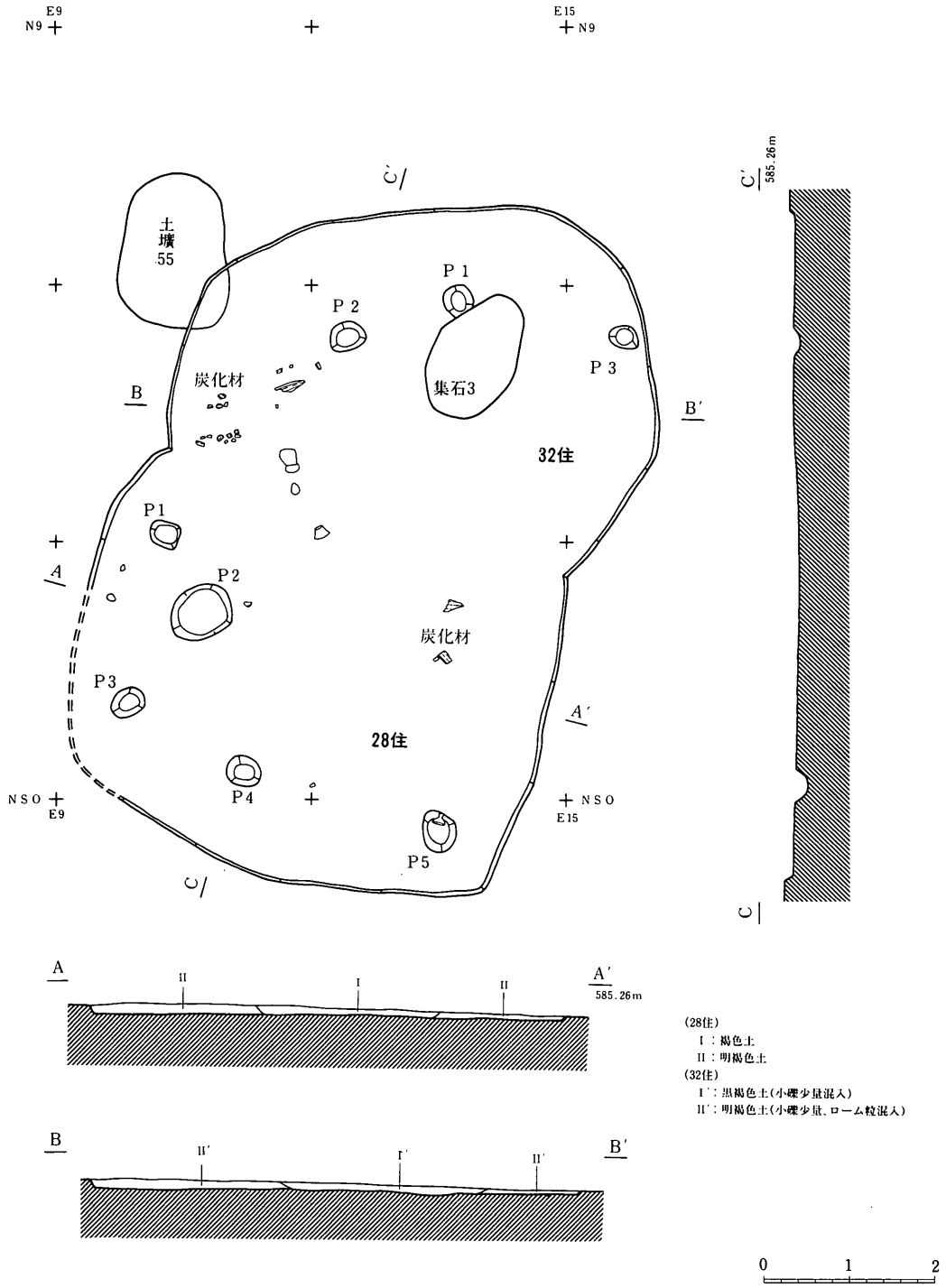
㉖第28号住居址（第31図）

II区中央部に位置し、北側で第32号住居址と切り合っている。主軸方向N－73°－W、5.6×5mの隅丸方形プランをもつ住居址である。本址は検出時においてプランが確定できず、第32号住と合わせて1軒の隅丸長方形プランの住居址として促えていた。その後、検出面を精査した結果、東西両辺の中央やや北寄りで、掘り方ラインのくびれを検出し、2軒の切り合いと判断した。しかし、検出面が非常に浅く、住居址覆土がともに明褐色土であったことから、切り合い関係は発掘時において確認することはできなかった。また、両住居址の土器にも時期差はなく、前後関係は不明である。

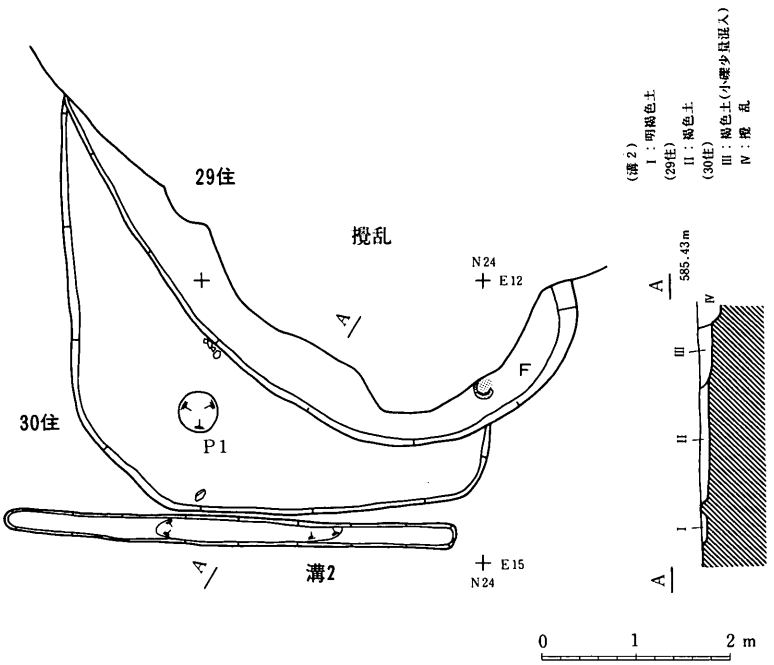
壁高は7～12cmと浅い。床面は第32号住とは堅さ、レベルにおいて差を認めえなかった。ピットはP_1～P_5が検出された。このうち主柱穴と考えられるのはP_1・P_3・P_4・P_5で、位置関係から本址は6本柱と推定される。明確な炉は検出されなかったが、炉の可能性をもつものとしてP_2がある。これは住居址長軸ライン上、中央からP_1・P_3の柱穴間に位置し、78×60×-10cmを測る楕円形プランの皿状ピットである。暗褐色土の覆土には砂とともに炭化物粒子が少量流入していた。なお、主柱穴と考えられるP_4の覆土からも炭化物粒子が検出されているため、P_2を炉と断定することはできない。遺物はP_5内からほぼ完形の丹塗り高坏が出土している。他に打製石鏃、磨製石鏃、石庖丁、打製石斧、磨製石斧が出土している。本址の時期は弥生時代中期後半と推定される。

㉗第32号住居址（第31図）

II区中央部に位置し、南側で第28号住居址と切り合う。住居址北西隅で土壙55を切り、中央やや北東寄りで集石3に切られている。覆土は明褐色土～黒褐色土で、第28号住よりも小礫を多く含んでいる。検出面が低いため壁高は4～8cmと低い。床面は第28号住のものと区別できなかった。ピットはP_1～P_3が検出された。P_1は集石3によって一部が破壊されている。いずれも深さ11～13cm前後で覆土は暗褐色土である。主柱穴の区別はできなかった。遺物は土器のほか、住居址南部から鉄石英製の細形管玉1点、北壁中央やや東寄りから扁平片刃石斧、P_1内から石鏃が出土している。なお、本址の西側、第28号住の西壁と切り合うくびれ部北西からP_2にかけての範囲と、東側の第28号住とのくびれ部やや南西寄りから炭化材が出土している。炭化材の間には焼土粒が広範囲に分布しており、本址は焼失住居の可能性をもつ。プラン、セクション、遺物から本址と第28号住との切り合いはつかめなかったが、炭化材の分布状態及び、第28号住の主柱穴のあり方からすると、本址が第28号住を切っている可能性がある。本址の時期は弥生時代中期後半と推定される。　（関沢　聡）



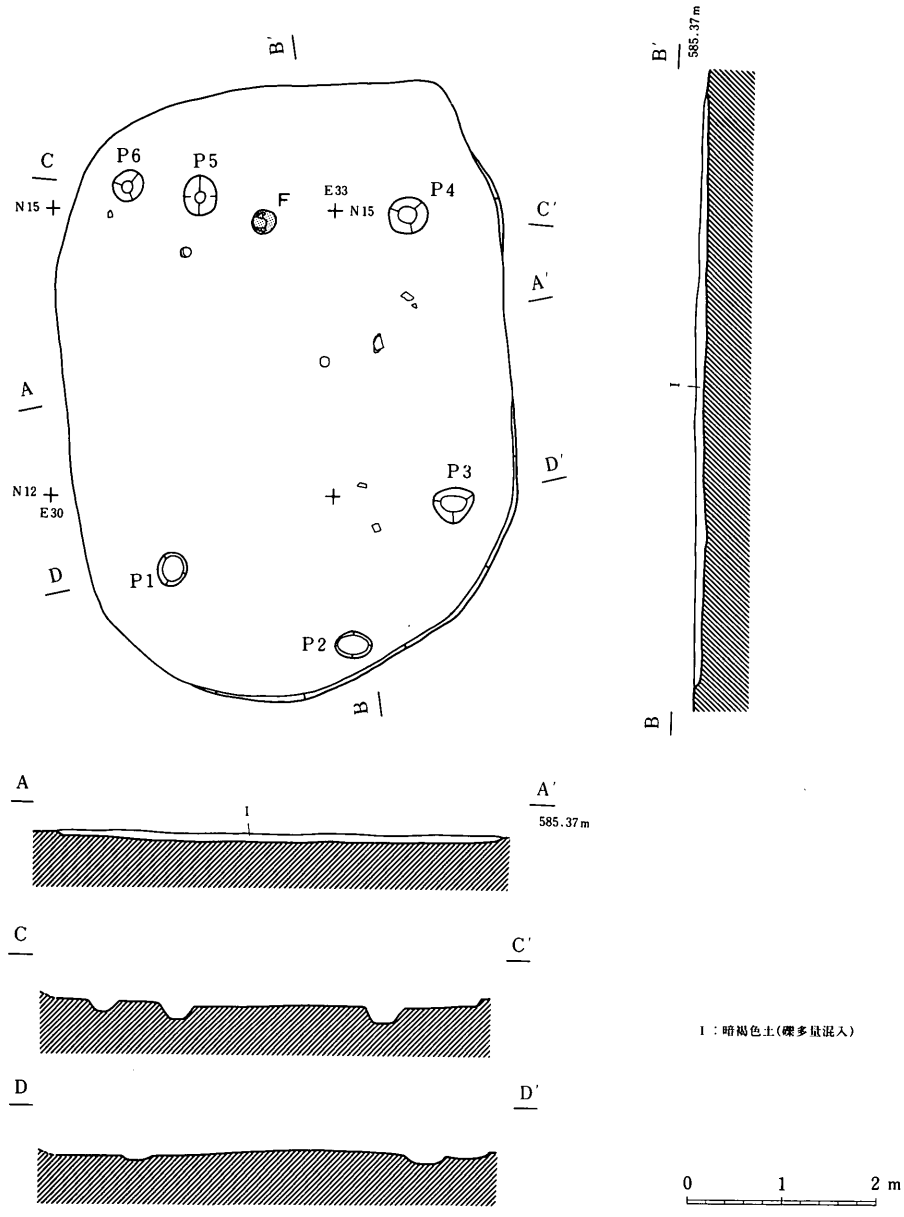
第31図　第28・32号住居址



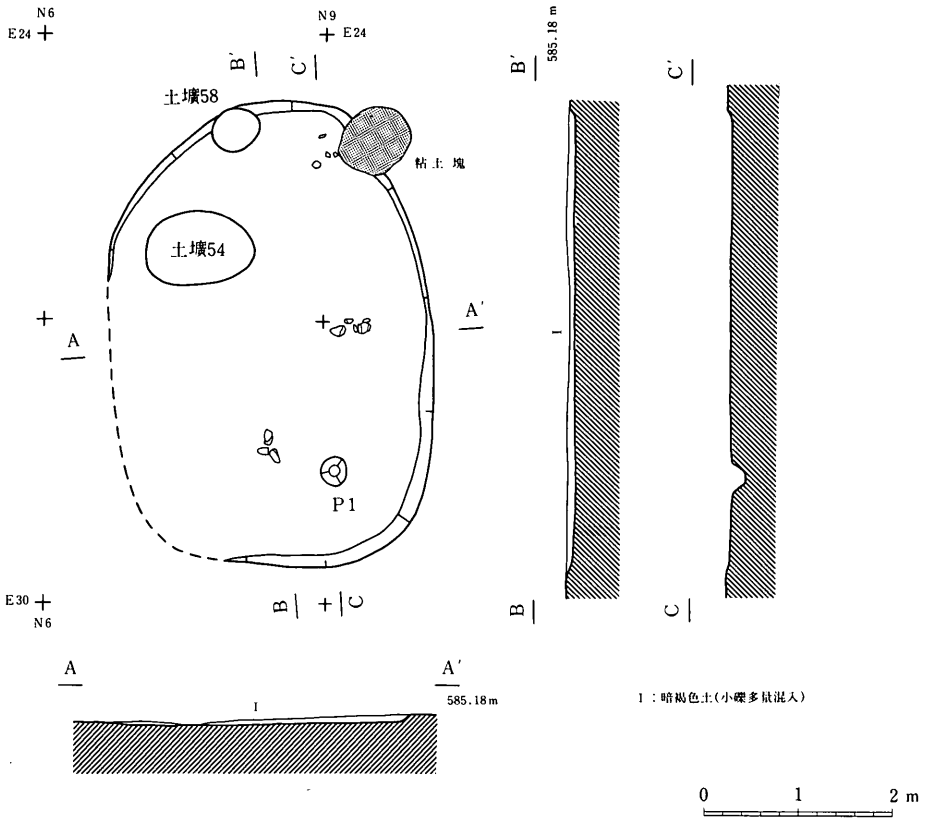
第32図　第29・30号住居址・溝2

(28)第29・30号住居址（第32図）

II地区北側に位置し、第30号住居址を切って第29号住居址がつくられている。しかし、第29号住の西側は大きく撹乱をうけ、住居址として検出できた部分は三日月形で、全体の5分の1にも満たない。II区全体が礫の多い中で、本址周辺は褐色土層であり、検出時に二軒のプランをはっきりと確認することができた。両住居址とも床面は良好で、第29号住では床面直上よりおびただしい土器片が出土した。しかし、形のととのっているものはなく、いずれも小、中破片であった。北東壁寄りに径25cmの壺の半欠部分が逆位に埋められており、埋甕炉と考えられる。壁高は5cm内外と低い。プランは長楕円形と推定される。第30号住は第29号住のすぐ東に位置し、最大幅1.5mを残して第29号住に切られている。床面レベルはほとんど同じであるが、第30号住の方が僅か1～2cm程低い。プランは隅丸方形で規模は不明である。壁高は7cm程であるが、北へ行くに従って低くなる。床面状態は第29号住と同じく黄褐色砂質土で堅くない。柱穴は不明であるが、径40、－20cmあまりのピットが1本あるのみである。遺物は第29号住に比してずっと少なく、土器片の他には石鏃と太形蛤刃石斧の先端を平滑にした石槌が検出されている。時期は第29号住が弥生時代後期、第30号住が中期末と推定される。なお、第30号住のすぐ東には巾30cm、長さ5mあまりの溝2が南北に走っている。



第33図　第31号住居址



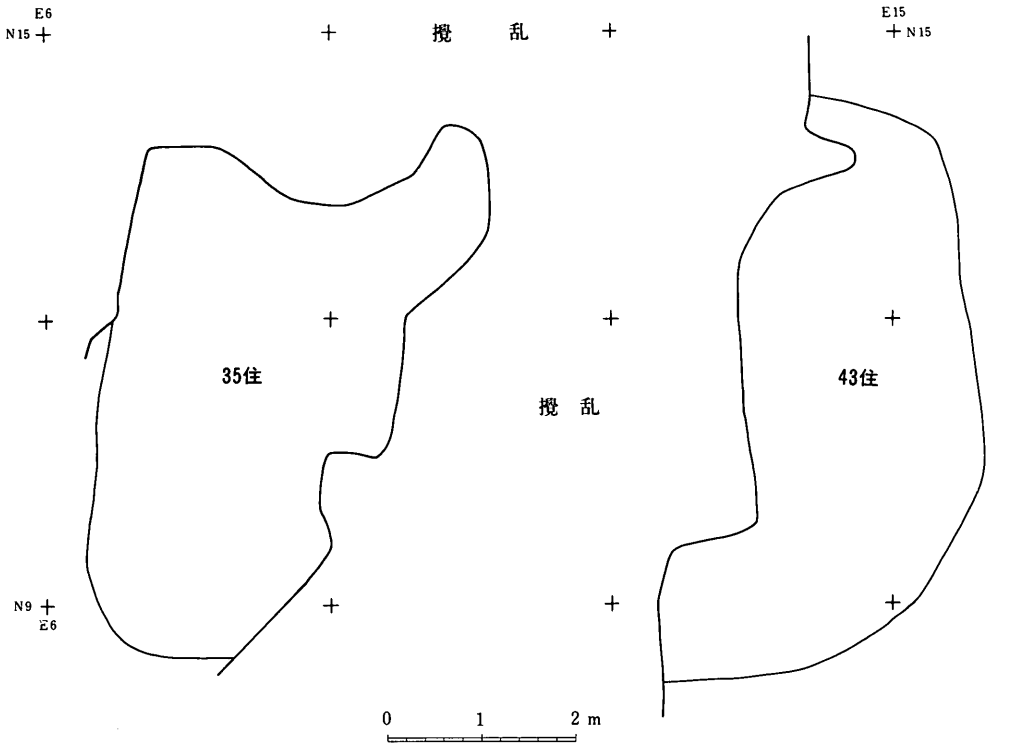
第34図　第33号住居址

(29)第31号住居址（第33図）

II区中央東端に位置し、主軸方向N－6°－W、6.4×4.7mの楕円形プランをもつ住居址である。西、北側の壁はほとんどなく、東、南側で最大7cmの壁高をもつ。床面は礫を含む土で、ほぼ平らである。ピットはP_1～P_6が検出され、主柱穴としてP_1・P_3・P_4・P_5の4本が考えられる。P_6には壺破片が貼り付くようにして入っており、更に磨製石鏃1点も出土した。炉はP_4・P_5のライン上やや西寄りに埋甕炉が検出され、覆土内に炭化物等の混入がみられた。遺物は土器の他、住居址東寄りには石鏃1点と石皿片3点がある。本址の時期は弥生時代中期末と推定される。

(30)第33号住居址　（第34図）

II区中央東寄り第31号住居址の南西3mに位置し、その南西1m余に第25・27号住居址が接している。主軸方向N－86°－E、4.9×3.4mの楕円形プランをもつ住居址である。本址の南西には長径1.1mの土壙54が、西端には土壙58があり住居址を切っている。覆土は多量に礫を含む暗褐色土である。床面も礫混りの土で、壁高も2～3cmと低い。ピットは1本のみで炉址もない。西北端に焼けた粘土があるが住居址との関連は不明である。遺物は土器片のほか、打製石鏃2、磨製石鏃1、碧玉製管玉1などが検出されている。本址の時期は弥生時代中期末と推定される。



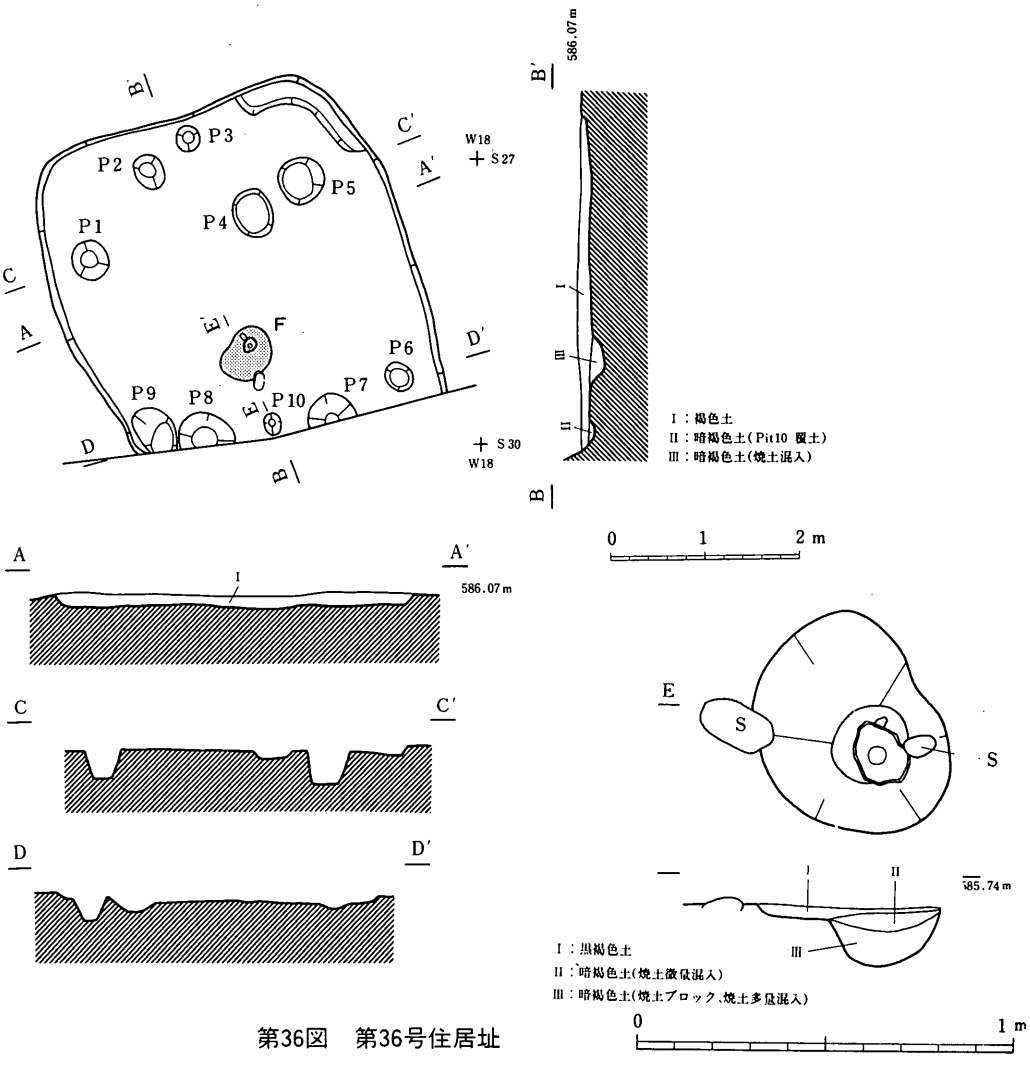
第35図　第35・43号住居址

(31)第35号住居址（第35図）

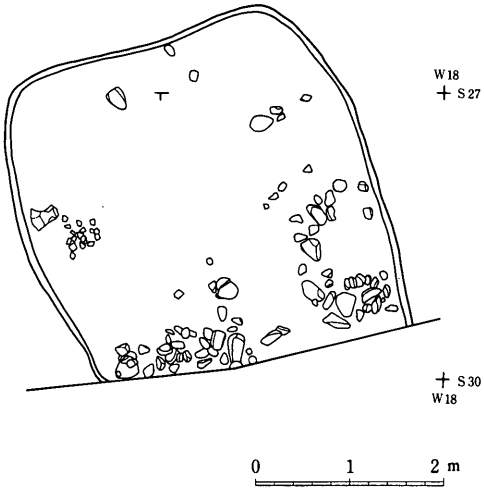
II区中央やや西寄り、古墳周溝東2.2mに位置している。重機による遺構検出時の削平と撹乱により覆土の大半が失われ、床面プランの一部分を確認したにとどまった。覆土は撹乱のため黄褐色土層中に礫が混入しており、土層の追求や土色の相違の判別ができなかった。第35号住のプランは隅丸方形と推定されるが、壁もわからず僅かに床面の一部を検出したにすぎない。床面の海抜高は585.07～585.12mである。ピット、炉は検出することができなかった。出土土器より本址を弥生時代中期後半から末と推定している。

(32)第43号住居址（第35図）

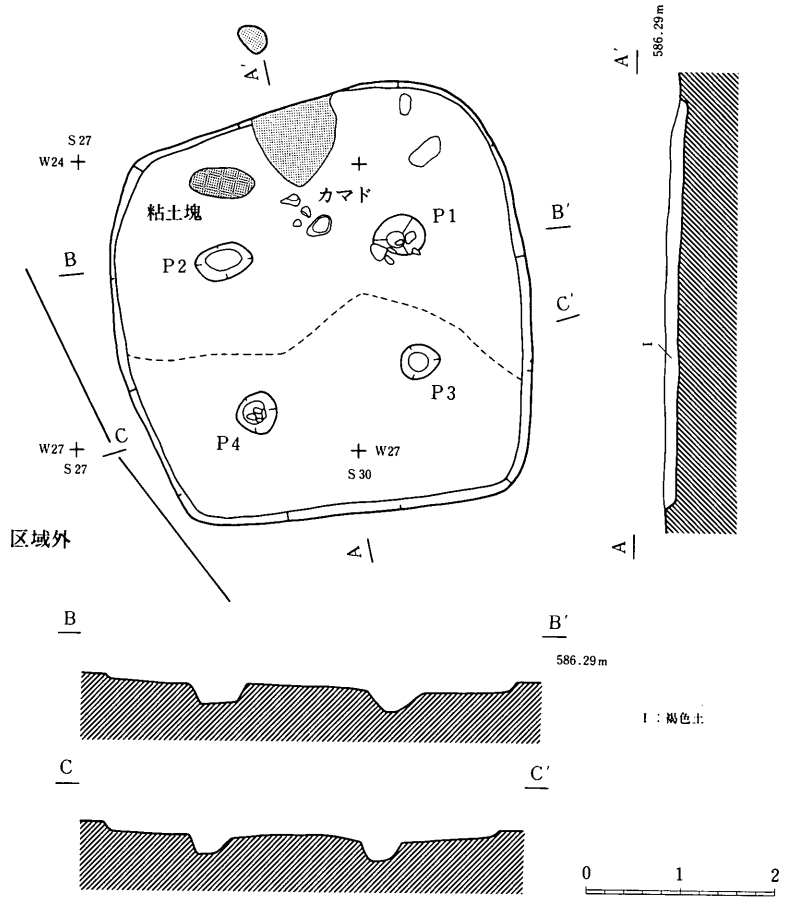
II区中央、第35号住居址の東3.6mに位置し、平面プランより第35号住と切り合っていると思われる。本址も重機による削平と撹乱が著しく、床面の一部を確認したにとどまった。推定される平面プランは楕円形である。床面の海抜高は585.0～585.05mでやや南に傾斜している。ピット、炉は検出されなかった。出土遺物はないが、本址の時期は弥生時代中期後半と推定される。



第36図　第36号住居址



第37図　第36号住居址　礫・遺物出土状態



第38図　第37号住居址

(33)第36号住居址（第36・37図）

III地区のほぼ中央に位置し、すぐに西に第37号住居址、北に第40・41号住居址、東に第38号住居址と接している。規模は東西3.8×南北3.5mであるが、南側に農道が接しているため南北の調査ができなかった。ほぼ4m程の方形プランの住居址と思われる。検出面では耕作土の黒褐色土に対して、褐色土の落ち込みがみられ、壁は若干軟らかく、60°ぐらいの角度で立ち上っている。壁高は10cmあまりと浅い。床面には大形土器とともに10～30cm大の河原石が散在し、特に南側では重なりあっていた。床面自体は礫を含み良好ではない。また、レベルは南側が下っている。ピットは10本検出されたが、主柱穴はP_1（37×40、－30）, P_5（47×50、—38）, P_6（25×30、—8）, P_9（37×60、—26）の4本と思われる。炉址は住居址中央南寄りに70×50、－15cmの楕円形に床を掘りくぼめ、その中に縁石をおき、更に壺底部を埋置したものである。遺物の量は多く、特に西側では大形壺があり、その他に高坏底部、打製石斧、砥石、磨石、石庖丁などが検出されている。南側の礫群はあり方が異常で、住居址廃絶後に投げ込まれたものではないかと思われる。本址の時期は弥生時代中期後半と推定される。

(34)第37号住居址　（第38図）

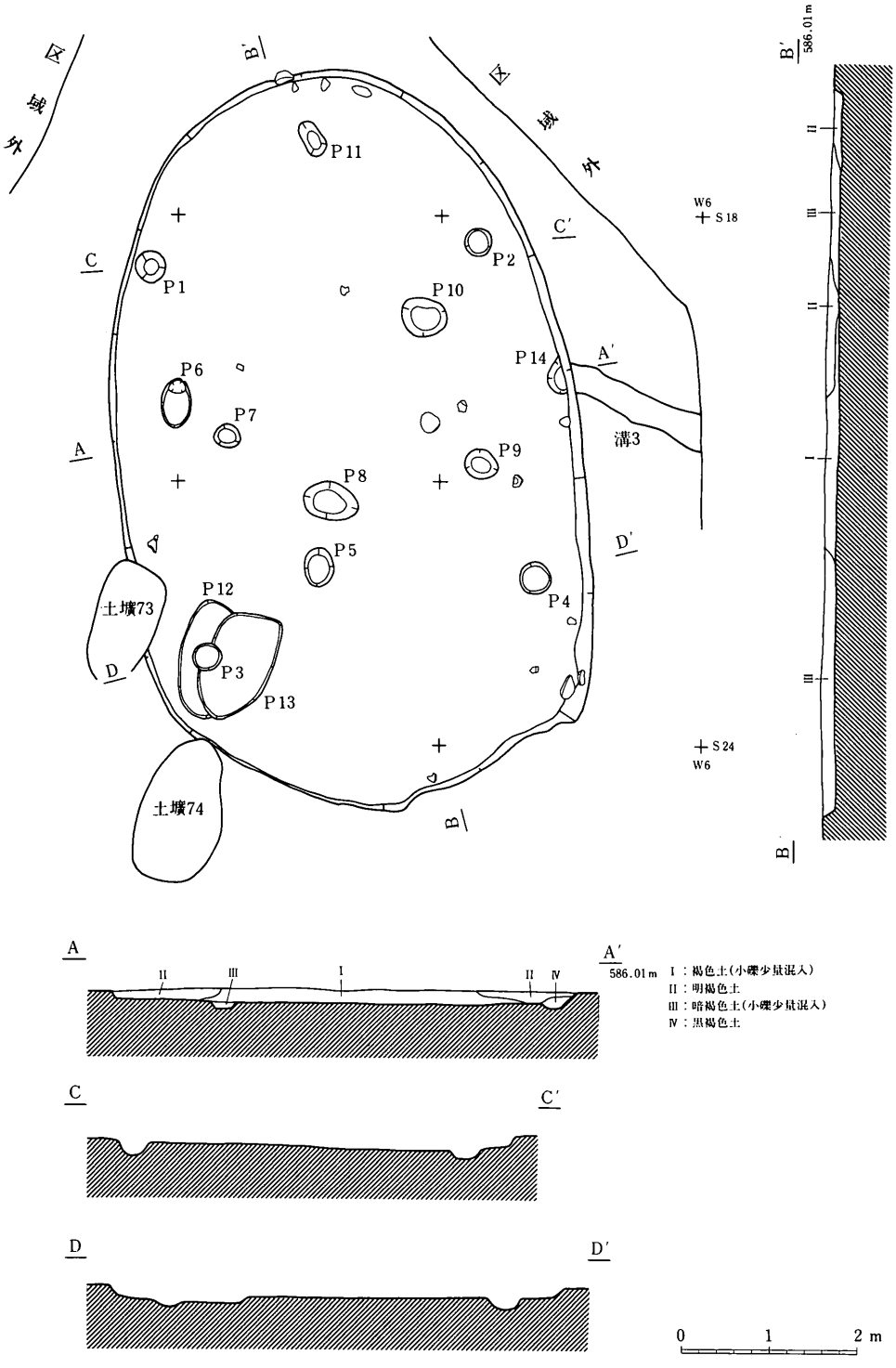
III区西端に位置し、第36号住居址のすぐ西に接している。規模は4.4×4.3m、プランは隅丸方形である。検出面から床面にかけてかなりの量の礫が入っており、特に西寄りは礫が多い。東寄りは良質の褐色土層である。壁高は10cmあまりで、50°の角度で立ち上っている。壁及び床の西半分(------)は砂利まじりである。床面はほぼ平らであり、東側には東壁中央に80×80cmあまりの半楕円形のカマドがある。カマドは粘土のみで構築されたもので、礫などは含まれていない。住居址の東70cmには径30cmの煙出しピットがあり、焼土がつまっていた。ピットは4本検出されており、これらが主柱穴であると考えられる。P_1（55×40、−20）、P_2（60×35、−20）、P_3（40×35、−20）、P_4（45×45、−16）とやや浅い。遺物の出土状況は住居址中央の西端と、南側P_1、P_3間より、かなり形の整ったものが出土している。本址の時期は古墳時代後期と推定される。

(35)第38号住居址　（第39図）

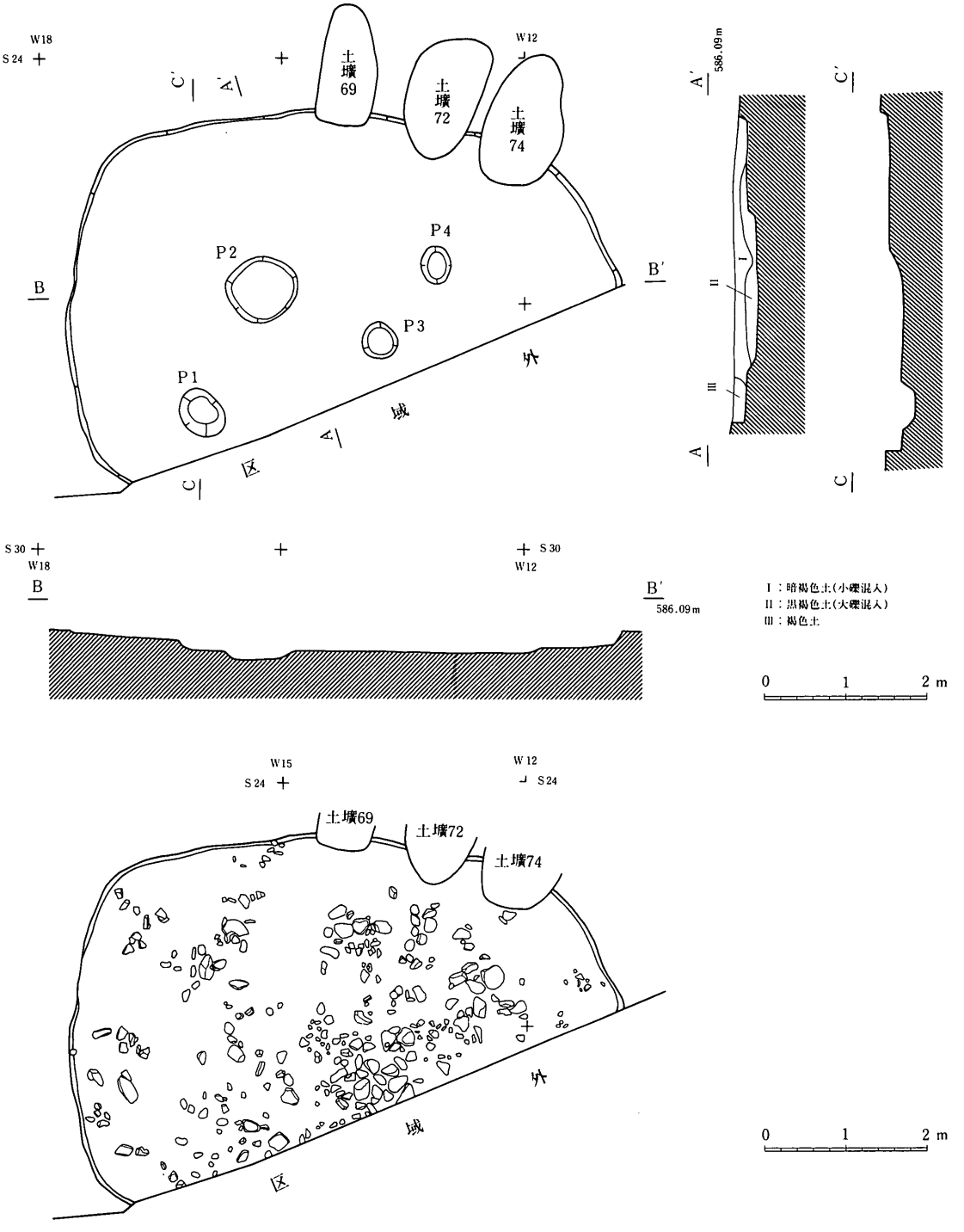
III区やや東寄り第39号住居址の北東に位置し、住居址の西側は土壙73に切られ、東側では溝3を切っている。8.4×5.3m、長楕円形のプランの住居址で、覆土は浅く、壁高は5～15cm程である。床面はほぼ水平でやや堅い。ピットは13本で、そのうち南西のP_{12}・P_{13}については規模が、接している土壙群と同じである。しかし、P_3が明らかにP_{12}・P_{13}を切っており、$P_{12}P_{13}$のほうが古いものである。主柱穴はP_1～P_4の4本であるが、間隔が4mと広すぎるので、補助柱の存在も考えられる。炉址は検出されなかった。遺物は東壁近くから小形坏の完形品と、東壁際床面から石庖丁、南側床面より鉢片が検出されたが遺物量は少ない。本址の時期は弥生時代中期末～後期前半と推定される。

(36)第39号住居址　（第40図）

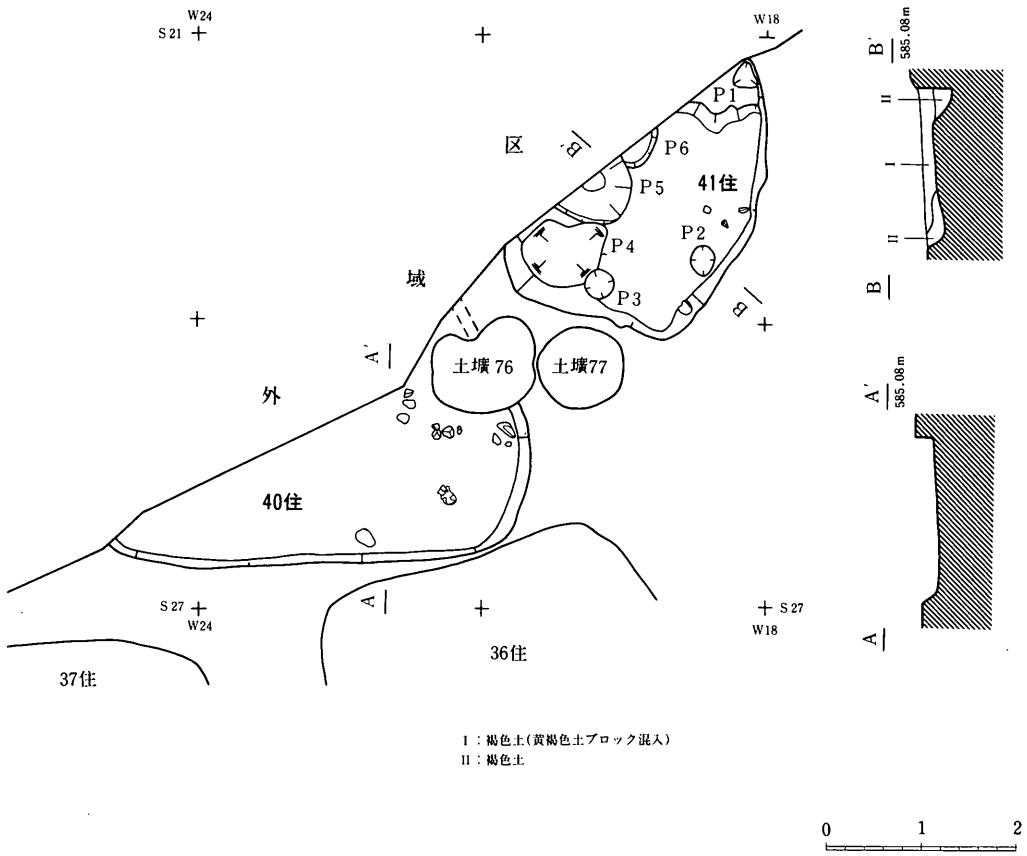
III区中央、第36号住の東、第38号住居址の西に位置し、土壙69、72、74に切られている。南側は農道の為、全体の半分を調査したのみである。東西6.8m、南北5m余の隅丸長方形プランの住居址である。覆土は黒褐色土で礫が多い。壁は北側で10cm余と低く、床面からは多量の遺物が出土した。壁より1.3m程内側に深さ約5cmの落ち込みが、住居址内側を二重にしたように廻っている。内側落ち込みは全体に土が黒色化している。床面はほぼ水平で軟弱である。ピットは4本検出されたが主柱穴は不明である。炉址は不明であるが、西壁近くに脚部の欠けた大形高坏の入った焼土箇所があり、鉄鏃1点も検出している。またP_1にも炭を含む黒色土が入っており、その中には土器があり脇からは紡錘車が出土している。本址ではこのほか鉄石英の管玉、打製石斧、石庖丁等が出土しており、床面直上礫下からも土器が出土している。本址は弥生時代中期末～後期前半と推定される。



第39図　第38号住居址



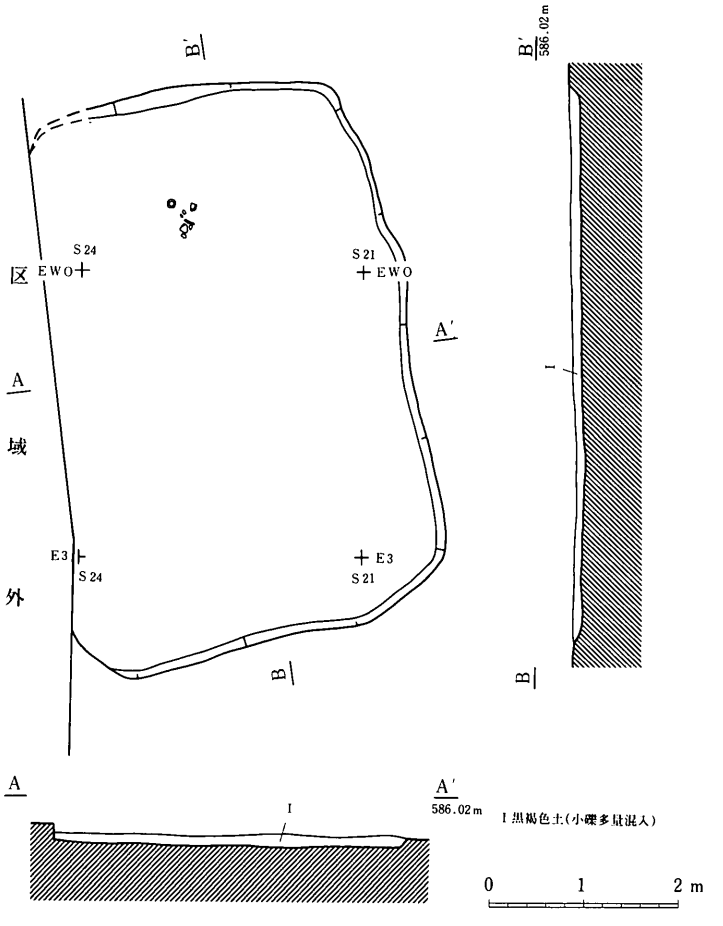
第40図　第39号住居址(上)　同　礫・遺物出土状態(下)



第41図　第40・41号住居址

(37)第40・41号住居址　(第41図)

III区中央北側に位置し、いずれも全体の4分の1程の発掘である。 第41号住居址は第40号住居址に切られていると思われる。第40号住が一辺5m余、第41号住が3m余の隅丸方形と考えられる。第40号住の壁高は20cm余と高く、床面はほぼ水平である。覆土は褐色土中に黄褐色土のブロックが混入している。ピットはなく、遺物は南東寄りにほぼ完形の甕と石鏃が出土している。その北側には10cm内外の礫が10ヶ程ある。遺物から本址は古墳時代後期と推定される。第41号住にも黄褐色土ブロックが混入し攪乱されている。また、何ヶ所も大きなピットが連なっている状態なので住居址かどうか疑問である。遺物は小破片を数点検出したのみである。本址の時期は弥生時代中期末と推定される。



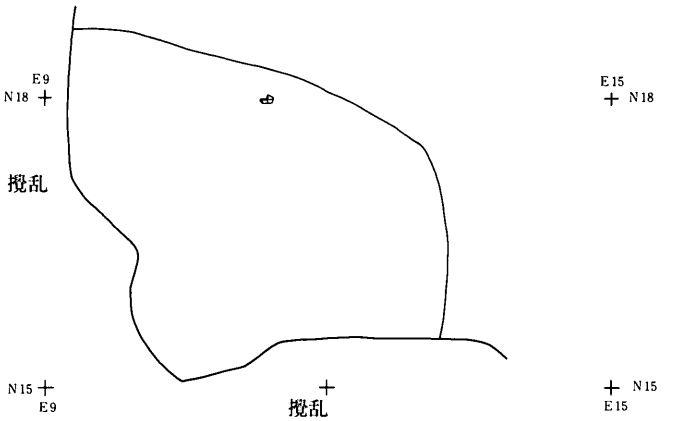
第42図　第42号住居址

(38)第42号住居址　（第42図）

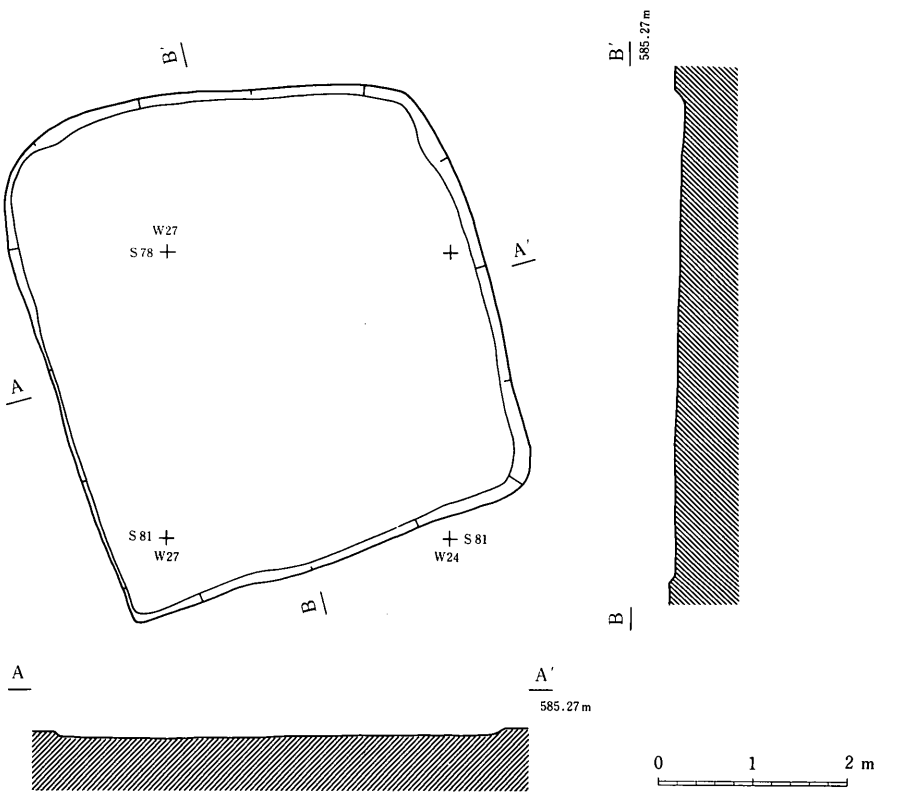
III区東端に位置し、南側は農道のため完掘できなかった。5.9×4.5mの隅丸長方形プランの住居址である。床面は礫が多く、西側が僅かに上がる。壁高は10cmあまりと低く、炉址、ピットはない。遺物は西側に径70cm程の範囲に底部２点を含む破片が出土している。

(39)第44号住居址　（第43図）

II区中央北寄りに位置し、第35、43号住居址に北接している。遺構検出時の削平と撹乱により床面の一部分しか検出できなかった。隅丸方形プランを呈すると思われる。床面の海抜高は、585.18～585.23mである。遺物は覆土中よりかなり検出されており、本址の時期も、それらをもととして弥生時代中期末から後期前半と推定される。　（神澤　昌二郎）



第43図　第44号住居址



第44図　竪穴状遺構Ⅰ

(40)竪穴状遺構1　（第44図）

Ⅰ区西端に位置している。長軸方向N－17°－W、5.1×4.75mの隅丸方形のプランである。遺構検出時においては、当初住居址と考えられた。しかし、床面からピット、炉が検出されなかったので竪穴状遺構とした。遺物は遺構埋没過程で流入したと考えられる土器、陶器片、鉄製品等が出土している。本址の時期は不明である。

2. 土壙（第45～56図）

本遺跡では、住居址に伴うピット以外のものをすべて土壙として扱った。今回の調査で検出された土壙は、土壙1～102の100基（土壙3・59は欠番）である。地区別にみると、I区が37基、II区が36基、III区が27基である。分布をみると、I区は中央～東半（W9～E24）に多く分布し、特に調査区東端、第14・18号住の東に集中している。II区は南西部に3基（土壙21・25・102）がみられる他は、北～東側に分布し、特に東側、第31・33号住の間に集中している。III区は西端から第38号住の間にかけて分布し、それ以東にはみられなかった。なお、I区東端部の土壙集中地区は、畑耕作及び攪乱によって住居址の壁～床面が失われている第8・14号住の東側に位置することから、これらの住居址に伴うピット、あるいは既に床面を失った住居址のピットである可能性をもっている。またII区東側の土壙群についても、重機による検出時の削平及び攪乱が激しいことから、同様なことが考えられる。

本遺跡の土壙の規模は、最小30×20cm（土壙79）から最大215×160cm（土壙31）までと大きなバラツキがある。そこで、便宜的に50cm単位ごとに土壙をまとめてみると、長径50cm以下は総数49基で、全体の半数を占める。50～100cm以下も33基とかなり多い。1mを越える土壙は18基を数え、II区、III区に特に多くみられる。平面形態は、円形、楕円形及びそれらの不整形が大半を占めているが、方形、長方形、隅丸三角形も若干みられる。平面形態と規模との関連をみると、長径50cm以下では円形が圧倒的に多く、他に楕円形が若干ある。50～100cm以下では、円形と楕円形が相半ばしている。1mを越えるものは楕円形が多いという傾向がある。断面形については、検出面が低いため十分なことは言えないが、半円～(逆)台形を成すものが多い。

以上が本遺跡の土壙の概要である。次に、特徴的な土壙について述べることとする。

土壙25は、II区南西部に位置し、第18号住を切っている。また、土壙東辺中央部から第18号住北東コーナーにかけて集石4によって切られている。長軸N－2°－W、210×70cmの隅丸長方形プランの土壙である。覆土から床面にかけて、5～25cm大の礫を大量に含んでいる。本土壙は、規模、プラン等から墓址の可能性をもっている。土壙102は土壙25の西37cmに位置し、第18号住を切っている。長軸方向N－71°－W、95×70cmの楕円形プランの土壙である。土壙底面から4～7cm程上方の黒褐色土上に大形の壺形土器が横倒しの状態で出土した。壺は、口縁部を西、底部を東に土壙の長軸に沿って置かれたようである。本土壙は土器棺墓の可能性をもち、壺から弥生時代後期前半のものと考えられる。土壙54はII区の東に位置し、第33号住を切っている。南北に長軸を有し、115×80cmの楕円形プランの土壙である。覆土内には多量の礫が混入していた。次項で触れるように集石遺構の中に、土壙を伴うものもあるので、同じ類のものかもしれない。土壙64はIII区中央西側に位置し、65×60cmの円形プランを呈している。覆土内から丹塗りの鉢形土器の大片が1点出土している。土壙の性格は不明であるが、土器より弥生時代中期後半から後期前半のものと推定される。土壙69・70・72・73・74・75はIII区中央東寄り、第38、39号住の間に位置し、土壙69、72、74は第39

号住を、土壙73は第38号住を切っている。6基ともやや東に振る南北に主軸をもつ楕円形プランの土壙で、ほぼ同規模である。また、土壙69、72、74、75と、70、73がそれぞれ並列している。なお、第38号住のP_{12}・P_{13}のプラン、規模も6基の土壙群と類似している。P_{12}・P_{13}は第38号住の主柱穴と考えられるP_3に切られることから、住居址に伴うものでなく土壙群の一部をなしていたと考えられる。この場合、土壙73が住居址を切っていること、さらに第38号住より時期が下がる第39号住を土壙69等が切っていることから、土壙群は短期間に形成されたものとは考えられないが、人為的なものであることは間違いない。この土壙群の形成は弥生時代中期後半～後期前半以降と推定される。

3. 集　石（第56・57図）

今回の調査で集石遺構として扱ったのは5つあり、総て竪穴住居址内で検出されている。集石遺構には、下に土壙を伴うものと、そうでないものの2種類がある。

集石1は第1号住、集石2は第2号住覆土中に検出されている。特に、集石1は礫の分布が90×82cmの円形プランを呈し、土層断面等より明らかに第1号住埋没過程のある時期に、人為的に投入されたものと考えられる。

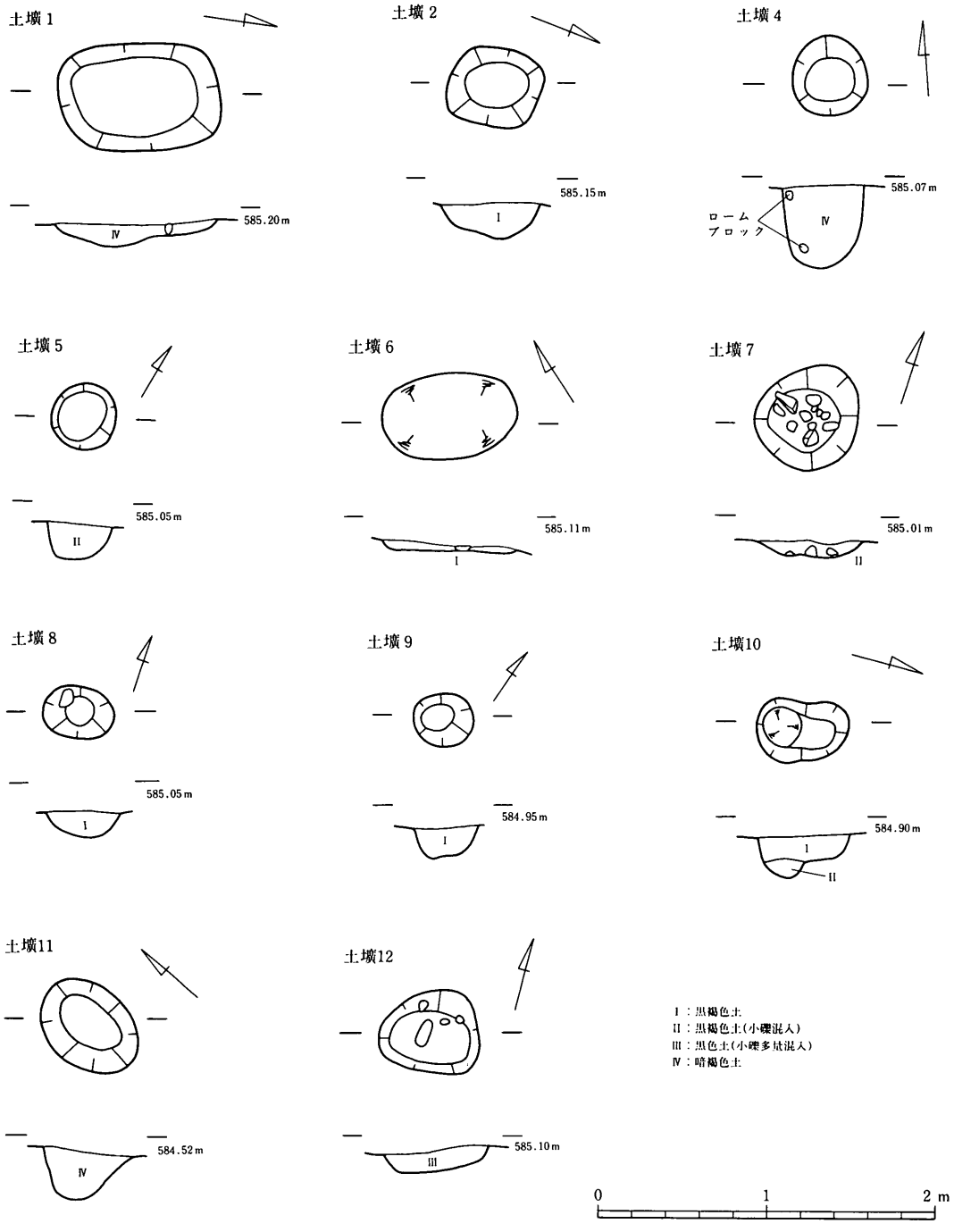
集石3・5は土壙を伴い、前者は第32号住を、後者は第26号住を切っている。集石を構成する礫は、土壙底面にはほとんどなく、検出面から土壙覆土中にかけて存在している。

集石4は第18号住を切る土壙25と、土壙102の上面より検出された。2つの土壙は墓址の可能性をもつもので、その標石的な用途も考えられるが、集石が土壙上よりやや東にずれていることや、集石と土壙との同時期性が捉えられないことから、可能性を示唆するにとどめたい。

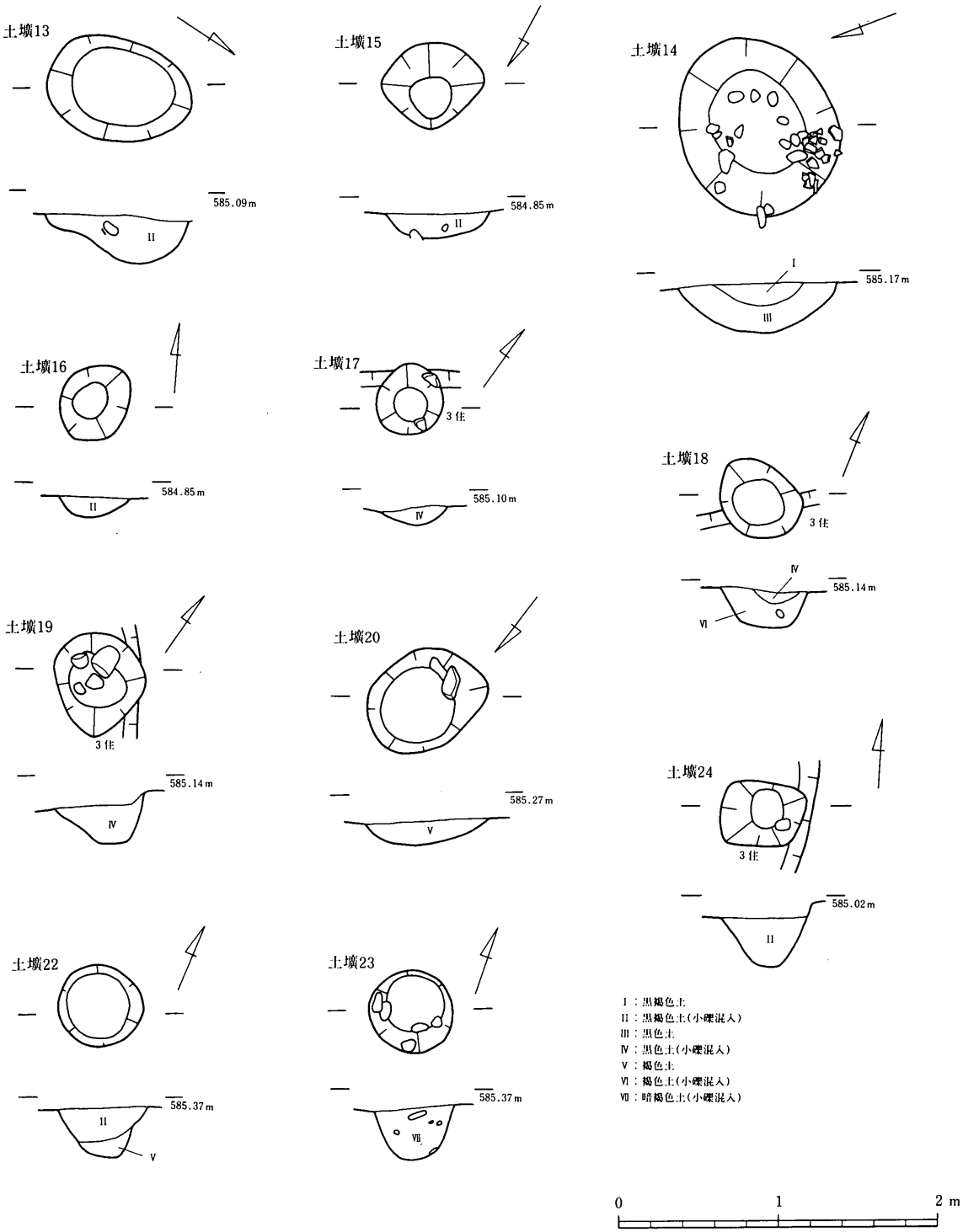
今回の調査において床面から覆土にかけて多量の礫を伴う住居址がみられたが、現時点ではこれらが人為的なものか、あるいは自然によるものかを明確にしえない。遺構・遺物の検討に加えて、地形・地質的な面からの検討が今後に残された課題である。

4. 溝（第25・32・39図）

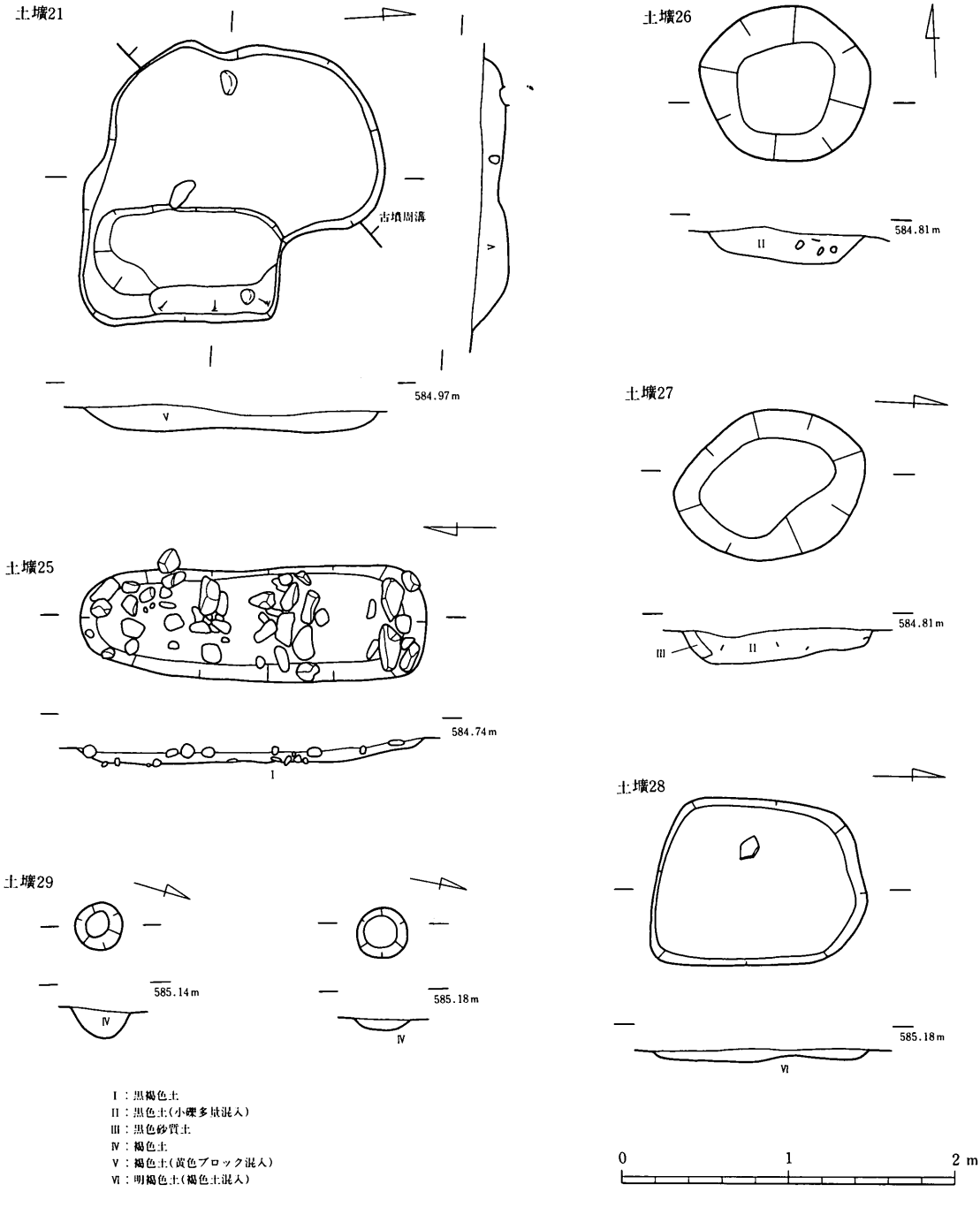
今回の調査で検出された溝は3本である。溝1はII区南西隅に位置し、第18号住の西側を切っている。西側が調査区域外の為、溝の全貌を把握できなかった。溝は検出面において長さ4.6m、幅0.8～0.9m、溝底面で0.45～0.5mを測り、南北に延びて区域外手前で西へ曲っている。西側には周溝をもつ古墳があること、本地区にかつて数基の古墳があったことから、周溝の可能性も考えられ、今後の調査が期待される。溝2はII区北側、第30号住の東に接し、南北に延びる長さ4.8m、幅0.23～0.32mの細長い溝である。検出面が低いため、覆土は2～6cmと浅く、明褐色土の堆積をみるにすぎない。溝3はIII区北東に位置し、一方を第38号住に切られ、一方は発掘区域外に延びている。長さ1.5m、幅0.32～0.4mを検出したにすぎず、本溝は未掘である。　（関沢　聡）


土壙 1
585.20 m
Ⅳ
土壙 2
585.15 m
Ⅰ
土壙 4
585.07 m
ローム
ブロック
Ⅳ
土壙 5
585.05 m
Ⅱ
土壙 6
585.11 m
Ⅰ
土壙 7
585.01 m
Ⅱ
土壙 8
585.05 m
Ⅰ
土壙 9
584.95 m
Ⅰ
土壙10
584.90 m
Ⅰ
Ⅱ
土壙11
584.52 m
Ⅳ
土壙12
585.10 m
Ⅲ
Ⅰ：黒褐色土
Ⅱ：黒褐色土(小礫混入)
Ⅲ：黒色土(小礫多量混入)
Ⅳ：暗褐色土
0
1
2 m

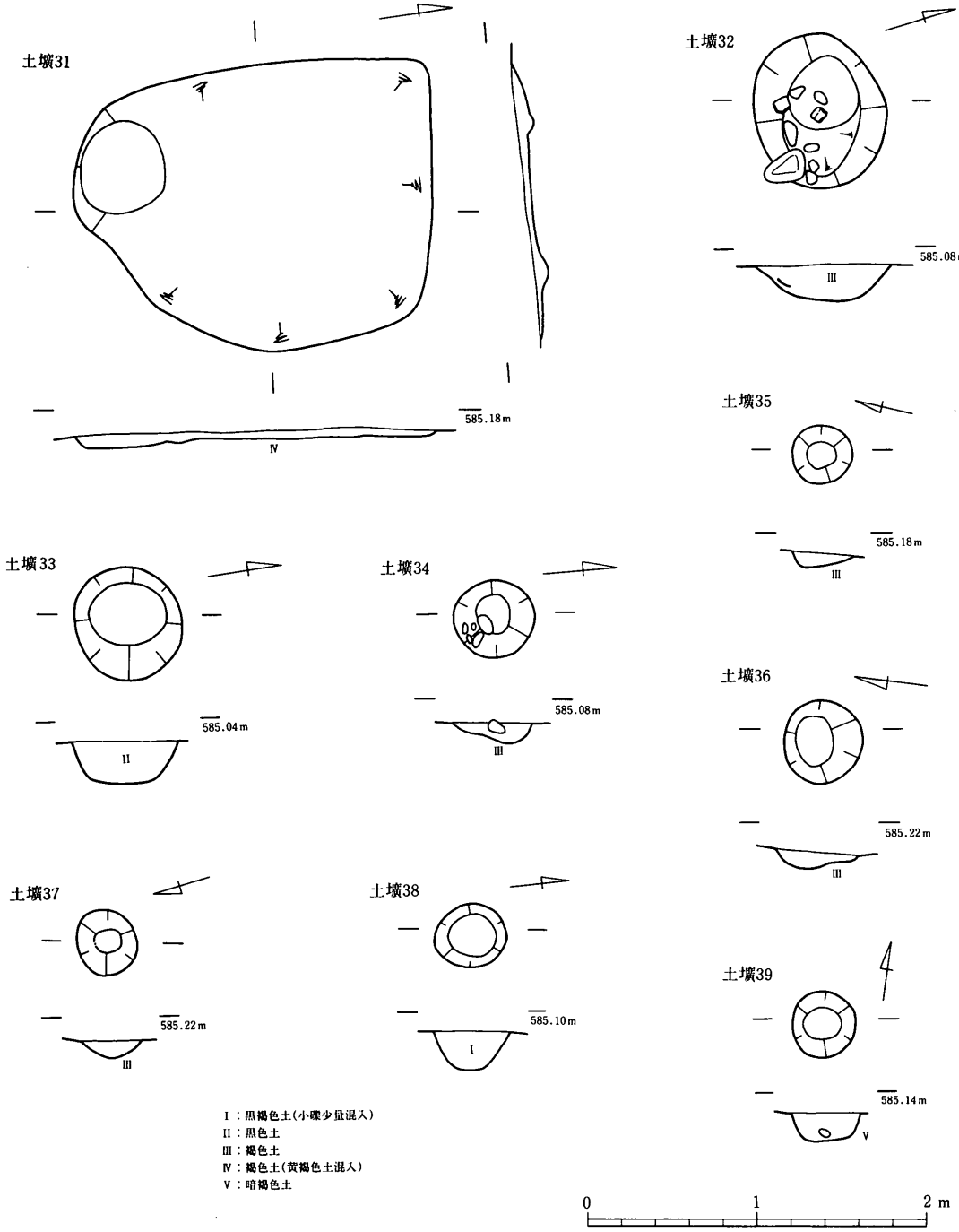
第45図　土壙（Ⅰ）


土壙13
585.09m
II
土壙15
584.85m
II
土壙14
585.17m
I
III
土壙16
584.85m
II
土壙17
3住
585.10m
IV
土壙18
3住
585.14m
IV
VI
土壙19
3住
585.14m
IV
土壙20
585.27m
V
土壙24
3住
585.02m
II
土壙22
585.37m
II
V
土壙23
585.37m
VII
I：黒褐色土
II：黒褐色土(小礫混入)
III：黒色土
IV：黒色土(小礫混入)
V：褐色土
VI：褐色土(小礫混入)
VII：暗褐色土(小礫混入)
0
1
2 m

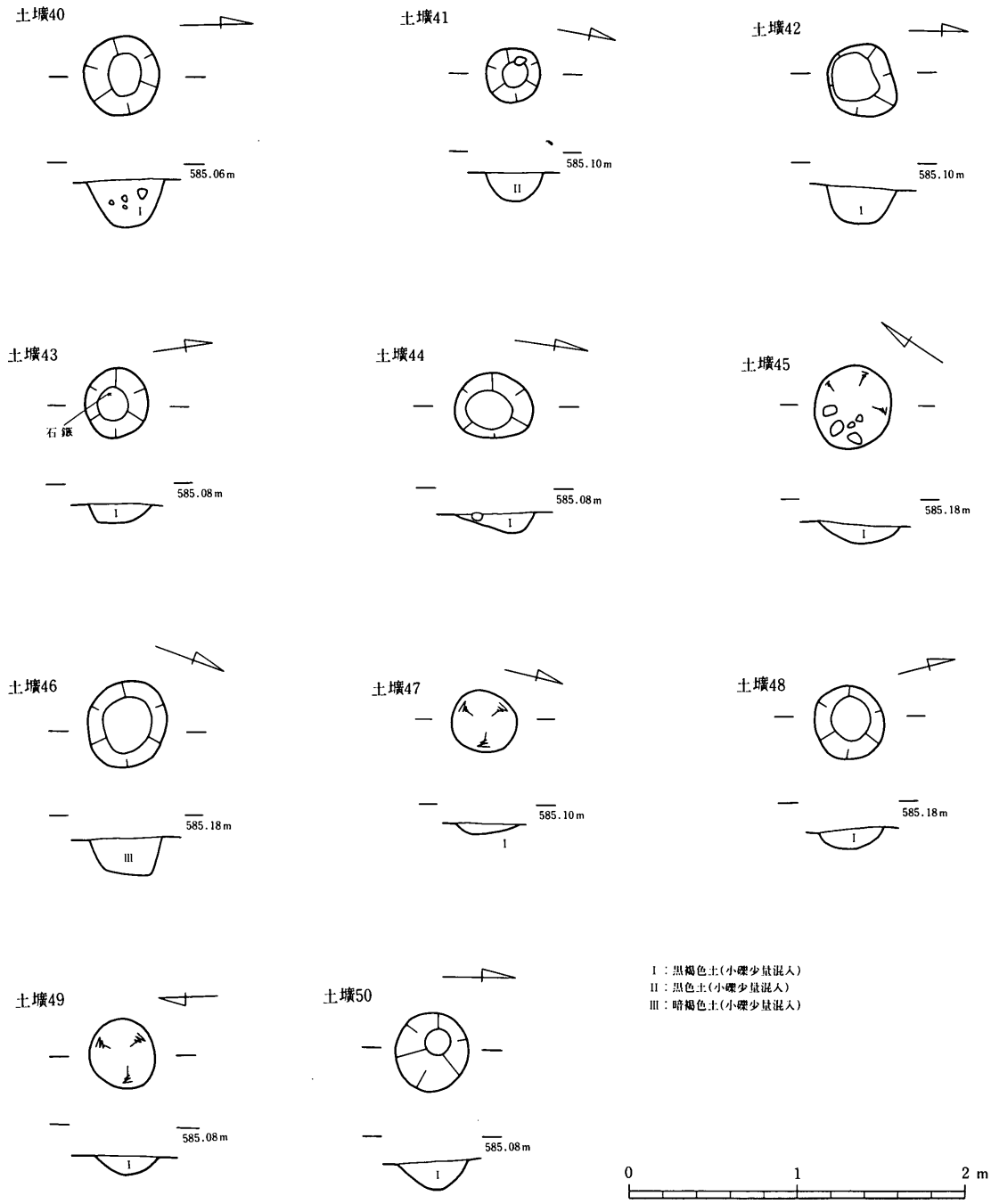
第46図　土壙（2）


土壙21
古墳周溝
584.97m
V
土壙26
584.81m
II
土壙27
584.81m
III
II
土壙25
584.74m
I
土壙28
585.18m
VI
土壙29
585.14m
IV
585.18m
IV
I：黒褐色土
II：黒色土(小礫多量混入)
III：黒色砂質土
IV：褐色土
V：褐色土(黄色ブロック混入)
VI：明褐色土(褐色土混入)
0
1
2 m

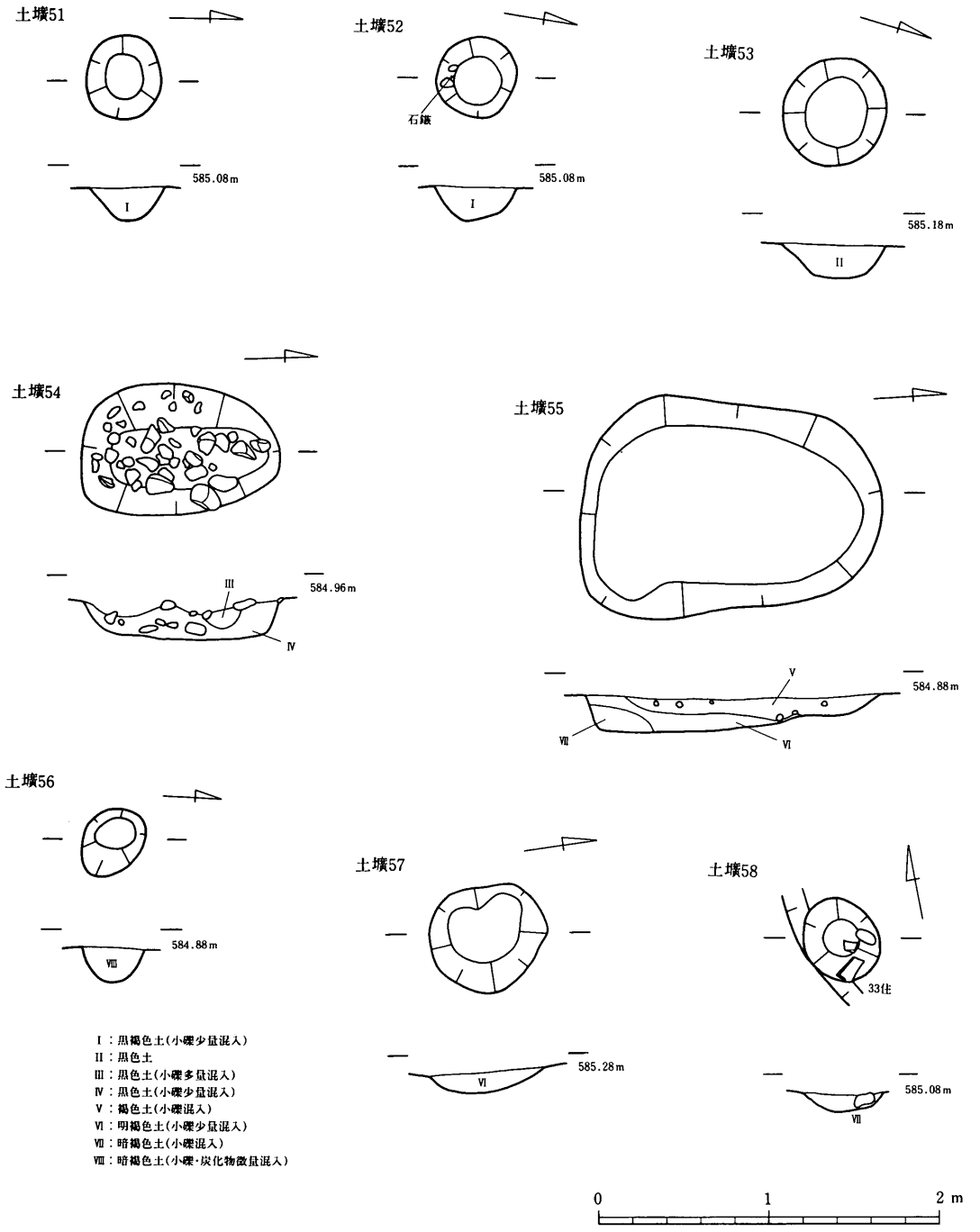
第47図　土壙(3)


土壙31
585.18m
Ⅳ
土壙32
585.08m
Ⅲ
土壙33
585.04m
Ⅱ
土壙34
585.08m
Ⅲ
土壙35
585.18m
Ⅲ
土壙36
585.22m
Ⅲ
土壙37
585.22m
Ⅲ
土壙38
585.10m
Ⅰ
土壙39
585.14m
Ⅴ
Ⅰ：黒褐色土(小礫少量混入)
Ⅱ：黒色土
Ⅲ：褐色土
Ⅳ：褐色土(黄褐色土混入)
Ⅴ：暗褐色土
0
1
2 m

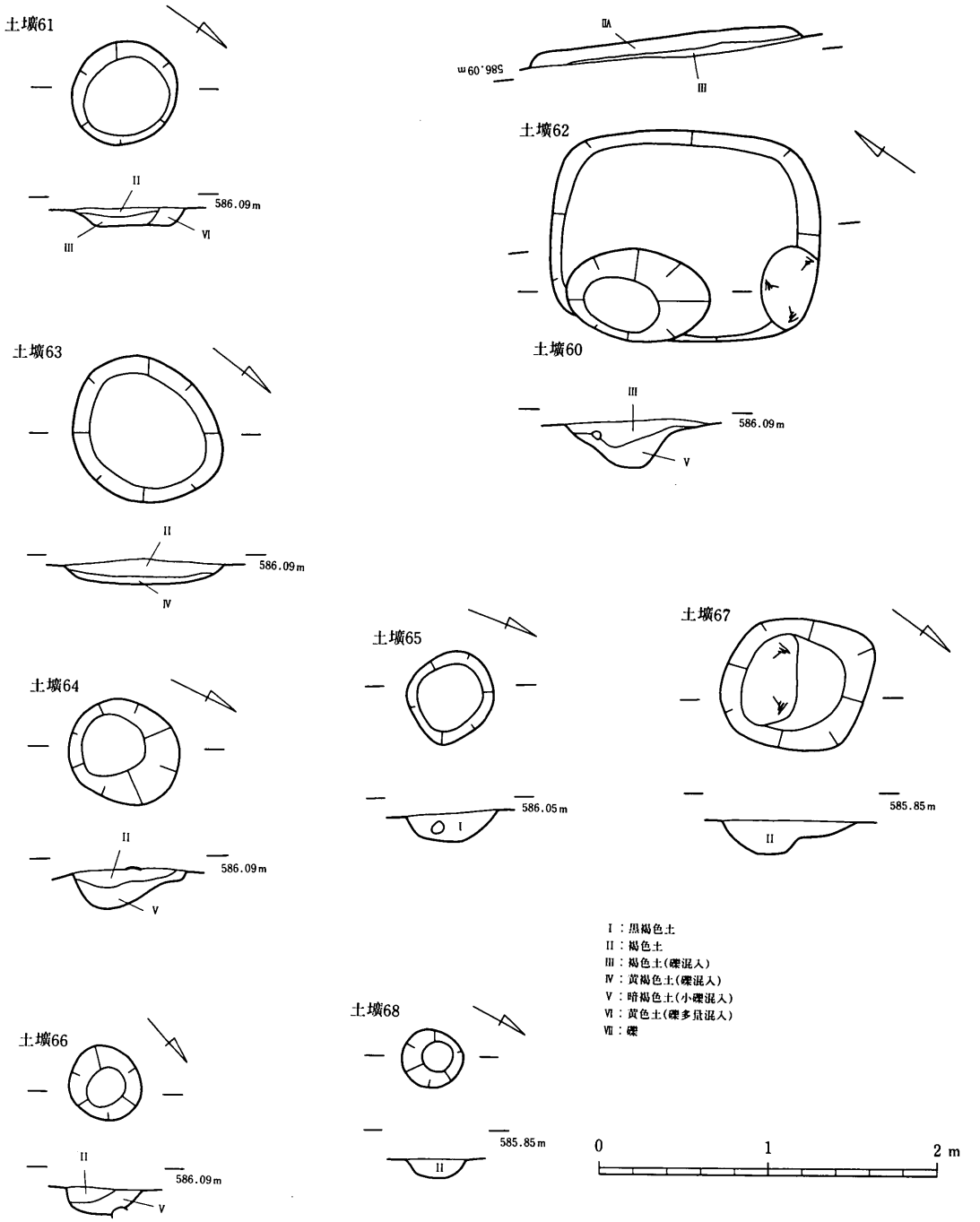
第48図　土壙（4）


土壙40
585.06m
I
土壙41
585.10m
II
土壙42
585.10m
I
土壙43
石 鏃
585.08m
I
土壙44
585.08m
I
土壙45
585.18m
I
土壙46
585.18m
III
土壙47
585.10m
I
土壙48
585.18m
I
土壙49
585.08m
I
土壙50
585.08m
I
I：黒褐色土(小礫少量混入)
II：黒色土(小礫少量混入)
III：暗褐色土(小礫少量混入)
0
1
2 m

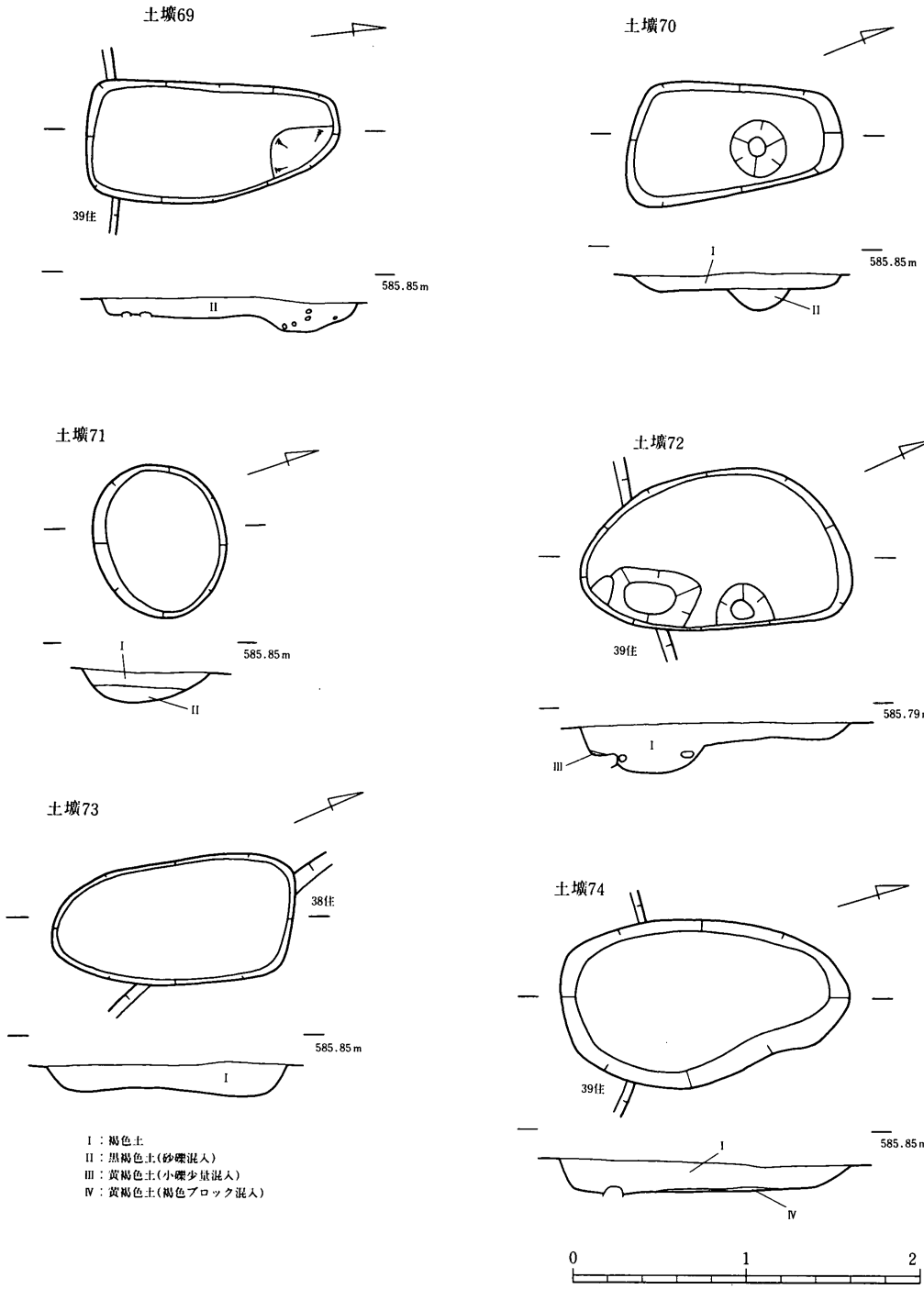
第49図　土壙（5）


土壙51
585.08m
I
土壙52
石鏃
585.08m
I
土壙53
585.18m
II
土壙54
584.96m
III
IV
土壙55
584.88m
V
VII
VI
土壙56
584.88m
VIII
土壙57
585.28m
VI
土壙58
33住
585.08m
VII
I：黒褐色土(小礫少量混入)
II：黒色土
III：黒色土(小礫多量混入)
IV：黒色土(小礫少量混入)
V：褐色土(小礫混入)
VI：明褐色土(小礫少量混入)
VII：暗褐色土(小礫混入)
VIII：暗褐色土(小礫・炭化物微量混入)
0
1
2 m

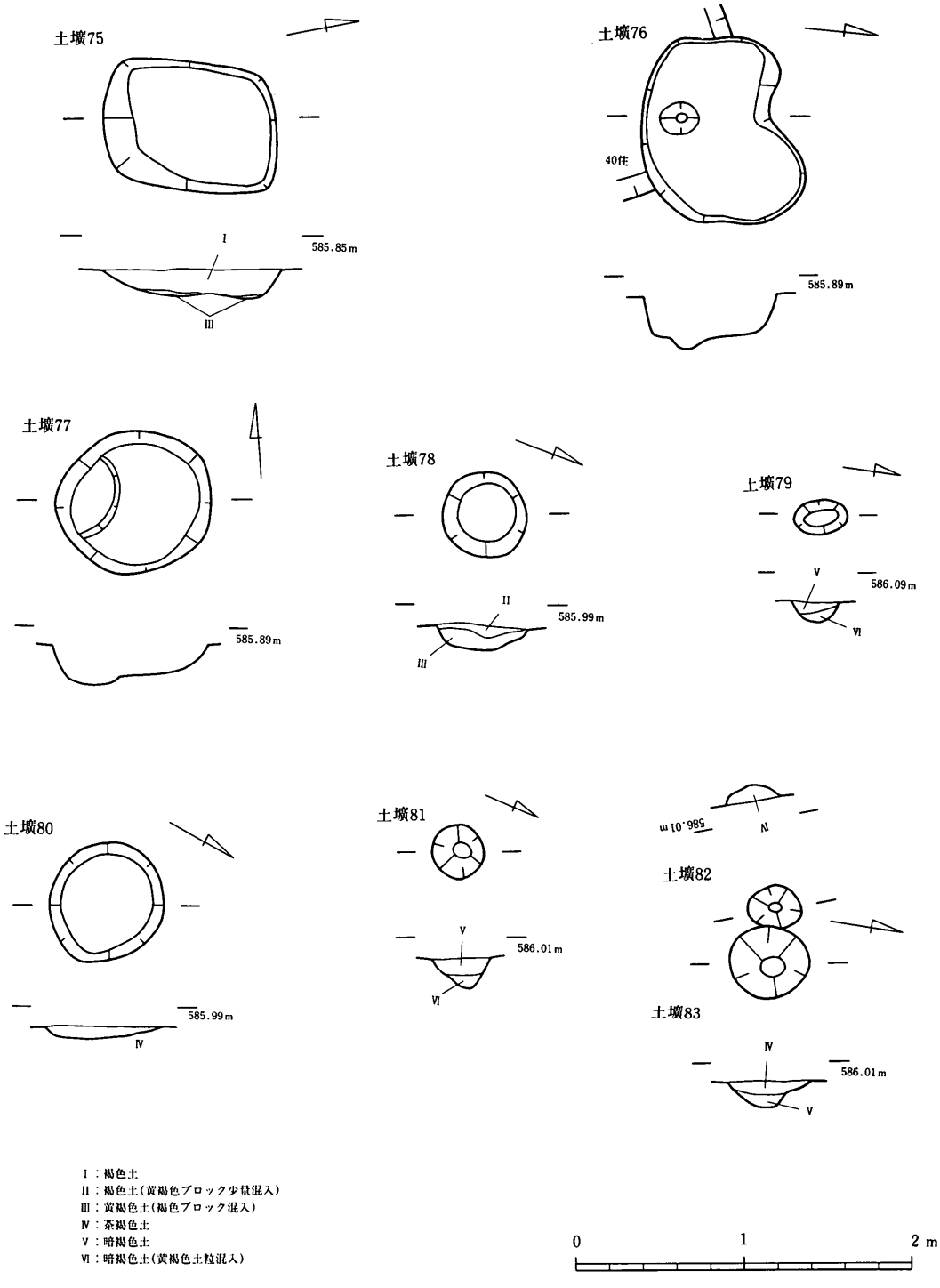
第50図　土壙（6）


土壌61
586.09m
土壌62
土壌60
586.09m
土壌63
586.09m
土壌64
586.09m
土壌65
586.05m
土壌67
585.85m
土壌66
586.09m
土壌68
585.85m
Ⅰ：黒褐色土
Ⅱ：褐色土
Ⅲ：褐色土(礫混入)
Ⅳ：黄褐色土(礫混入)
Ⅴ：暗褐色土(小礫混入)
Ⅵ：黄色土(礫多量混入)
Ⅶ：礫
0
1
2 m

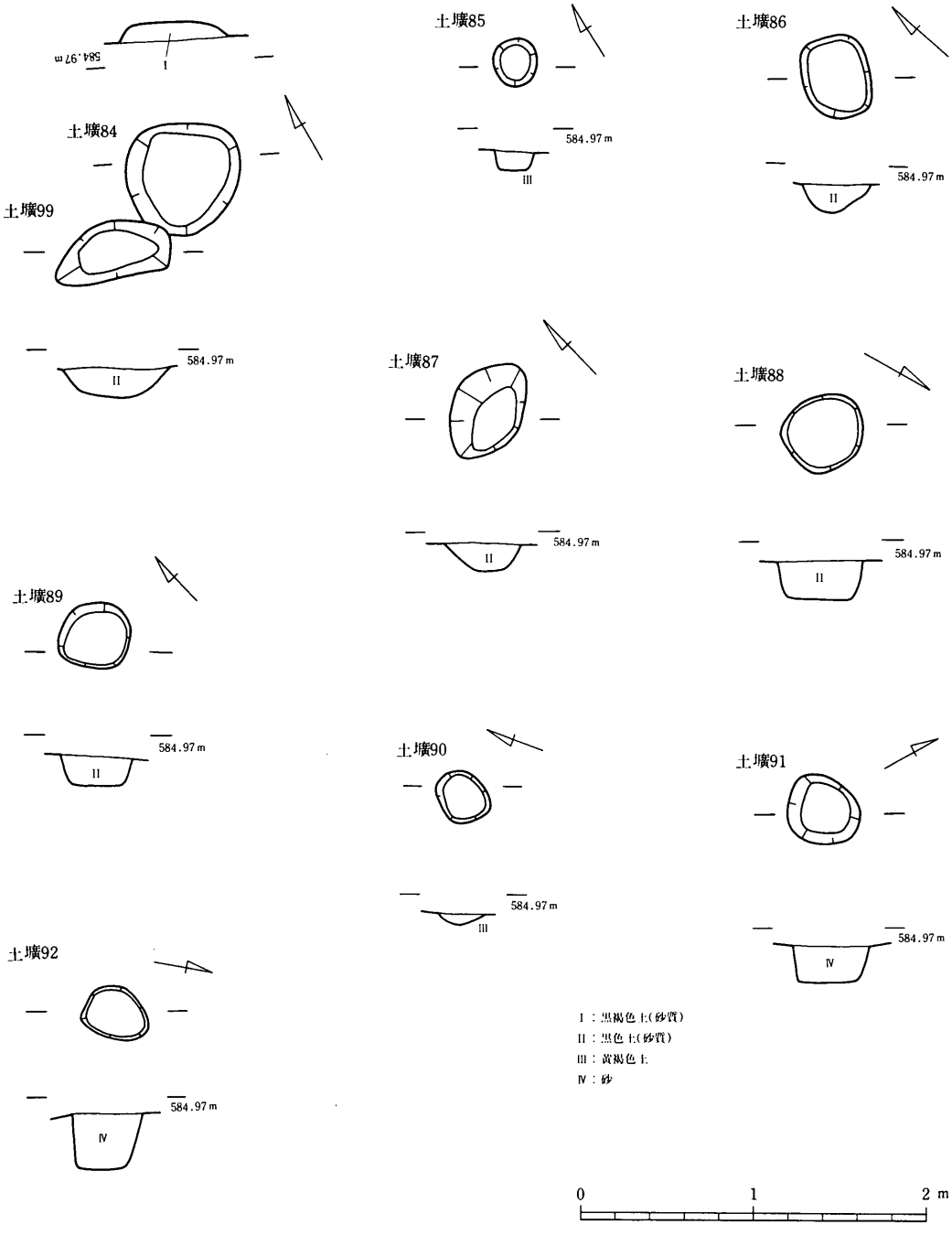
第51図　土壙(7)


土壙69
39住
585.85m
II
土壙70
I
585.85m
II
土壙71
I
585.85m
II
土壙72
39住
585.79m
I
III
土壙73
38住
585.85m
I
土壙74
39住
585.85m
I
IV
I：褐色土
II：黒褐色土(砂礫混入)
III：黄褐色土(小礫少量混入)
IV：黄褐色土(褐色ブロック混入)
0
1
2 m

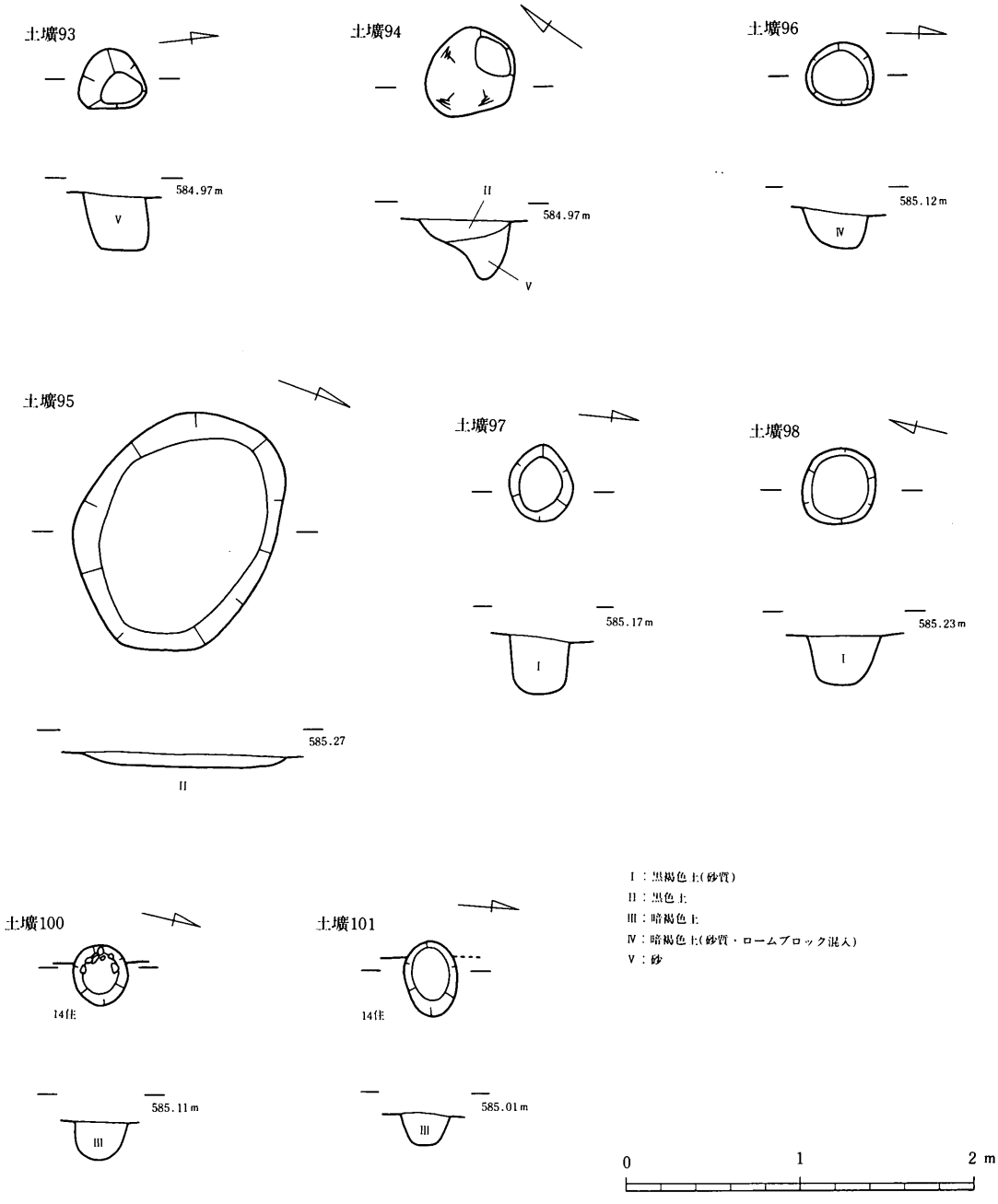
第52図　土壙(8)


土壙75
585.85m
I
III
土壙76
40住
585.89m
土壙77
585.89m
土壙78
585.99m
II
III
土壙79
586.09m
V
VI
土壙80
585.99m
IV
土壙81
586.01m
V
VI
586.01m
IV
土壙82
土壙83
586.01m
IV
V
I：褐色土
II：褐色土(黄褐色ブロック少量混入)
III：黄褐色土(褐色ブロック混入)
IV：茶褐色土
V：暗褐色土
VI：暗褐色土(黄褐色土粒混入)
0
1
2 m

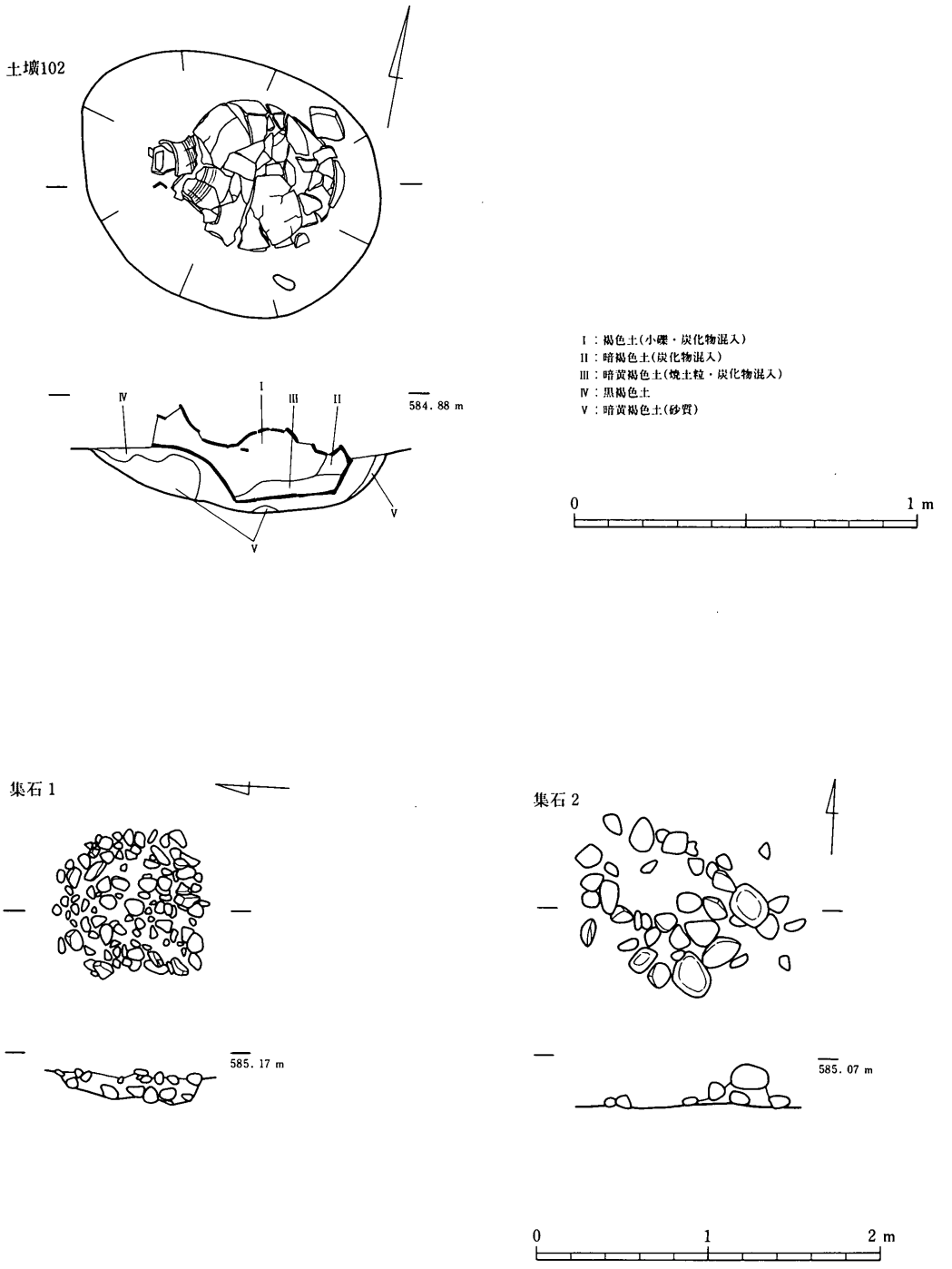
第53図　土壙(9)


土壙84
土壙99
584.97m
I
II
土壙85
584.97m
III
土壙86
584.97m
II
土壙87
584.97m
II
土壙88
584.97m
II
土壙89
584.97m
II
土壙90
584.97m
III
土壙91
584.97m
IV
土壙92
584.97m
IV
I：黒褐色土(砂質)
II：黒色土(砂質)
III：黄褐色土
IV：砂
0
1
2 m

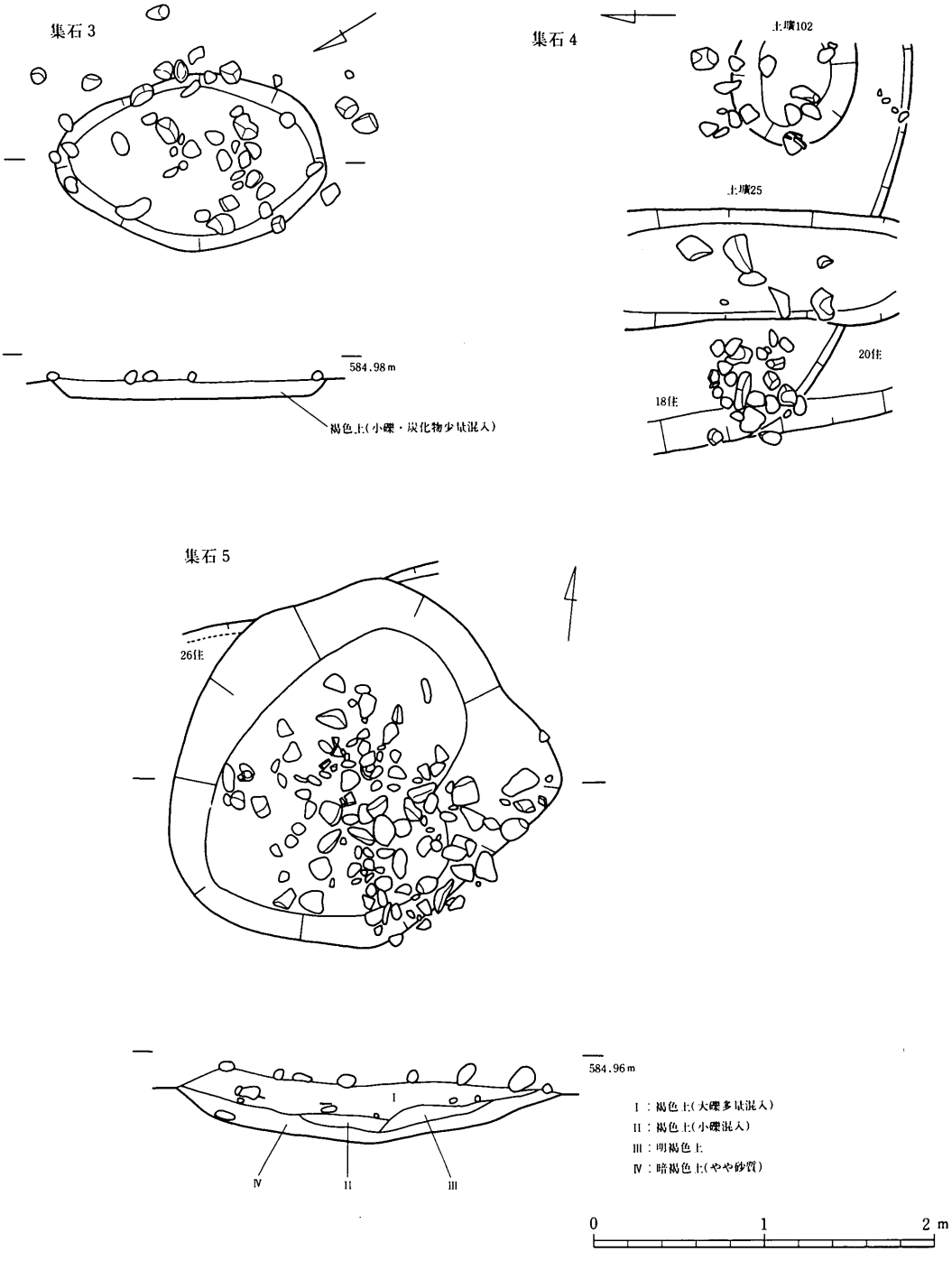
第54図　土壙（10）


土壙93
584.97m
V
土壙94
II
584.97m
V
土壙96
585.12m
IV
土壙95
585.27
II
土壙97
585.17m
I
土壙98
585.23m
I
土壙100
14住
585.11m
III
土壙101
14住
585.01m
III
I：黒褐色土(砂質)
II：黒色土
III：暗褐色土
IV：暗褐色土(砂質・ロームブロック混入)
V：砂
0
1
2 m

第55図　土壙（11）



第56図　土壙(12)・集石(1)


集石 3
584.98m
褐色土(小礫・炭化物少量混入)
集石 4
土壙102
土壙25
20住
18住
集石 5
26住
584.96m
Ⅰ
Ⅳ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅰ：褐色土(大礫多量混入)
Ⅱ：褐色土(小礫混入)
Ⅲ：明褐色土
Ⅳ：暗褐色土(やや砂質)
0
1
2 m

第57図　集石（２）

5. 古　墳（第58～61図）

(1)調査経過

II区の遺構検出過程でＮＳ０・Ｗ６付近より古式の須恵器片が出土し、Ｎ６～９・Ｗ３～６を中心に隅丸長方形の、全面に黄褐色砂ブロックを埋土にもつ落ち込みが検出された。他の弥生時代住居址とは異なる人為的な埋土と判断され、古墳址の存在を予想して検出作業を進めた。

その結果、落ち込みを中心に弧状にめぐる溝を検出し、墳丘の削平された古墳ないしは周溝墓と断定した。また、遺構はさらに西側調査区外に続いていることが判明した。

次に溝＝周溝の掘り下げと、方形落ち込み＝墓壙の掘り下げを並行して進めた。特に墓壙は木棺の存在を考え、四分法により埋土を剝ぎ取っていった。

最終的には墓壙内より６体の埋葬施設が検出された。これらの中には木棺と直葬があり、二次にわたって埋葬が行われていた。

一方、周溝は削平がひどく、良好に残存していたのは南側から東側にかけてだけであった。南側周溝の底面からは供献と考えられる土師器が一括出土し、東側では埋葬施設が検出された。

最後に調査区西辺の断面観察により墳丘の一部を確認し、種々の状況から本址を古墳と結論づけるにいたった。

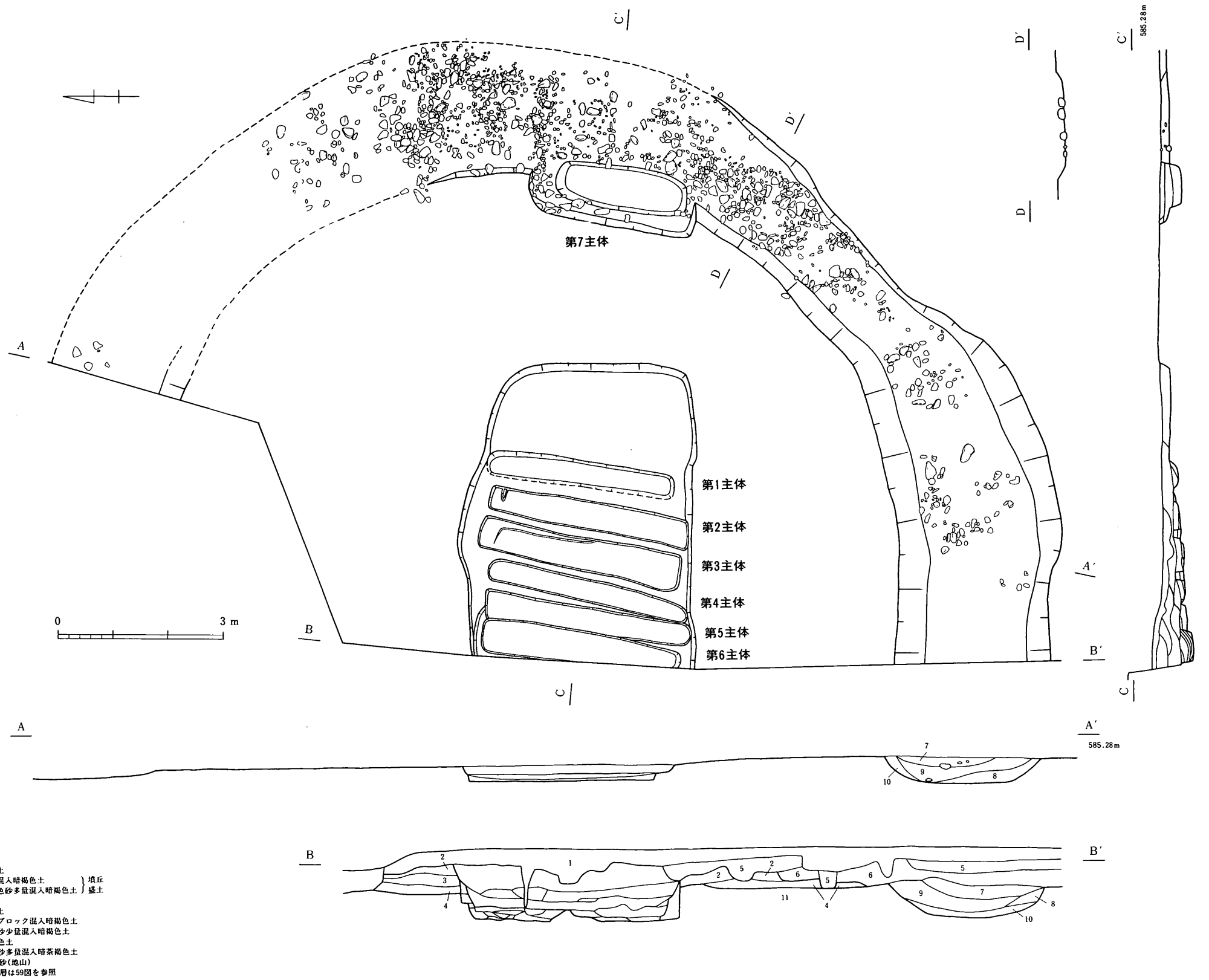
(2)古墳の立地

本古墳はII区のＳ３～Ｎ18・Ｗ９～Ｅ６に存在し、西側３分の１は調査区外に延びる。地形的には遺跡の広がる台地の中央平坦面に立地している。同時代の桜ヶ丘古墳と比較して、後者が山丘の頂上に位置するのと対象的であり、平地の古墳とすることができよう。

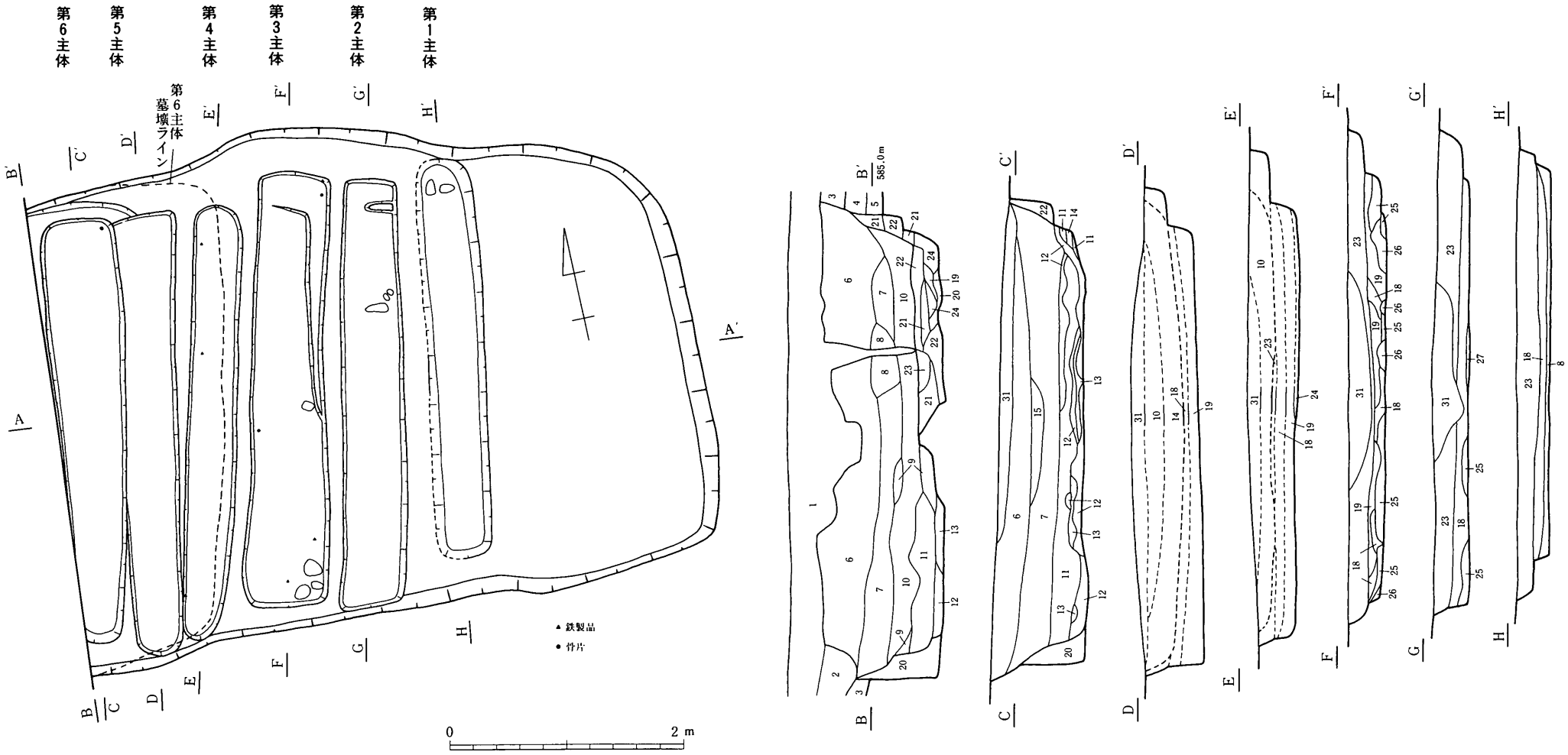
(3)墳丘および周溝の構造　（第58図）

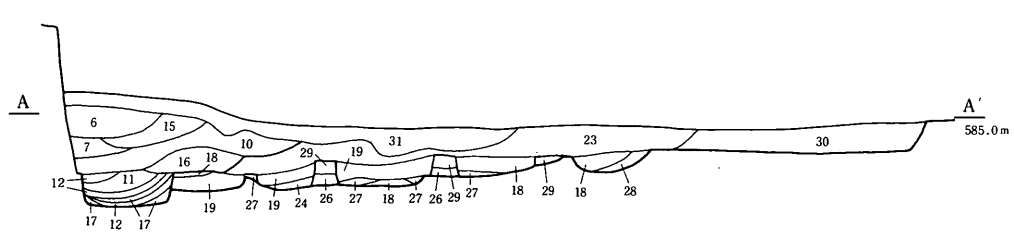
墳丘は周溝を巡らし、盛土を施すことによって形成されている。その平面形態は直径13.5mの円形を呈する。周溝は全周すると考えられるが、東～北部にかけては削平のため底面の一部しか残存しない。溝の最大幅は南側で2.9m、最小幅は南東で1.6mを測る。深さは南側で地山面より50cmで、断面形はＵ字形を呈する。底面は水平に構築されているが、南側は幅・深さとも他より大きく、後述する供献儀礼の場としての意識が働いていると考えられる。周溝底面には人頭大～拳大の礫を敷いている。特に東側で顕著であり、南側には少ない。これらはもともと地山中（正しくは黄褐色砂層の下層）に堆積していたものを溝掘削にあたって利用し、並べ替えたものとみられる。

墳丘は西半中央部付近で若干残存している。その構築にあたっては地山面を整地し、暗褐色土を盛り土として使用している。この盛り土には地山の黄褐色砂や礫の混入が全くなく、意図的に地山土の使用を避けているようである。このことは墳丘盛土と墓壙埋土においても言え、土を使い分けている。墳丘の現存高は地山面より50cm、南側周溝底面より102cmを測る。構築当時はこれより50～100cm程高かったものと考えられる。


第7主体
第1主体
第2主体
第3主体
第4主体
第5主体
第6主体
0
3 m
585.28m
1. 表土
2. 暗褐色土
3. 砂少量混入暗褐色土
4. 暗黄褐色砂多量混入暗褐色土
盛土
5. 褐色土
6. 茶褐色土
7. 黒褐色ブロック混入暗褐色土
8. 黄褐色砂少量混入暗褐色土
9. 暗茶褐色土
10. 黄褐色砂多量混入暗茶褐色土
11. 黄褐色砂(地山)
主体部内土層は59図を参照

第58図　古墳全体図





1 表土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 砂少量混入暗褐色土
5 暗黄褐色砂多量混入暗褐色土 } 墳丘盛土
6 黄褐色大ブロック多量混入茶褐色土
7 黄褐色小ブロック少量混入茶褐色土
8 黄褐色大ブロック少量混入褐色土
9 黄褐色大ブロック少量混入茶褐色土
10 黄褐色大ブロック多量混入暗茶褐色土
11 黄褐色小ブロック少量混入褐色土
12 褐色ブロック混入黒色土
13 黒色土混入暗黄褐色土
14 褐色ブロック混入黄褐色砂
15 黄褐色小ブロック少量混入褐色土
} 6号主体埋土
16 黄褐色大ブロック多量混入褐色土
17 黄色ブロック混入暗黄褐色砂
} 6号主体埋土
18 黄褐色小ブロック少量混入褐色土
19 暗褐色土・黄褐色ブロック混入褐色土
20 黒色土
21 黄褐色小ブロック少量混入茶褐色土
22 黄褐色砂
23 黄褐色ブロック多量混入褐色土
24 褐色ブロック混入暗黄褐色砂
25 黄褐色ブロック混入暗褐色土
26 暗褐色土
27 黄褐色大ブロック多量混入褐色土
28 褐色ブロック混入黄褐色砂
29 暗褐色ブロック混入褐色土
30 黄褐色大ブロック多量混入褐色土
31 撹乱土
} 1～5号主体埋土

第59図　墳丘内埋葬施設

⑷墳丘内埋葬施設　（第59図）

墳丘中央、隅丸長方形の墓壙内からは6体の埋葬施設が検出された。これらはすべて主軸を南北にとり、並行して構築されている。東側より第1主体～第6主体とし、その概要を述べる。

なお埋葬は二次にわたって行われ、第1～第5主体が一次埋葬、第6主体が二次埋葬である。

第一次埋葬施設　第1～第5主体がこれにあたる。隅丸長方形を呈する墓壙は、南北で4.3mを測る。東西は調査範囲で5.5mを示し、さらに西側は調査区外に広がる。北壁は中央で外側に張り出し、主体設置空間を広くとっている。底面は地山中まで掘り込まれ、東側で浅く（墳丘下70cm）西側は深い（墳丘下100cm）。すなわち東から西へ傾斜しているのである。これは地山面に弥生時代の22号住居やその他の遺構が存在し、それらの覆土中に主体を設けることを避けた結果と考えられる。また墓壙の埋土は、全体に地山の黄褐色砂のブロックを大量に含む褐色土を用いている。そのため墳丘盛り土とは明瞭に識別され、やはり土の使い分けがなされているものと考えられる。これは後述する第二次埋葬が、第一次の埋葬時に既に意図され、その位置確認を容易に行い、古い棺の破壊を避けるための処置と考えられないだろうか。事実、第二次埋葬の第6主体は、第5主体の西隣にぴたりと設置されているのである。

さて、各主体は墓壙中央の、南北4.3m・東西3.2mの範囲に設置され、東側には主体のない広い空間がとられている。西側にも同様の空間の存在が考えられる。

第1主体は最も東側に位置し、墓壙底面でその輪郭を確認した。その規模は長さ347cm・幅49cm・主軸方向N16°Eで、狭長なプランである。深さは13cmで、断面形は半円形をなしている。埋土はブロック土の少ない褐色土である。床面は南北方向でのレベル差はなく、水平である。主体内よりの遺物の出土はなく、人骨等も残存していなかった。

本主体の埋葬方法については木棺を想定した。しかし主体内で木棺痕跡は検出できず、その規模や構造については不明である。ただ掘り方の断面形は半円形であり、木棺があったとすれば割竹形に近いものを考えなくてはならない。また掘り方の幅は49cmと大変狭く、埋葬主体としては問題が残る。あるいは実際の埋葬は行われなかった可能性もあるが、現段階では木棺直葬として扱っておく。その場合、埋葬頭位は北側と考えられる。

第2主体はその状況から木棺直葬が考えられる。当初墓壙埋土掘り下げの過程で、第1主体確認面と同レベルで長さ350cm・幅52cm・主軸方向N19°Eの長方形の輪郭を確認した（図中で示した輪郭線）。このラインは墓壙中央部では埋土中にあり、検出に困難を極めた。しかし南北両端では地山に掘り込んでおり、明瞭に検出された。埋土は黄褐色ブロックの少ない暗い土で、木棺にかかわる土と考えられる。床面までの厚さは13cmであった。床面は墓壙底面と中央部では同レベルで、水平な面をなしている。北端より20cmには、土手状の高まりがある。以上の状況から、①木棺安置部分の墓壙底面を水平に整地する。特に南北の小口部分は、棺の大きさにあわせて地山を掘り込み、水平にする。②木棺を安置する。想定される木棺の大きさは、幅52cmで、長さは両端の掘り込みより

短く、3m前後と考えられる。特に北側小口は、前述の床面の高まりの部分と考えられる。木棺の高さは不明で、埋葬頭位は北側と考えられる。③墓壙を埋める。という築造過程が復原される。

棺内よりの副葬品、人骨等の出土はなかった。

第3主体は、第一次埋葬5主体の中央に位置する。木棺直葬と考えられ、検出状況・埋土の状態等は第2主体と同様であった。すなわち検出時の輪郭は、長さ378cm・幅63cm・主軸方向N22°Eであり、床面までの深さは18cmを測る。床面は水平で、木棺の北側小口と考えられる部分で段をなす。想定される木棺は長さ3m前後・幅63cmで、北枕と考えられる。

棺内からは管玉1点・不明鉄製品3点・骨片2点が出土している。このうち、木棺掘り方北端の鉄製品1点は唯一原位置を保つもので、棺外遺物として捉えられる。他の遺物は攪乱により動かされている。骨片は火を受けており、上部攪乱による混入の可能性が強い。

第4主体も他の棺と同レベルでその輪郭を確認した。長さ378cm・幅38cm・深さ20cmで、主軸方向はN26°Eである。本主体もその状況から木棺と考えられるが、幅が38cmと異常に狭く、死者の埋葬が実際に行われたのか不明である。遺物は棺内より鉄製品が3片出土しているが、原位置出土ではなく、細片である。

第5主体は、第4主体と南半で接している。他棺と同様、木棺直葬が考えられる。掘り方輪郭は長さ385cm・幅約50cm・深さ約20cmで、木棺の長さは3m前後と考えられる。副葬品・人骨等は出土していない。なお本棺は、第二次埋葬の第6主体に、西辺を若干切られている。

以上の第1主体～第5主体のうち、第3主体は墳丘の中央に位置し、さらに各主体の中央に存在している。棺の規模も大きく、唯一玉類を副葬しており、本古墳の中心主体として捉えられる。さらに第2主体についても、位置・規模からみて第3主体に次ぐ中心的主体と考えられる。他の棺については中心主体の両脇にあり、幅も異常に狭いものがあり、やや性格を異にしている。さらに本古墳を特徴づける事実として、これら5棺が同時に埋葬されていることがあげられる。土層観察によれば5棺とも同一墓壙内に存在し、切り合いは一切認められない。同時多埋葬例として捉えられる。またもう一点、副葬品の少なさがあげられる。鉄製品については、腐蝕により消滅した可能性があるが、玉類はわずか1点のみであり、同時期の桜ヶ丘古墳等と差異を見せている。

第二次埋葬施設　第6主体が相当する。これは第一次埋葬が行われた後、時間を置いて追葬されたもので、検出面及び墳丘断面で墓壙の切合いを確認した。それによると、墳丘面での墓壙の大きさは南北4.15mで、第一次埋葬の墓壙に正確に合わせている。東西幅は2～3mと推定される。墓壙底面は第5主体の上面まで掘り下げられ、墳丘上面より85cmを測る。

主体は墓壙底面から、第5主体を若干切って平行に掘り込まれている。平面規模は長さ368cm・北小口幅65cm・南小口幅約40cmで、墓壙底面からの深さ23cm（墳丘上面より115cm）を測る。壙内には、墓壙埋土にはみられない黄褐色砂の特に顕著な土が充塡されており、木棺の想定はできない。従って本主体は、二段墓壙の直葬と考えられる。埋葬頭位は、北側で小口幅が広く、床面レベルが

高いことから、北枕と考えられる。墳内の遺物は、南寄りの埋土中より不明鉄製品が1点出土しているのみである。

前述のように、この第二次埋葬は古墳造営時より計画されていたと考えられる。それは墳丘盛土と墓壙埋土に全く異なる土を用い、追葬時に古い棺の位置が容易にわかるようにしている点である。従って、第6主体が第5主体にぴたりと接して構築できるのである。また、第一次と第二次の埋葬の時間差は、さほどないと考えられる。少なくとも、第一次埋葬の棺が、まだ形をとどめている間に追葬されているものと見たい。

⑸周溝内埋葬施設（第60図）

東側周溝内に存在する土壙墓を、本古墳の周溝内主体とする。その構築は周溝の埋没開始後に行われており、墳丘および周溝埋土を切っている。墓壙は二段の掘り方で、上段は315cm×120cm、検出面よりの深さ18cmの隅丸長方形を呈する。下段掘り方は上段掘方東壁に接して掘り込まれ、長さ245cm・幅83cm・検出面よりの深さ40cmを測る。墓壙底面は水平に構築されている。墳内より遺物の出土はなく、暗褐色～黒褐色の土で埋められている。埋葬頭位は北枕と考えられる。

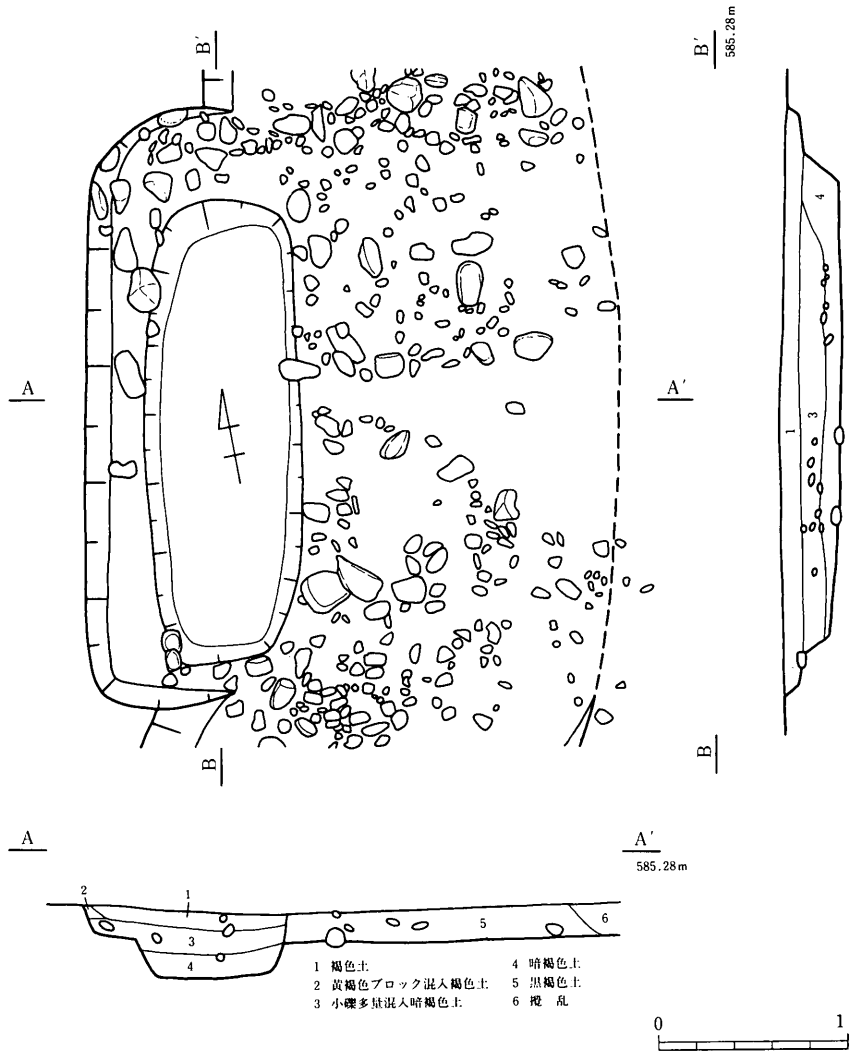
さて、本主体の構築にあたっては、注目すべき事がある。それは主体の位置が、墳丘内埋葬施設墓壙の長軸上にある点である。さらに墓壙主軸方向はN19°Eで、墳丘内主体と一致、平行になっている。明らかに内部主体を意識し、計画的に構築されている。時間的には、第一次埋葬後比較的短時間の後に埋葬されたものと考えられ、あるいは第二次埋葬と同時であったかもしれない。

⑹周溝内遺物出土状態（第61図）

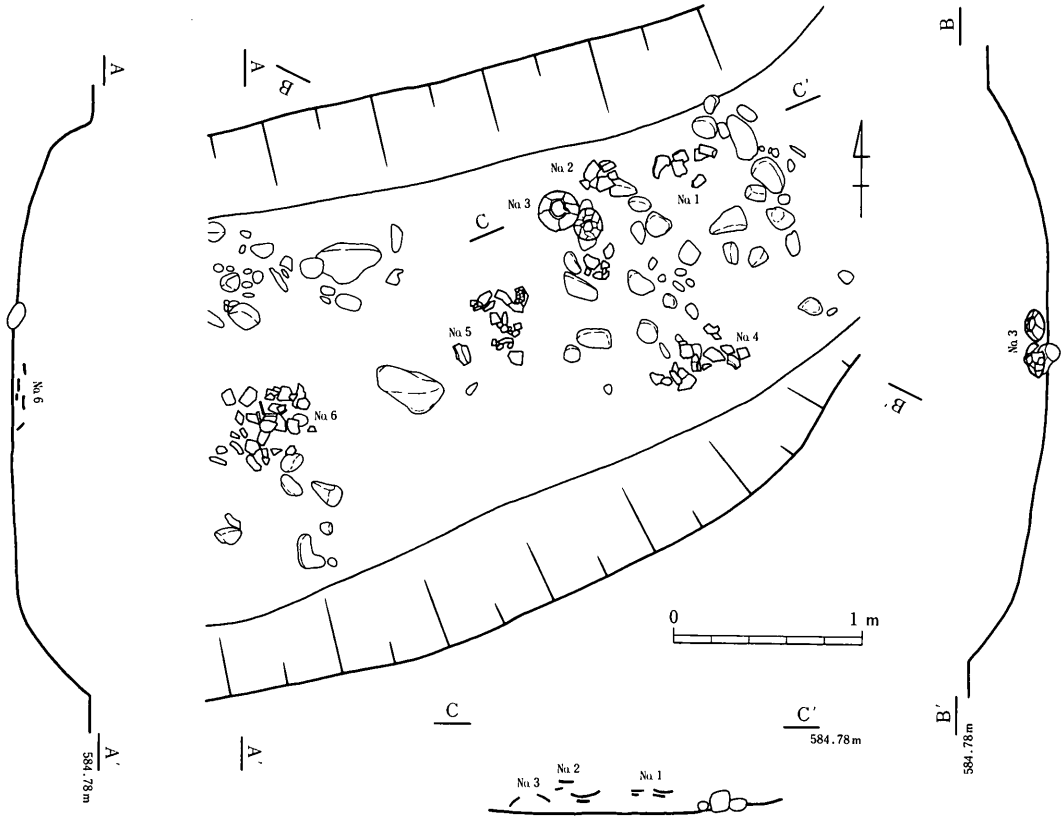
古墳に伴う周溝内遺物は、南側より一括出土している。前述のように、周溝は南側で幅広く、深い。この部分の底面より、6個体以上の土師器が出土した（No.1～6）。これらの土器については未整理で、詳細は遺物編に譲るが、器種としては高坏・埦・壺・二重口縁壺があり、供献土器のセットとして捉えられる。それらの出土状況は、高坏・埦が墳丘寄りの周溝底面に、壺類が中央からやや外寄りの底面に、それぞれ立てられていたものがつぶれた状態であった。特に、No.3の高坏は、河原石の上に立てられていたものが、坏部のみ破損して下方に転落した状況で出土した。また二重口縁壺は、西側にやや離れて置かれていた。それぞれの土師器は和泉式に比定されるものである。

これらの一括土器は、供献されたものと考えられる。土器の置かれた南側周溝は、葬送儀礼の場として機能したのであろう。その対象は墳丘内第一次の埋葬者と考えられる。

この他、やはり南側周溝の第7層中より、須恵器甕1個体分の破片が出土した。これは周溝の埋没過程で、溝内に置かれたと考えられるもので、あるいは墳丘内第二次被葬者に対する供献の可能性がある。いずれにしても、古墳の南面を供献の場としている点が注意されよう。



第60図　周溝内埋葬施設



第61図　周溝内遺物出土状態

(7)まとめ

最後に古墳の時期決定をし、その性格についてまとめておく。

周溝底面より出土した一括の土師器は、先述の如く和泉式に比定され、その年代は5世紀後半と考えられる。さらに、周溝埋土中より出土した須恵器は、口縁直下に断面三角形の稜が走り、体部は外面に平行叩き目を施し、ラセン状のスリ消を行っている。内面も、同心円文を施した後スリ消を行う。この様な点から、陶邑編年のＴＫ23～47式頃の須恵器と見られ、5世紀末～6世紀初頭の年代が与えられる。

以上土器の観察から、本古墳の築造時期は5世紀後半～末葉と考えられる。主体部が木棺であり、しかも狭長である点に古い要素が見られ、6世紀代までは下り得ないと判断した。

次に被葬者の性格について簡単にまとめておく。第一次埋葬は5体同時であった。それぞれ別々の墓壙をもつ多葬例については、従来いくつかの例が知られている。しかし、同一墓壙内に多葬する＝同時多埋葬例、特に本墳のような5体も埋葬する例はほとんど無に等しい。一般的には2体同時埋葬が多く、その場合夫婦合葬が考えられている。

本古墳の場合では、第3主体が中心主体であり、第2主体がそれに次ぐものであることを先に述べた。推論をすれば、宮渕周辺の1戸主＝男性が第3主体の被葬者であり、第2主体はその妻である可能性を指摘できる。さらに、第1・4・5主体については、その戸主夫妻と血縁的紐帯をもつ者＝子・兄弟が考えられる。特にこれらの棺は幅が非常にせまく、子供の埋葬の可能性が強い。第二次被葬者については、大きな墓壙をもちつつも木棺墓ではない。しかも独立して墳丘をもつことが許されなかった者と言え、第3主体の被葬者＝戸主の兄弟と考えることもできる。さらに周溝内の被葬者については、その位置、主軸方向等墳丘内の被葬者と関係をもちつつも、墳丘内には葬られない立場の人間ということができよう。

このように本古墳は第3主体の被葬者を中心とした、血縁的紐帯で結ばれた人々の墓、つまり家族墓的な墳墓とみることが可能である。そしてその世代は2～3代にわたり、各被葬者の間には年齢・性別・社会的地位といった差異が存在しているのである。

一方、松本平のなかでの本遺跡の古墳を考えた場合、ほぼ同時期で近い距離に存在する桜ヶ丘古墳との対比ができよう。その立地、墳丘規模、内部主体、副葬品等極だって異なっている。しかも、桜ヶ丘古墳の場合は特定個人墓としての性格が強い。松本平の前期～中期の古墳を語るにはまだまだ資料の増加をまたなくてはならない。しかし、桜ヶ丘古墳のような立地や内容をもつ特定個人墓としての古墳と、本遺跡のような小規模で家族墓的な古墳という二者のあり方＝古墳間での優劣の差が確実に存在することを示し得た点、今回の古墳の発見の意義は大きい。　　（竹原　学）

第4章　結　　び

宮淵本村遺跡は既述のように数多くの遺構・遺物の出土をみており、中でも既出土の銅鐸破片は県内では塩尻市柴宮の銅鐸とともに、唯二つの貴重な資料である。しかし、この著名な遺跡も過去2回の小規模な発掘調査が行われたにすぎず、本遺跡の一部分を窺い見たに過ぎなかった。

今回調査は初めて大規模に調査の手が入ったものであり、その結果、弥生時代を中心とした40軒以上の住居址と古墳1基の検出は、松本市周辺の弥生時代文化を知る上で貴重な資料を提供し、やはり宮淵本村遺跡は重要遺跡との印象を与えてくれた。又、出土遺物はおびただしい量にのぼり、その整理作業も他の遺跡調査との関係もあって着手出来ない状況である。為に本報告書は遺構編としてまとめたが、今回の調査地点に隣接して更に下水処理場拡張工事が予定されているため、第2次・第3次調査も有り得るので、今後の報告書とともに、遺物編を出したいと考えている。本章では本址遺構の2・3の点について取り上げてみたい。

1.　土器製作工房としての家

第Ⅰ地区第5号住居址を弥生時代後期前半の土器づくりの家、製作工房と考えている。その根拠については前述のとおりであるが、内部空間の使用法について考えてみたい。

工作台としての石の配置について　本址入口を北西とみて、入ってすぐ右側にＳ３・Ｓ４がある。Ｓ３は厚さ5cmあまりの平らな石で、表面は使用によると思われる摩耗がある。Ｓ４は厚さ17cmの立方体に似た石で、上面は薄く欠けており、その部分がＳ５である。Ｓ３の上面は部分的に擦れており、位置からしてＳ４に腰掛けて、Ｓ３の台石の上で粘土をあつかったのではないか。Ｐ５を隔てて粘土塊があり、Ｓ６・Ｓ７がある。Ｓ６は上面平ら、Ｓ７は丸みを持った石であるが、共に上面に使用痕があり擦れている。Ｓ７の30cmあまり東方には大形土器片が出ている。入り口より入って2mあまりの中央寄りに、Ｓ１・Ｓ２がある。Ｓ１は2.5cm、Ｓ２は6cmの厚みを持ち、ともに薄く平板な石である。いずれも上面は擦れており、使用されたことを窺わせる。Ｓ２周辺には壺形土器の大形破片と共に幅1.5cm程の指頭圧痕のある粘土紐がかなり出土した。これらをまとめると、工作台は6個あり、本址西側には10m²あまりの広さがあるので、常時5～6人の作業者が働く事が可能である。

土器集中出土地点について　本址東側半分にはべったりと土器片が重なって出土した。これらは未整理ではあるが、殆どが一括土器である。このことは土器の上に土器が重なって置かれていたことを示唆し、その状況から棚状のものによって、上下空間を利用していたことが考えられる。特に出土土器は粘土紐を張り付けた、指頭圧痕も生々しい製作途中の土器が多くあり、又、生粘土に火がかかった状況か、鋭角に曲がった土器片などがあることからして、ここへは成形済あるいは製作途

中の土器を保管、乾燥した場所と考えられる。更には棚が想定される部分には炉があり、土器製作の季節外には何らかの作業場あるいは居住の場所として利用されたのではないか。それが土器製作が終わりに近づき乾燥に入ろうとしている段階で火災が起こったものと推察される。

弥生時代の土器製作遺構については寡聞にして知らないが、本住居址についてはいくつかの問題が提起される。

①土器製作については、本址が集落単位の協業の場としての一括生産か。あるいは集落内における特定集団による専業的な作業の場であったのか。

②出土土器量から一集落における必要土器量が推定できないか。

③土器片に見られる指紋によって、土器製作者の性的分業について判明の手掛かりが得られないか。

④出土土器、特に未製品により、土器の製作技法が解明できないか。

等々に対して、今後慎重かつ精密な分析を行って解決してゆきたい。

2. 住居址の平面形と面積

本遺跡で検出された住居址は43軒であるが、その内、弥生時代の竪穴住居址を時代別と平面形から見てみると、次のようにまとめることが出来る。(平面形については一部推定できるものも加えて計36例、面積についてはほとんど全平面形の判明しているもののみを15例を抽出した)

区分＼時期		中期後半～末		後期前半（一部中期後半～後期前半を含む）	
	形状	隅丸方形（隅丸長方形を含む）	楕円形（長楕円形を含む）	隅丸方形（隅丸長方形を含む）	楕円形（長楕円形を含む）
平面形	例数	11	10	9	6
	%	52%	48%	60%	40%
面積	例数	3	6	3	3
	平均	28.6m²	23.7m²	23.5m²	22.8m²
	平均	26.2m²		23.2m²	

これから云えることは、平面形では中期後半から末までは隅丸方形と楕円形とは半々で後期に入ると隅丸方形が多くなり、中部地方の一般的傾向と全く同一である(1)。愛知県の朝日遺跡では中期前半では円形が多く、後期初頭で隅丸方形が一般的のようである(2)という。岡谷市橋原遺跡は弥生時代後期であるが、46軒の竪穴住居址の平均が26.4m²であり(3)佐久市の北西久保遺跡では20～29m²が最も多いという(4)。これからみると本遺跡の場合もほぼ平均的といえよう。

3. 古墳について

宮淵本村遺跡は二つ塚遺跡とも呼ばれており、些か混同の感があるが、それはこの地に二基の塚山があったからとの話を聞いている。今回調査でも多少の古墳時代遺物の存在は予想されてはいたが、古墳そのものの発見は思いがけないことであった。しかし、このことにより二つ塚の話が信憑性のあるものだとわかった。今回発見の古墳の他にもう1基の古墳は既に削平された北側にあったのではないかと云うことである。

さて、前述のとおり墳丘内埋葬施設については6基の主体部があった。その各々は南北に並列し、第6主体部のみが二次埋葬との判断をしている。第1～第5主体部については全国的にも類例を知らず、地層からして同時埋葬と判断をくだした。ただ疑問の残っていることもある。それはあまりにも主体部の幅が狭いということである。中心と見ている第3主体部自体63cmと非常に狭い。とすると他も狭くて当然と云う考えと、あるいは主、副の二棺並列で他は空、主のみで他は空等の考えも浮かぶが、ここでは前者をとっている。

今次調査は市施設建設に先立つ調査であった。種々の問題を克服して第1次調査の完了をみた。関係機関及びご協力戴いた方々に衷心より感謝申しあげ、更に今後のご指導をお願いしたい。

（神澤　昌二郎）

参考文献

1．宮本長二郎　弥生文化の研究　7弥生集落“2．竪穴住居”　雄山閣　1986
2．柴垣　勇夫　朝日遺跡Ⅰ　本文編Ⅰ第7章“住居”　愛知県教育委員会　第一法規　昭和57
3．会田　進他　橋原遺跡　弥生時代住居址一覧表より抽出集計したもの　岡谷市教育委員会　1981
4．林　幸彦　弥生文化の研究　7弥生集落“7．遺跡の実例”長野県北西久保遺跡　雄山閣　1966

第1表　住居址一覧表

住居No.	掲載図	地区	主軸方向	平面形態 規模（m）	主柱穴	炉位置	炉形態 規模（cm）	所属時期	備考
1	5	I	N82°E	隅丸長方形 7.5×5.4	6	D	縁石埋甕炉 17×−10　（土器）	中期後半	炉体土器（甕胴部）上端は床面より5cm低い。
2	5	〃	N20°E	楕円形 (5.0)×4.0	?	B	地床炉（楕円形） 88×68×−10	後期前半	入口は北壁か？ 1住を切る。
3	7	〃	N30°W	隅丸方形 5.1×4.8	4	?		〃	床面中央にP1が存在。
4	9	〃	N90°E	隅丸長方形 (6)×4.4	?	D	埋甕炉 28×−16　（土器）	中期後半	炉体土器は壺頸～胴部を逆位に埋設。
5	11	〃	N67°E	楕円形 7.0×5.0	4	B	縁石地床炉（楕円形） 70×53×−11	後期前半	15住を切る。 F1
						A	地床炉（円形） 35×33×−10		F2
6	14	〃	N77°E	隅丸長方形 5.8×4.2	?	B	石囲炉（方形） 23×20×−20	〃	F1 石材は3ヶ。炉の数値は内法。
						〃	埋甕炉 22×−9　（土器）		F2 甕頸部を逆位に埋設。
7	16	〃	N66°W	隅丸長方形 6.1×4.6	4	?		〃	
8	18	〃	N90°E	隅丸方形 (5)×4.3	4	?		中期後半	
9	20	〃	N76°E	隅丸長方形 (7)×4.8	4	?		後期？	
10	21	〃	N72°E	楕円形 6.9×5.3	?	?		中期後半～ 後期前半	
11	14	〃	N18°W	隅丸方形 6.0×(5)	?	?		中期後半	6住に切られる。
12	18	〃	N 4°W	隅丸方形 5.2×4.9	4	D	地床炉（円形） 70×68×−16	〃	8住を切る。
13	22	〃	N47°E	不整楕円形 6.7×4.6	?	?		〃	
14	23	〃	?	（楕円形） —	?	?		〃	P1は炉の可能性あり。
15	11	〃	N77°E	（楕円形） (6)×？	4	?		〃	
16	9	〃	N 1°E	隅丸長方形 (5.7)×(4.0)	?	?		〃	4住に切られる。
17	24	〃	N18°W	（隅丸方形） 5.0×(4)	4	B	埋甕炉 16×−4　（土器）	後期末	炉体土器は大形土器の底板を使用。
18	25	II	N13°W	楕円形 6.6×(4.7)	?	?		中期末	20住を切る。 溝1，土壙25・102に切られる。
19	26	〃	N29°W	（隅丸方形） 4.0×？	?	D	埋甕炉 25×−12　（土器）	中期後半 ～末	炉体土器は甕体部。 21・22・23住を切る。
20	25	〃	?	（楕円形） —	?	?		中期末	土壙25に切られる。

住居No.	掲載図	地区	主軸方向	平面形態 規模（m）	主柱穴	炉位置	炉形態 規模（cm）	所属時期	備考
21		II							未掘
22		〃							未掘 21住を切る。
23		〃							未掘 21住を切る。
24	27	〃	N84°E	楕円形 6.3×4.9	?	?		中期後半	土壙26・27と切合い。
25	28	〃	N35°W	楕円形 (5.4)×(4.6)	4	?		後期前半	24・27住を切る。
26	29	〃	N82°E	長楕円形 7.3×4.2	?	B	埋甕炉 18×−15　（土器）	中期末	甕下半部使用。
27	28	〃	?	（楕円形） −	?	?		（中期後半～後期？）	
28	31	〃	N73°W	隅丸方形 5.6×(5)	6	?		中期後半	P2は炉の可能性あり。
29	32	〃	N43°E	長楕円形 −	?	A?	埋甕炉 21×15×−7　（土器）	後期	30住を切る。
30	32	〃	N88°E	（隅丸方形） 4.5×？	?	?		中期末	
31	33	〃	N 6°W	楕円形 6.4×4.7	4	?	埋甕炉 26×24×−13（土器）	〃	
32	31	〃	N87°E	楕円形 5.7×(4.5)	?	?		中期後半	28住を切るか？土壙55を切る。 集石3に切られる。
33	34	〃	N86°E	長楕円形 4.9×(3.4)	?	?		中期末	
35	35	〃	?	（隅丸長方形） −	?	?		（中期後半～末）	床面の一部のみ確認。
36	36	III	N17°W	隅丸方形 (3.5)×3.8	4	C	縁石埋甕炉 17×−8　（土器）	中期後半	炉体土器は壺底部。
37	38	〃	N80°E	隅丸方形 4.4×4.3	4		東壁中央にカマド	古墳時代後期	東壁外70cmに煙出しあり。
38	39	〃	N 7°W	長楕円形 8.4×5.3	4	?		中期後半	土壙73に切られる。
39	40	〃	N86°W	隅丸長方形 6.8×(5)	?	?		中期末～後期前半	土壙69・72・74に切られる。
40	41	〃	?	（隅丸方形） −	?	?		古墳時代後期	土壙76に切られる。
41	41	〃	N13°E	（隅丸長方形） (3)×(2.5)	?	?		中期末	
42	42	〃	N80°E	隅丸長方形 5.9×(4.5)	?	?		（中期末～後期前半）	
43	35	II	?	（楕円形） −	?	?		（中期末）	床面の一部のみ確認。
44	43	〃	?	（隅丸方形） −	?	?		（中期末～後期前半）	〃

※炉の位置　A…奥壁−B間　B…奥壁寄柱穴間　C…B−D間　D…床面中央（柱穴間）
　炉の形態　炉縁石を有するものについては、炉形態の頭に「縁石」を付した。

第２表　土壙一覧表

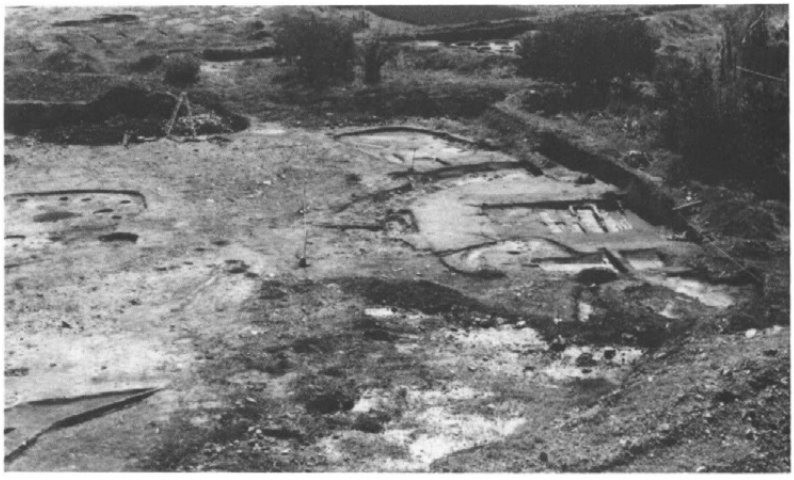
No.	図	位　置	平面形	断面形	平面規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
1	45	Ⅰ区 南西	方　　形	皿　形	95×55	15	
2	45	〃　南	不整円形	半円形	55×50	20	
3							欠番
4	45	Ⅰ区中央東	円　　形	深丸形	45×45	50	
5	45	〃　東	〃	半円形	40×40	20	
6	45	〃　〃	楕円形	皿　形	80×50	5	14住と切合い。
7	45	〃　〃	不整円形	〃	65×60	10	〃
8	45	〃　〃	楕円形	半円形	40×30	20	〃
9	45	〃　〃	円　　形	台　形	40×35	15	〃
10	45	〃　〃	不整楕円形	不定形	55×40	20	
11	45	〃　〃	楕円形	半円形	65×50	30	
12	45	〃　〃	三角形	皿　形	60×50	15	
13	46	〃　南東	楕円形	半円形	95×65	30	
14	46	〃　中央南	〃	〃	110×100	30	1住を切る。
15	46	〃　東	方　　形	台　形	55×50	25	
16	46	〃　東端	円　　形	半円形	50×45	10	
17	46	〃　中央	〃	皿　形	45×40	10	3住を切る。
18	46	〃　〃	楕円形	台　形	55×45	20	〃
19	46	〃　〃	不整円形	半円形	65×60	25	〃
20	46	〃　中央北	楕円形	台　形	80×55	15	
21	47	Ⅱ区 南西	不整方形	〃	180×165	20	古墳周溝を切る。
22	46	Ⅰ区中央西	円　　形	〃	55×50	30	
23	46	〃　〃	〃	三角形	55×50	35	
24	46	〃　中央東	長方形	台　形	50×40	30	3住を切る？
25	47	Ⅱ区 南西	〃	皿　形	210×70	10	上層に集石4。18･20住を切る。
26	47	〃　南東	円　　形	台　形	105×90	20	24住と切合い。
27	47	〃　〃	楕円形	〃	120×90	20	〃
28	47	〃　中央北	長方形	皿　形	130×100	10	
29	47	〃　〃	円　　形	半円形	30×30	20	
30	47	〃　〃	〃	皿　形	30×30	10	
31	48	〃　〃	不整楕円形	〃	215×160	10	
32	48	〃　北東	楕円形	台　形	90×80	20	
33	48	〃　〃	円　　形	〃	70×65	25	

No.	図	位　置	平面形	断面形	平面規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
34	48	II区 北東	円　　形	三角形	50×50	10	
35	48	〃　北	〃	台　形	35×35	10	
36	48	〃　〃	〃	皿　形	50×50	10	
37	48	〃　〃	〃	三角形	40×35	10	
38	48	〃　東	〃	半円形	40×35	25	
39	48	〃　北東	〃	台　形	40×35	20	
40	49	〃　東	〃	半円形	45×45	30	
41	49	〃　〃	〃	〃	35×35	15	
42	49	〃　〃	楕　円　形	〃	45×40	20	
43	49	〃　〃	円　　形	台　形	40×40	10	
44	49	〃　〃	楕　円　形	三角形	45×35	10	
45	49	〃　〃	円　　形	半円形	50×45	10	
46	49	〃　〃	楕　円　形	台　形	55×45	20	
47	49	〃　〃	円　　形	半円形	40×35	5	
48	49	〃　〃	〃	〃	45×40	10	
49	49	〃　〃	〃	〃	40×40	10	
50	49	〃　〃	〃	三角形	45×45	20	
51	50	〃　〃	楕　円　形	半円形	50×45	20	
52	50	〃　〃	円　　形	〃	45×45	20	
53	50	〃　北東	〃	台　形	65×60	20	
54	50	〃　中央東	楕　円　形	〃	115×80	20	上～中層まで集石。33住を切る。
55	50	〃　中央	〃	〃	180×130	20	32住に切られる？
56	50	〃　〃	〃	半円形	45×35	20	
57	50	〃　中央北	円　　形	台　形	70×65	15	
58	58	〃　中央東	〃	皿　形	50×45	10	33住を切る？
59							欠番
60	51	III区 西端	楕　円　形	三角形	85×55	30	土壙62を切る。
61	51	〃　〃	円　　形	台　形	65×60	10	
62	51	〃　〃	長　方　形	長方形	160×125	15	
63	51	〃　〃	楕　円　形	台　形	95×80	15	
64	51	〃　西	円　　形	半円形	65×60	25	丹塗り鉢形土器出土。
65	51	〃　〃	〃	〃	60×50	20	
66	51	〃　〃	〃	台　形	45×40	15	
67	51	〃　〃	方　　形	〃	85×80	20	
68	51	〃　〃	円　　形	〃	35×35	10	

No.	図	位　置	平面形	断面形	平面規模(cm)	深さ(cm)	備　　考
69	52	Ⅲ区 中央	楕　円　形	台　形	150×70	20	39住を切る。
70	52	〃　〃	長　方　形	不定形	125×70	20	
71	52	〃　〃	円　　形	台　形	90×80	20	
72	52	〃　〃	楕　円　形	不定形	150×80	30	39住を切る。
73	52	〃　〃	〃	台　形	140×75	20	38住を切る。
74	52	〃　〃	〃	〃	170×100	20	39住を切る。
75	53	〃　〃	長　方　形	〃	105×75	15	
76	53	〃 中央北	不整方形	〃	115×80	30	40住を切る。
77	53	〃　〃	円　　形	〃	95×85	25	
78	53	〃　西	〃	〃	50×50	15	
79	53	〃　〃	〃	半円形	30×20	10	
80	53	〃　〃	楕　円　形	皿　形	75×70	10	
81	53	〃　〃	円　　形	三角形	35×35	20	
82	53	〃　〃	〃	半円形	30×25	10	土壙83に切られる。
83	53	〃　〃	〃	台　形	45×45	15	
84	54	Ⅰ区　東	〃	〃	85×85	10	土壙99に切られる。
85	54	〃　〃	〃	方　形	30×25	10	
86	54	〃　〃	方　　形	半円形	50×40	20	
87	54	〃　〃	楕　円　形	台　形	60×50	15	
88	54	〃　〃	円　　形	長方形	50×45	20	
89	54	〃　〃	〃	〃	45×40	20	
90	54	〃　〃	〃	三角形	35×30	10	
91	54	〃　〃	〃	長方形	45×40	25	
92	54	〃　〃	楕　円　形	方　形	40×30	35	
93	55	〃　〃	不整楕円形	不定形	40×35	30	8住と切合。
94	55	〃　〃	円　　形	三角形	55×50	35	〃
95	55	〃　南東	楕　円　形	皿　形	140×115	10	
96	55	〃　〃	円　　形	台　形	40×40	20	
97	55	〃　〃	〃	方　形	45×35	35	
98	55	〃　南端	〃	台　形	45×45	30	
99	54	〃　東	楕　円　形	〃	70×35	15	
100	55	〃　〃	円　　形	半円形	35×30	20	14住を切る。
101	55	〃　〃	楕　円　形	台　形	45×30	20	〃
102	56	Ⅱ区 南西	〃	半円形	95×70	30	壺形土器埋設（土器棺？）。18住を切る。

図　　版

調査地遠景



II区

II区発掘風景

第Ⅰ図版　調査地風景

第１号住居址

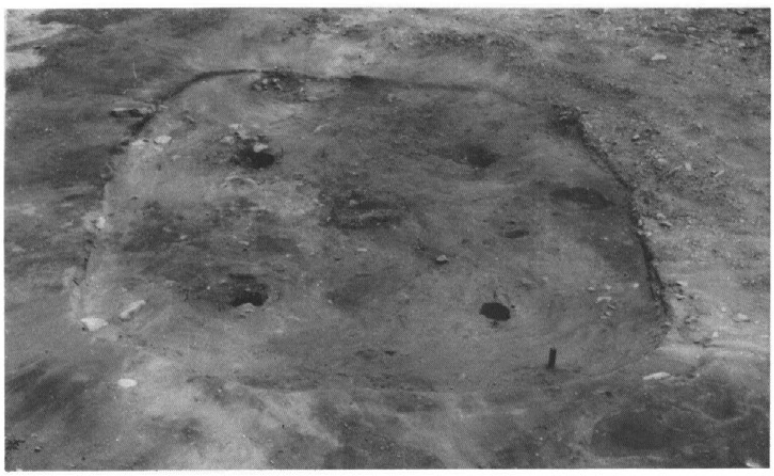
第２号住居址

第３号住居址

第２図版　住居址　（Ⅰ）

第４号住居址

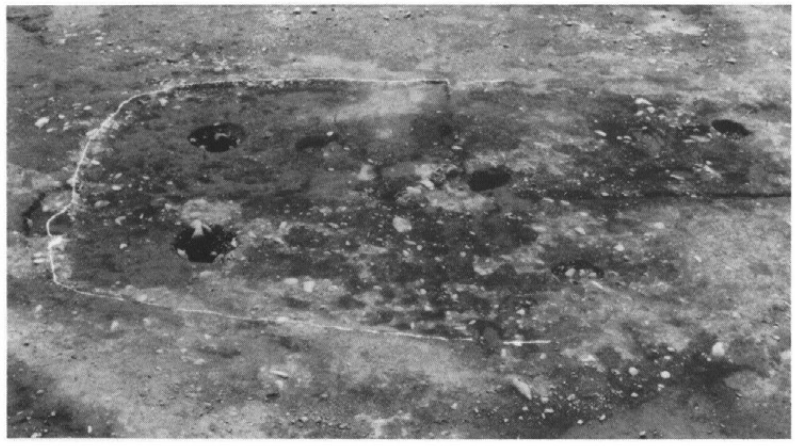
第６・11号住居址



第７号住居址

第３図版　住居址　（２）

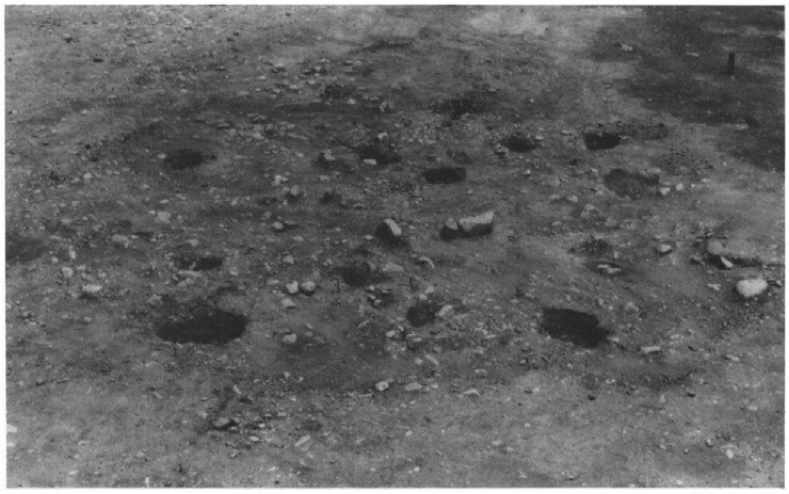
第8・12号住居址



第9号住居址

第10号住居址

第4図版　住居址　（3）

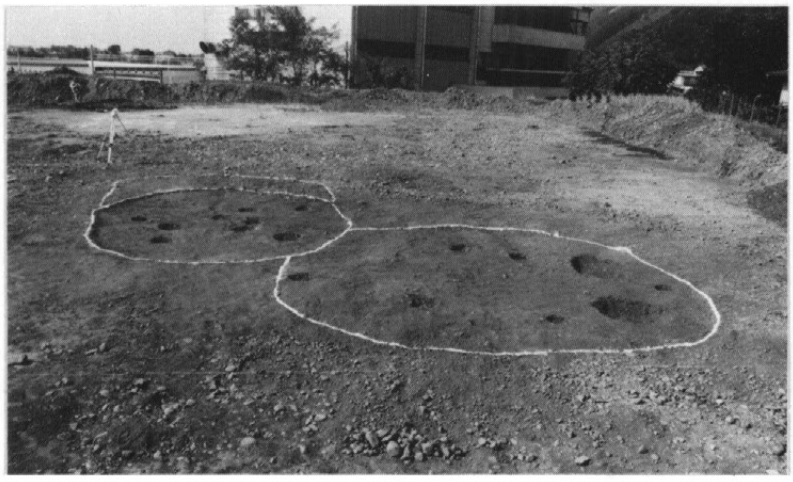


第13号住居址

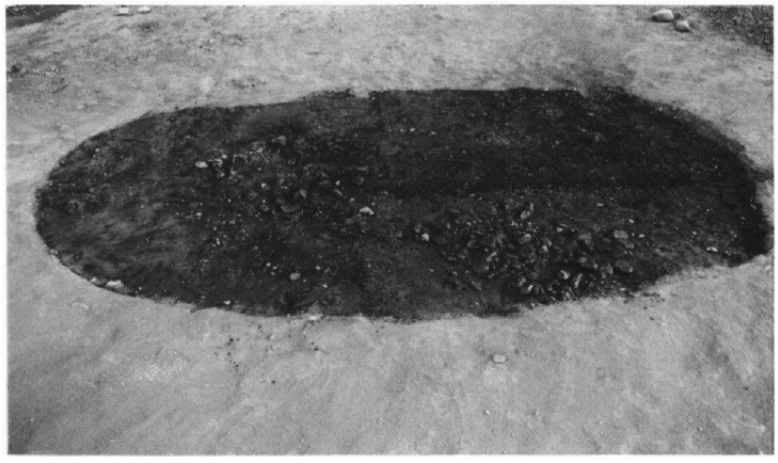
第17号住居址

第19号住居址

第５図版　住居址　（４）

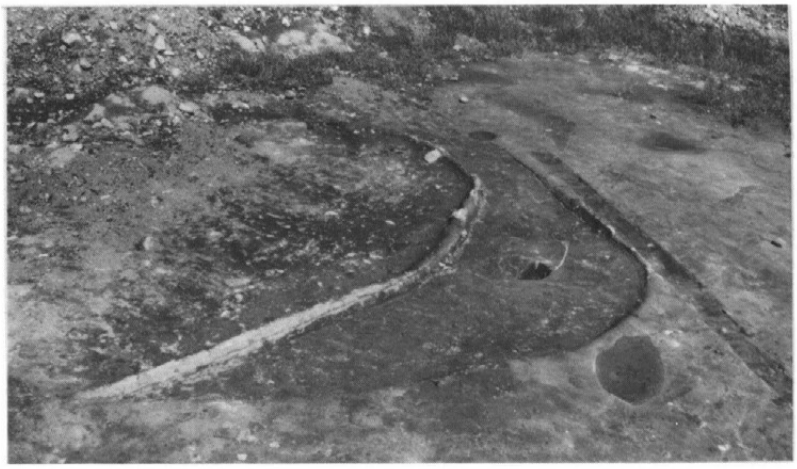


第24・25・27号
住居址

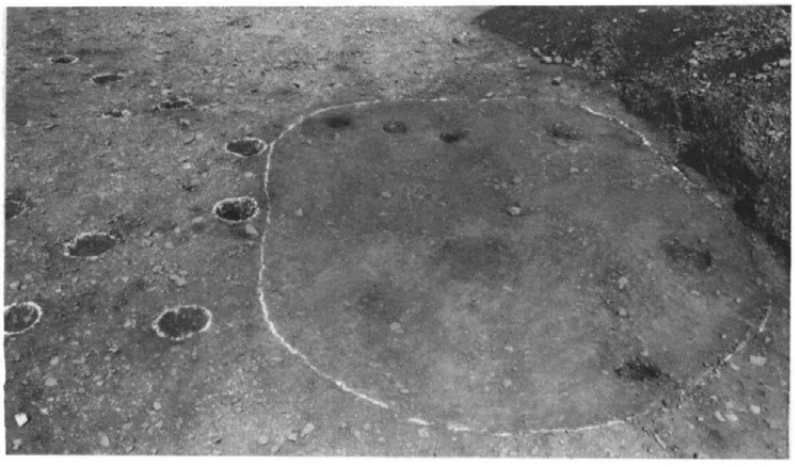


第26号住居址

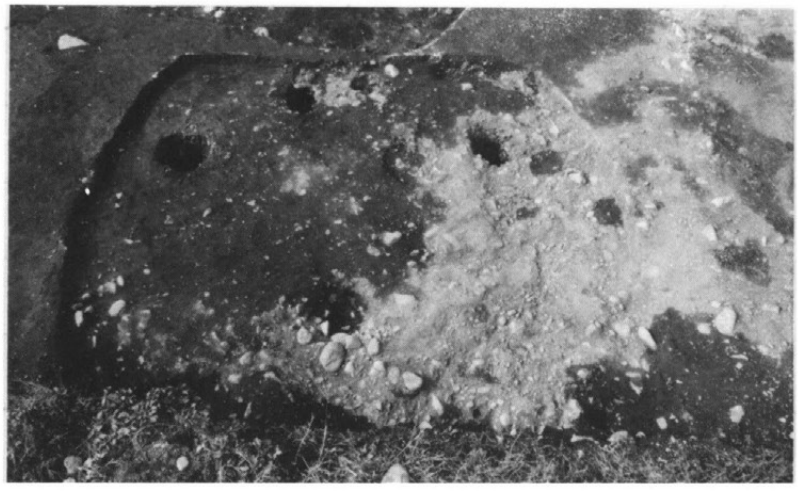
第28・32号住居址



第29・30号住居址



第31号住居址



第36号住居址

第７図版　住居址　（６）

第37号住居址

第38号住居址

第41号住居址
土壙76・77

第8図版　住居址　（7）

第５号住居址
礫・遺物出土状況

同
遺物出土状況

第５・15号住居址

第５号住居址
土器製作工房址

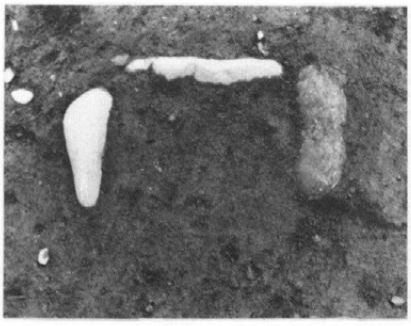
同
作業台

同
第１・２号炉

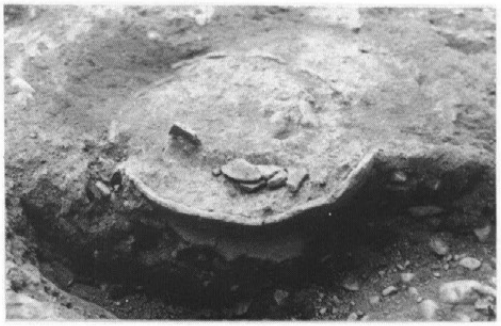
第10図版　住居址　（９）

第１号住居址　埋甕炉

第４号住居址　埋甕炉



第６号住居址　石囲炉

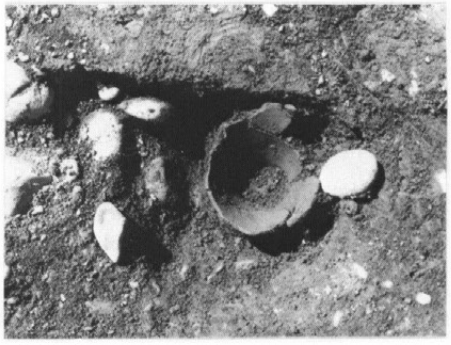


第６号住居址　埋甕炉

第17号住居址　埋甕炉

第19号住居址　埋甕炉

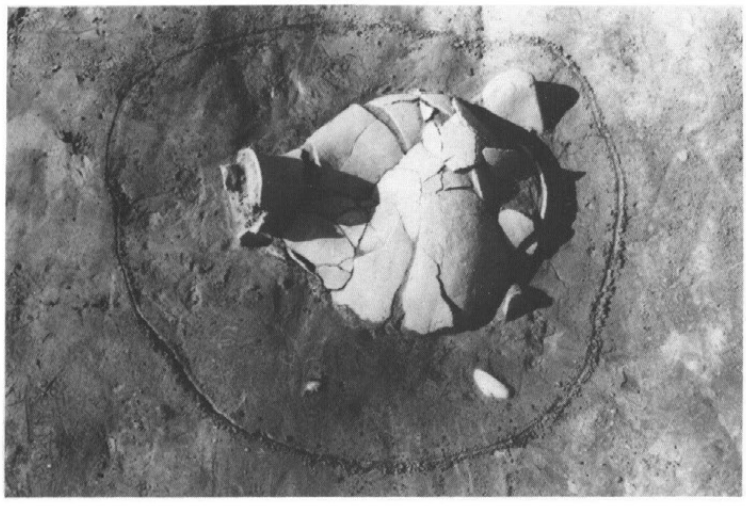
第26号住居址　埋甕炉



第36号住居址　埋甕炉

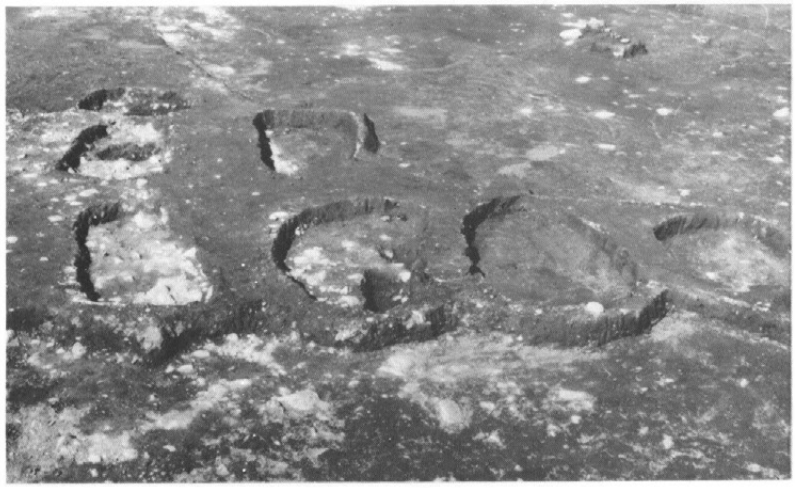
溝1
第18号住居址

土壙25

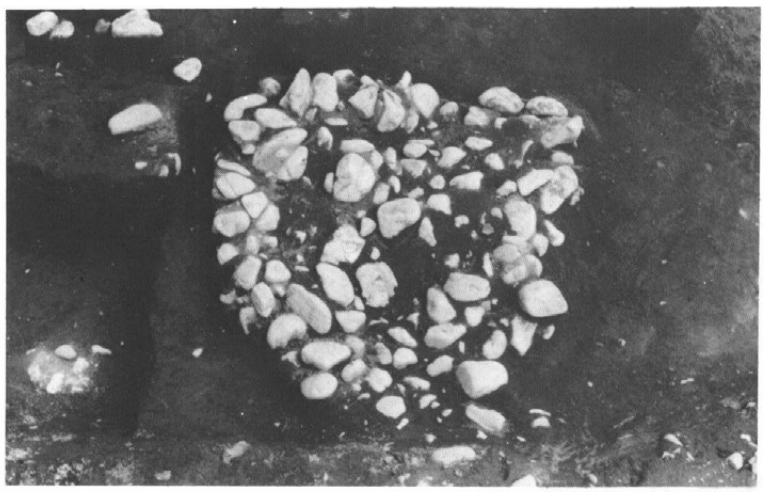


土壙102

第12図版　溝・土壙(Ⅰ)



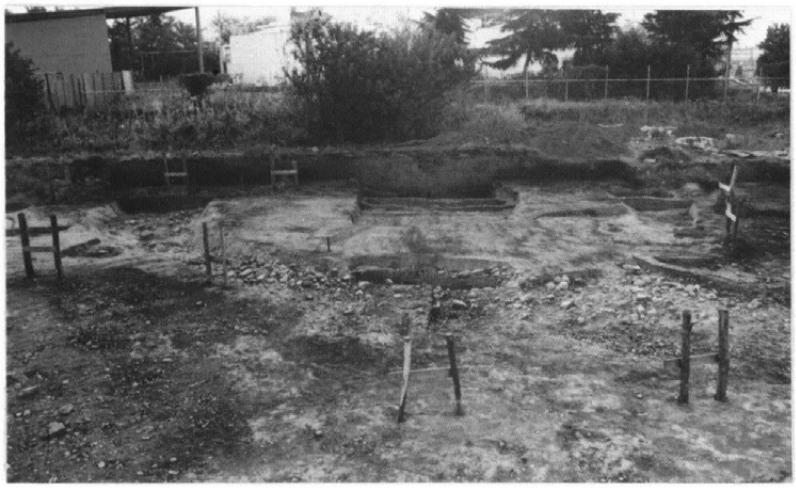
土壙69～75



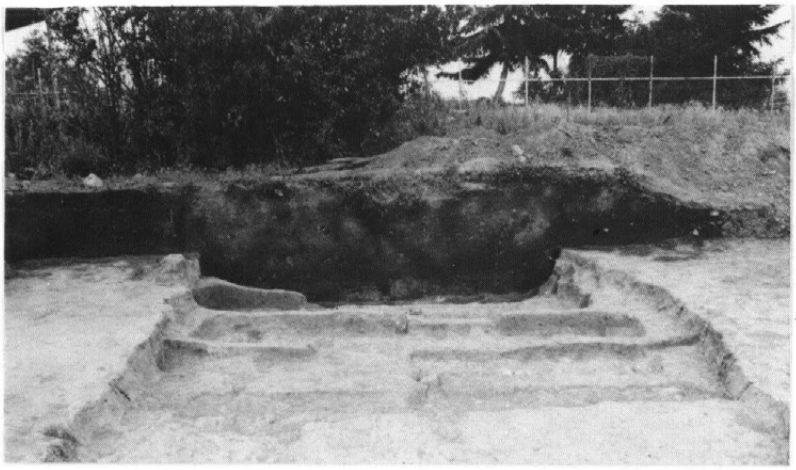
集石1

集石5

第13図版　土壙(2)・集石



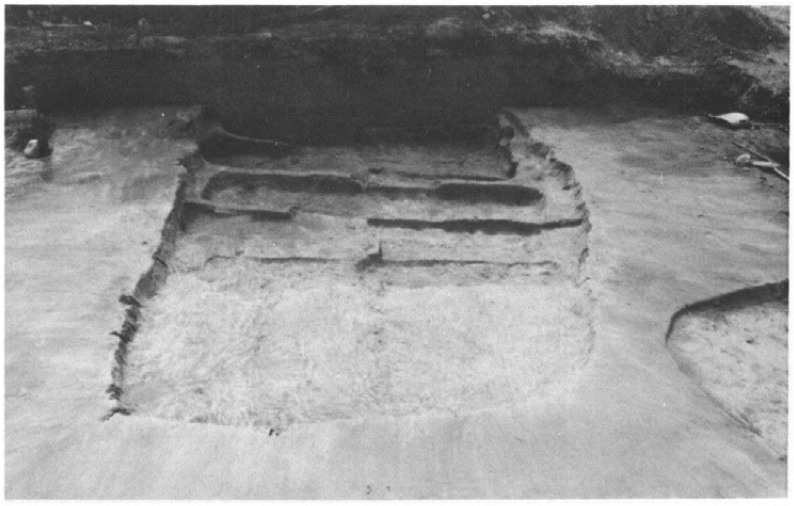
古墳
遠景



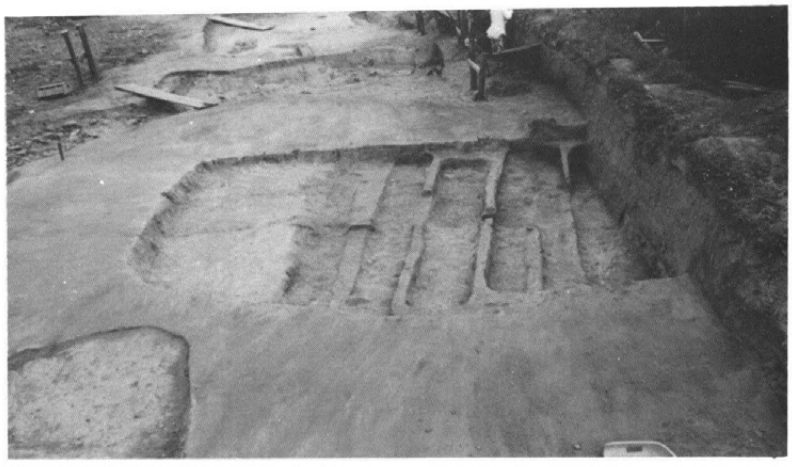
古墳
墳丘

同
墓壙北側セクション

第14図版　古墳　（1）



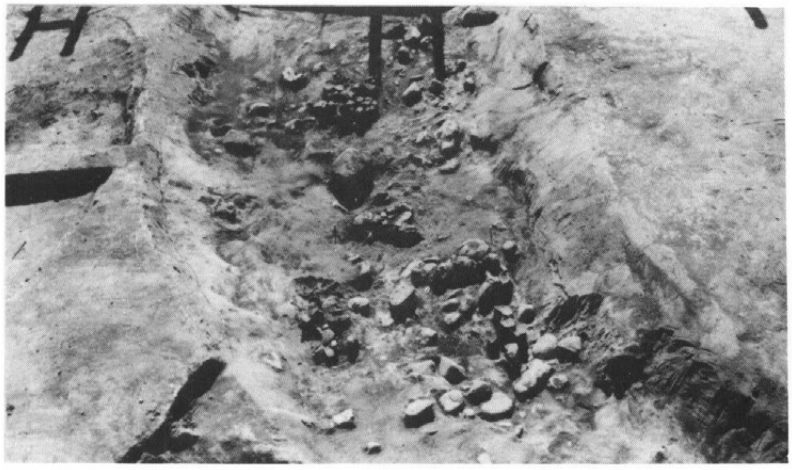
古墳
墓壙(東から)



同
墓壙(北から)

同
周溝内埋葬施設

第15図版　古墳　(2)



古墳
周溝(南側)

同
周溝(南側)

同
周溝内土器出土状況

第16図版　古墳　(3)

松本市文化財調査報告No.45

—松本市宮渕本村遺跡—

昭和61年3月20日　印刷
昭和61年3月31日　発行

発行　松本市教育委員会

印刷　株式会社　綜合印刷所